

史 跡

上之國勝山館跡 III

—昭和56年度発掘調査整備事業概報—



国産陶磁器(瀬戸・美濃)

1982・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之國勝山館跡 Ⅲ

—昭和56年度発掘調査整備事業概報—

増刷にあたって

史跡上之国勝山館跡、花沢館跡環境整備事業は、昭和54年度を初年度として勝山館跡の発掘調査を進めているが、多大な成果を修めつつ5年目を迎えようとしている。この間上ノ国町教育委員会は各年度ごとにその調査概報を発表し成果を問うている。

北海道中世史を歴史考古学によって究明しようとする画期的この事業は、次々と新事実が発見され、諸問題が氷解していく成果と相まって、斯界の注目を集めるところとなっている。そのため年々発表する概報を希望する研究者が多く、求めに応ずる事が出来ない現況である。御承知のように事業費のなかで発行する報告書の印刷部数には当局から制限があり、研究者にとっては痛恨の限りである。

今回、57年度概報Ⅲが発刊されるにあたり、桧山考古学研究会はこれらを増刷出来ないものかと上ノ国町教育委員会に提言申しあげたところ、御理解をいただき、その御好意によって、今後本会において増刷することの快諾を得、発行の運びとなったものである。

増刷にあたり上ノ国町教育委員会の御理解と御好意に敬意と感謝を申し上げるとともに、これが地域の理解を深め、斯界の研究の一助ともなれば、本会の目的の一に適うところでもありこれに過ぎる喜びはない。

1983年4月

桧山考古学研究会々長 宮 下 正 司

序

上ノ国町が昭和54年度から国、道の補助を得て実施してきました史跡上之国勝山館跡発掘調査及び環境整備事業は、本年度で3年次を迎えたところであります。昭和56年度発掘調査では中世史研究上極めて貴重な資料となる遺構、遺物が昨年に引続き数多く得られました。とくにその中で注目されたのは勝山館跡後方部より多数の土葬墳墓が発見され、その墳墓は木棺が納められていたことがわかり内部からは腐食されずに残っていた人骨の一部、渡来銭、木棺に用いたとする鉄釘等、出土しました。遺物では陶磁器、金属製品、骨角製品、石製品、木製品が出土し、特に木製品は当時の沢跡より多量に出土しており、当時の人々の日常生活を解明する上で貴重な資料が得られたところであります。

又、今年はこれも国の補助を得て館後方部、夷王山墳墓群の範囲確認調査を進めたところ同指定墳墓と同形態をなすものが数百基確認され本館との関連の解明が、いそがれることになりました。環境整備事業では55年度検出された壕跡部分の一部を芝張で整備することができ今後上之国中世史跡公園として公開出来る日を念願するものであります。

事業の執行にあたり文化庁、北海道教育委員会ははじめ絶大なる御支援御協力をたまわりました関係各位の皆様に心から御礼申し上げる次第であります。

昭和57年3月

北海道桧山郡上ノ国町教育委員会

教育長 青 柳 隆

本文目次

序
本文目次 / 挿図目次
例言 / 参考文献

I	調査の概要	2
II	遺構	2
1	土葬墳墓	3
2	道路状遺構	12
3	溝遺構	15
III	遺物	15
1	陶磁器	15
2	鉄・銅製品	16
3	石製品	17
4	古銭	17
IV	魚貝層出土の木製品	17
1	出土状況	17
2	層序	17
3	出土遺物	18
V	勝山館跡土葬墳墓出土の人骨及び動物遺存体	21
	土葬墳墓出土の人骨	21
	動物遺存体	21
1	出土遺物の概要	22
2	出土動物遺存体種名	22
VI	おわりに	23

挿図目次

第1図	グリッド配置図	1
第2図	第1号墓(上墓塚実測図、下出土遺物)	5
第3図	第2号墓(上墓塚実測図、下出土遺物)	6
第4図	第3号墓(上墓塚実測図、下出土遺物)	7

写真目次

PL1	舶載陶磁器(白磁、染付)	51
PL2	舶載陶磁器(染付、青磁)	53
PL3	舶載・国産陶磁器(天目碗、皿)	55
PL4	国産陶磁器と漆器(盃)	57
PL5	航空写真(56年11月撮影)	59
PL6	壕跡部遠影1(発掘前)	60
	壕跡部遠影2(発掘後)	60
	作業風景1(土堤部)	60
	作業風景2(壕跡部)	60
	道路状遺構全景	60
	溝遺構全景1(北東より)	60
PL7	溝遺構全景2(南西より)	61
	溝遺構全景3(北東より)	61
	道路状遺構及び溝遺構セクション	61
	1号墓セクション	61
	1号墓出土の古銭	61
	1号墓全景	61
PL8	2号墓セクション	62
	2号墓全景	62
	3号墓全景	62
	4号墓セクション	62
	4号墓全景	62
	4号墓出土の人骨及び古銭	62
PL9	5号墓セクション	63
	5号墓出土の人骨	63
	6号墓セクション	63
	6号墓全景	63
	7号墓の確認面	63
	墳墓群の実測作業	63

第5図	第4号墓(左)、第5号墓(右)(上墓塚実測図、下出土遺物)	8
第6図	第6号墓(上墓塚実測図、下出土遺物)	9
第7図	第7号墓(上墓塚実測図、下出土遺物)	10
第8図	墓塚軸方位と木棺軸方位(頭位)	12
第9図	道路状遺構及び溝遺構実測図	13
第11図	舶載陶磁器(白磁、染付)	25
第12図	舶載陶磁器(染付、青磁)	26
第13図	舶載陶磁器と国産陶磁器(天目、瀬戸、美濃)	27
第14図	摺鉢	28
第15図	石製品(ふいごの羽口、石臼)	29
第16図	鉄製品、銅製品	30
第17図	古銭拓影図	31
第18図	木製品出土状況図(27K2、7区)	33
第20図	木製品出土状況図及びセクション図(27K20、27J16、17区)	35
第22図	木製品(漆器、その他)	37
第23図	木製品(箸状木製品)	38
第24図	木製品(底板、蓋、折敷)	39
第25図	木製品(ヘラ、下駄)	40
第26図	木製品(下駄)	41
第27図	木製品(錐、クシ状木製品、ヘラ、その他の木製品)	42
第28図	木製品(杭状木製品、クシ状木製品)	43
第29図	木製品(浮子、箕、その他)	44
第30図	木製品(鞘、その他)	45
第31図	木製品(弓状木製品、杭状木製品)	46
第32図	木製品(棒状木製品、鞘)	47
第33図	木製品(その他の木製品)	48
第34図	木製品(その他の木製品)、骨角製品	49
第35図	木製品(下駄、丸未舟状木製品)	50

第1表	墳墓出土の古銭一覧表	12
第2表	土層サンプルに含まれる魚類椎骨数量	23
第3表	古銭一覧表	32

附図1 壕跡部遺構分布図
附図2 壕跡部地形図

	墳墓群遠景	63
PL10	木製品出土状況(27K2、7区)	64
	木製品出土状況(27K7区)	64
	水汲み作業(27K20区)	64
	27K20区北壁セクション	64
PL11	鏝の一部	65
	天目碗	65
	石製羽口	65
	漆器1(盃)、漆器2(碗)	65
	漆器3(碗)、桶底板、錐	65
PL12	鞘、弓状木製品、下駄、ヘラ、曲物の底板、曲物	66
PL13	杭状木製品、その他、板材、小物入れ状木製品、樹皮、獣骨1、獣骨2(鳥類)獣骨3(馬)	67
PL14	その他の木製品、丸木舟状木製品(北東より)、同2(南東より)、同3と下駄、調査後の壕跡部、芝張後の空壕A	68
PL15	墳墓出土の釘、釣針、古銭(上1号墓、下2号墓)	69
PL16	墳墓出土の釘、釣針、古銭(上3号墓、下7号墓)	70
PL17	墳墓出土の釘、古銭(上4号墓、下5号墓)	71
PL18	墳墓出土の釘、古銭(6号墓)	72
PL19	陶磁器、石製品	73
PL20	鉄製品、銅製品	74
PL21	古銭	75
PL22	木製品1	76
PL23	木製品2(ヘラ、箸状木製品)	77
PL24	木製品3(串、その他)	78
PL25	木製品4(蓋、底板)	79
PL26	木製品5(鞘、その他)	80
PL27	木製品6(弓状木製品、その他)	81
PL28	木製品7	82
PL29	木製品8(杭、板、樹皮、その他)	83
PL30	木製品9(下駄、その他)	84
PL31	漆器(碗)、骨角製品	85
PL32	第4号墓出土人骨、ウマの遺骸	86

例 言

1. 本書は、史跡上ノ国勝山館跡の昭和56年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。

2. 本年度の発掘調査は、次の体制でのぞんだ。

調査主体者 上ノ国教育委員会
教育長 青柳 隆
発掘調査担当 松崎水穂
調査スタッフ 齊藤邦典、藤田登
事務担当 山本吉春、山崎洋子
調査協力者 米田 裕、金津匡伸

3. 本書の作成は、齊藤、藤田、があたり執筆は項目別に分担し、各文末に文責を記した。

尚、Vは札幌医科大学解剖学教室百々幸雄、西本豊弘の両氏による

4. 整理作業には、草間、竹内、小滝、布施、沢村、笹浪、小林、上野、佐藤、森、が従事した。

5. 挿図作成は主に左記のものがあつた。

6. 挿図の中で示した北方位は、磁北を示すものである。

7. 挿図の縮尺は、8分の1、4分の1、3分の1、2分の1を用いている。

8. 遺物の写真撮影は、藤田が行つた。

9. 調査にあたっては、次の関係各位に多大なる御協力と御指導を賜つた。

土地所有者 米澤光一、草間恒二、中村広

奈良国立文化財研究所 沢田正昭
平安博物館講師 岩本義雄

金沢大学助教授 佐々木達夫

文化庁記念物課 仲野浩、牛川喜幸、高瀬要一、服部英雄、河原純之、西弘海

同建造物課 仲沢知士

東京大学名誉教授 三上次男

東洋文庫 渡辺兼庸

八戸市教育委員会 工藤竹久、佐

々木浩一、金津匡伸

浪岡町教育委員会 工藤清泰

北海道埋蔵文化財センター 大沼忠春、越田賢一郎

北海道教育委員会 竹田輝雄

北海道大学助教授 林謙作、吉崎昌一、岡田淳子、講師横山英介、松岡達郎

函館博物館 千代肇

宮城学院女子大助教授 工藤雅樹

北海道大学工学部教授 足立富士夫

松前町教育委員会 久保泰、鈴木正語、松谷太、松浦ゆかり(旧姓工藤)

七飯町教育委員会 石本省三

乙部町教育委員会 森 広樹

江差町教育委員会 宮下正司

又、多数の地元作業員による御協

力を得た。

参 考 文 献

草戸千軒町遺跡 1968~1979

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅲ~Ⅴ

(概報) 1973 福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所

泊崎城址 茨城県稲敷郡莩崎村泊崎
城址発掘調査報告書 莩崎村教育
委員会

後城遺跡調査報告書

秋田地所(有) 秋田市教育委員会

浪岡城跡Ⅱ 1978

浪岡町教育委員会

尻八館調査報告書

尻八館調査委員会

青森県の漁具 青森県立郷土館

函館志海苔古銭 1973

市立函館博物館

瀬田内チャシ跡遺跡発掘調査報告書

1980 瀬棚町教育委員会

考古学雑誌 第45巻第2・第4号

日本考古学会

北海道考古学 第17輯

北海道考古学会

松前藩と松前 松前町史編集室

アイヌの民具 1978

日本の古銭 1927

世界大百科事典 平凡社

史跡上之国勝山館跡Ⅱ(概報)

上ノ国町教育委員会



第1図 グリッド配置図

— I 調査の概要 —

本年度の調査対象は、昨年度に引き続き壕跡部で、総面積1700m²である。(第1図)

調査は5月15日から、11月17日までの181日間行った。調査内容は、御代参道路の東側約400m²、同道路の西側に沿って南北に走る、高さ約1m、長さ約50m、幅約5mの土堤の削除、25L区、26L、K区、27T、K、L区における旧地表面(Ⅲb層上面)までの掘り下げ約1200m²である。今回の調査の重点は当初、御代参道路の東側における空壕Bの確認、27K2、7区、20区の木製品の検出そして壕跡郡の地形図を作成することにあった。ところが26L区において土葬の墳墓郡が発見された為に途中同墳墓を優先させた。同区は、56年度の排土が山積みされており、重機によって除去した後調査する予定であったが、排土の少ない同区の東側4mグリット約4個分を発掘した所、13基の墳墓が発見された。その時点で調査についてスタッフで打ち合せた結果、半数の6~7基について発掘する事に決めた。結局、排土除去後の確認調査では、新に28基の墳墓が発見され、発掘したものも含めて41基であった。(附図1)

又、調査した墳墓はいずれも死者を木棺に納めた埋葬方法であることがわかった。木製品の検出は、6月から作業を開始し途中作業員を補充したりして総力を上げて進めたが、完掘に至るまでは6ヶ月を要した。27K2、7、20区では極めて多量の資料が得られた。27K20区は2m幅のトレンチ掘りであったが、湧き水がひどく一夜明けると水深約1m前後に溜まりポンプを使用しても半日を要す水汲み作業が続いた。土堤の削除は、猛暑について8月に行った。ちょうど江差高校のパー

部員8人が夏休みを利用して参加したため草薙りから始めた作業は、白色火山灰上面まで掘り下げるのに10日足らずで終了した。土堤削除の目的は、56年度の調査で確認された、道路状遺構とその真下にある溝遺構の検出の為である。排土の移動、空壕Aの芝張り作業は、10月より開始した。これは業者(伊藤組)に委託し約1ヶ月の期間を要した。測量は11月より開始、約6日間を要した。

地形図(附図2参照)は、等高線間隔10cm、縮尺100分の1で作成した。調査の方法は、55年度に従った。尚、遺物の取り上げには、種類別に色分けした遺物カードを用い、現場においてある程度の分類を行った。層序については、55年度の概報で述べた内容を補足する意味で27K20、27J16、17区、の部分に掲載した。尚、調査期間中、文化庁仲野浩調査官、北海道教育委員会文化課 竹田輝雄氏、北海道埋蔵文化財センター 越田賢一郎氏、北海道大学文学部助教授 吉崎昌一氏、岡田淳子氏、青森県八戸市教育委員会 佐々木孝一氏、松前町教育委員会 久保泰氏、鈴木正語氏、松谷太氏、松浦ゆかり氏(旧姓工藤)らが現地を視察し御助言をいただいた。又、8月から1ヶ月間調査に参加した、八戸工業大学4年の金津匡伸君には献身的な支援を受けた。最後に、長期間の調査を通し、賃金額以上の協力を惜しまない作業員一同について、氏名を明記し感謝の意を表する(敬称略、アイウエオ順)。

上野ヒデ、加賀トモ、加賀秋江、金子テイ子、草間美波子、小滝あけみ、小林静子、笹浪定子、沢村照子、竹内江美子、久未キミ子、布施未子、松原笑子、山崎洋子 (藤田 登)

II 遺構

本調査で発見された遺構は、土葬墳墓41基、溝状遺構、道路状遺構である。そして、空壕A、Bの延長部も多少確認された。空壕Aは、昨年調査した25L17、22区より西側へ約8m延びた所で寺の沢へ接続する。空壕Bは、Aと平行する様にさらに東側へ延びている。

御代参道路の東側(26J、I区)の平坦部にお

ける確認調査では、遺構が検出されなかった。

以下に各遺構について述べていきたい。

1. 土葬墳墓

本調査において土葬墳墓が発見されたのは、勝山館跡の後方(南西部)にあるやや低い台地である。この台地は、空壕Cに沿って寺の沢へ吸収さ

れる旧沢跡(Ⅲb, Ⅲcの堆積により完全に埋没している。)の左岸に位置し、若干北東側へ緩傾斜する。又、台地の北北西を流れる寺の沢の対岸には火葬墳墓群が分布する。

土葬墳墓はさらに、台地の南側を横切る指定地境界線をまたいで分布しており、境界線のあるあたりから、南方へ急傾斜を有す斜面上においても数基の墳墓が分布する可能性がある。

又、この急斜面を約10m昇り切ると舌状に張り出す台地があり、その先端に至るまで土饅頭を有する墳墓群(夷王山墳墓群の第1地区北端部)が隣接している。

土葬墓においては、土饅頭の有無がまったく確認できなかった。当初は旧地表面まで掘り下げる作業を進めるため、当地区にある55年度の排土を移動しながら10m四方の範囲で行った。当地区はⅢb層の堆積が極めて薄くⅣ層上面まで下げた所で墳墓のプランが確認された。以下に調査した7基の墳墓の概略を述べる。

第1号墓(第2図)

トレンチ掘りによって発見されたもので、当初は墳墓と気付かず、数点の釘が出土したが木棺の埋設状態は把握できなかった。

墓壇は約144cm×144cmの方形で深さ約80cmである。しかし、北側の立ち上りが若干低く一部削平さされている。長軸方位はN32°Eを示す。出土遺物は、埋土より釘5～6本、釣針1本、副葬品は古銭6枚である。人骨は発見できなかった。出土した釘の記録作成ができなかった為、木棺の規模等は不明。古銭は、壇底の南側に出土しておりほぼ一塊になっていた。これらは植物性繊維と思われる袋状の織物の中に入れて副葬されたものと思われる。解読された古銭は、祥符通宝の一例のみである。

埋土の堆積状況は、1層：黄褐色砂礫土、2層：暗褐色土、3層：明褐色砂礫土、4層：暗灰褐色土、5層：灰褐色砂礫土、となっており、1層～4層までは極めてソフトだが5層は固くしまっている。

第2号墓(第3図)

1号墓同様にトレンチにより発見されたもので、前墳墓の西側に位置する。

墓壇は約185cm×137cmの隅丸長方形を呈し、深さ約90cmである。長軸方位はN40, 5°Wを示す、出土遺物は埋土より鉄釘24本、釣針1本、副葬品

は古銭9枚、で人骨は四肢骨の一部と歯を残すのみで他の部位はほとんど腐食していた。古銭は、腰骨付近に植物性繊維によると思われる袋状の織物中に一塊になって出土したが解読が可能なものは一例もなかった。

鉄釘は、棺の四隅と思われる部分にそれぞれ10本位の割合で出土しているが、墓壇の北側半分はトレンチ掘りの時に埋土と共に取り上げてしまっているので二隅でしか確かな数値は述べられない。しかし、最下部の釘の位置から想定すると、木棺の規模は、長さ約95cm、幅約65cm、の長方形である。高さは、最上部の釘から壇底部を計ると約35cmあり、木質部の腐食を考えると40cm以上の高さが想定される。棺の長軸方位はE40°Sを示し、頭位は南東位である。埋土の堆積状況は、1層：黄褐色砂礫土(主に小礫でⅢcに対比される)2層：褐色土(やや粘性をおびⅤに対比されるものである)3層：黄褐色粘土(壁面のくずれ土で粘性が強くⅤに対比される)特に1a, b, 1dがやや固くしまっている。又、1層上面には、白灰火がブロック状に堆積している。

第3号墓(第4図)

Ⅴ層上面の精査によって発見されたもので、南側には1号墓、東側には4号墓が隣接する。墓壇は、約185cm×150cmの隅丸方形を呈し、深さ約74cmである。長軸方位はN29, 5°Eを示す。

出土遺物は埋土より釘27本、釣針1本で副葬品は、古銭18枚、漆器1点(皮部のみ)である。人骨はほぼ完全に腐食しており、歯が検出された他は輪郭が確認できる程度の状態であった。

古銭は、1個分が3枚重ねの状態でも6個分あり胸部分と足先の部分に散布している。いずれも解読が不可能である。

釘は、棺の四隅にそれぞれ4～5本ずつと、隅と隅の中間部に1本ずつ出土している。釘の位置から想定すると棺の大きさは、長さ約95cm、65cm、最上部の釘より計る高さは約35cmである。棺の長軸方向はN21°Wを示し頭位は北方位である。尚、皮部のみ検出された漆器は、頭骨付近で出土した。

埋土の堆積状況は、1層：暗褐色土(やや粘性をおび主にⅤ層に対比されるものである。)2層：黄褐色砂礫土(小礫が主でⅢcに対比される。)3層：暗黄褐色土(粘性が強くⅤ層に極めて近い)、となっており全体にやや固くしまっている。

第4号墓(第5図)

V層上面の精査によって発見されたもので、東側に3号墓が隣接する。墓壙は、約150cm×120cmの隅丸長方形を呈し深さは南側の立ち上りが約55cm、北側が約35cmでやはり北側が若干低い。

長軸方位は、N5.5°Wを示す。

出土遺物は、埋土より釘12本、副葬品は、古銭が11枚、毛髪1束が検出された。人骨は、約半分残っていた頭骨と歯、四肢骨の一部と思われる部位を検出した他は完全に腐食していた。

古銭は、胸部と、四肢骨(大腿骨と推定される部位)の部分に出土しており、1個分が3枚重ねあるいは1枚重ねのものがある。銭名が解読可能なものは、太平通宝、天祥通宝、元豊通宝の3枚である。釘は、棺の四隅に3～5本ずつ出土している。釘の位置から想定される大きさは、長さ約100cm、幅70cmで、高さは釘の最上部から計っても約20cmたらずである。これは多少削平された可能性がある。棺の長軸方位は、N10°Eを示し、頭位は北方位である。

埋土の堆積状況は、1層：暗褐色土(若干粘性をおび小礫を多少含む。)RB(V層に対比される)となっており全体にやや固くしまっている。

第5号墓(第5図)

IV層上面の精査より発見されたもので、北側に6号墓が隣接する。墓壙は、約130cm×100cmの隅丸長方形を呈し深さは、南側が約30cm、北側は約5cmでほとんど残っていない。長軸方位は、N3°Wを示す。

出土遺物は埋土より釘6本、小札1点、副葬品は、古銭11枚である。人骨は、頭骨約半分、歯、四肢骨の一部と思われる部位を検出した他は完全に腐食していた。古銭は、頭骨付近(肩のあたり)と四肢骨付近に出土している。銭名解読可能なものは、開元通宝、太平通宝、宗徳元宝、祥符通宝、天禧通宝、皇宗通宝、元豊通宝、元祐通宝の8枚である。釘は、棺の南側二隅に2本～3本出土しているが、北側の二隅には1本を残すだけである。しかし最下部の釘の位置から想定される棺の大きさは、長さ約85cm、幅約50cm、高さは最上部の釘から約30cmある。当墓壙は、4号墓よりもさらに削平されている。棺の長軸方位は、墓壙のそれとほぼ変らない。頭位は北方位を示す。

埋土の堆積状況は、1層：暗褐色土(やや粘性

をおび多少RBが含まれる)2層：黄褐色土(V層に対比される)となっており、極めてソフトである。

第6号墓(第6図)

V層上面の精査より発見されたもので、西側に5号墓が隣接する。墓壙は、約160cm×100cmの隅丸長方形を呈し、深さは南側で約65cm、北側で約25cmを有す。長軸方位はN18°Eを示す。

出土遺物は、埋土より釘が19本、副葬品は、古銭10枚である。人骨は歯が検出された他は頭骨が形態を確認できる程度で他の部位は完全に腐食していた。古銭は、胸部と四肢骨があったと推定される部分に出土している。銭名が解読可能なものは、開元通宝、元祐通宝、紹聖元宝、永樂通宝、朝鮮通宝の5枚である。

釘は、棺の四隅に4本～5本ずつ出土しており、釘の位置から想定すると棺の大きさは、長さ約90cm、幅約50cm、高さは釘の最上部より計ると約35cmである。棺の長軸方位はN19°Eを示し、頭位は北方位である。

埋土の堆積状況は、1層：黄褐色土(IIIc層に対比されるが小礫よりもローム粒が多く多少粘性をおびる)2層：暗褐色土(粘性がありソフト)となっており、1a、b、cはやや固くしまっているが下層部はややソフト

第7号墓(第7図)

V層上面の精査より発見されたもので、北側に6号墓、西側に5号墓が隣接する。墓壙は、約155cm×125cmの隅丸長方形を呈し、深さは南側で約45cm、北側で約10cmを有す。長軸方位はN24°Eを示す。

出土遺物は、埋土より釘が25本、副葬品は古銭が15枚である。人骨は、歯と四肢骨と思われる一部が多少検出された他はほぼ完全に腐食していた。

古銭は四肢骨の付近に出土している。銭名が解読可能なものはなかった。

釘は、棺の四隅に5本ずつ、北側と南側の中間部に1本ずつ出土しており、釘の位置から想定すると大きさは、長さ約95cm、幅約50cm、高さは最上部の釘から約40cmである。棺の長軸方位はN6°Eを示し頭位は北方位である。

埋土の堆積状況は、1層：黒褐色土(主に黒色土でII層に対比され、白色火山灰を若干含む)2

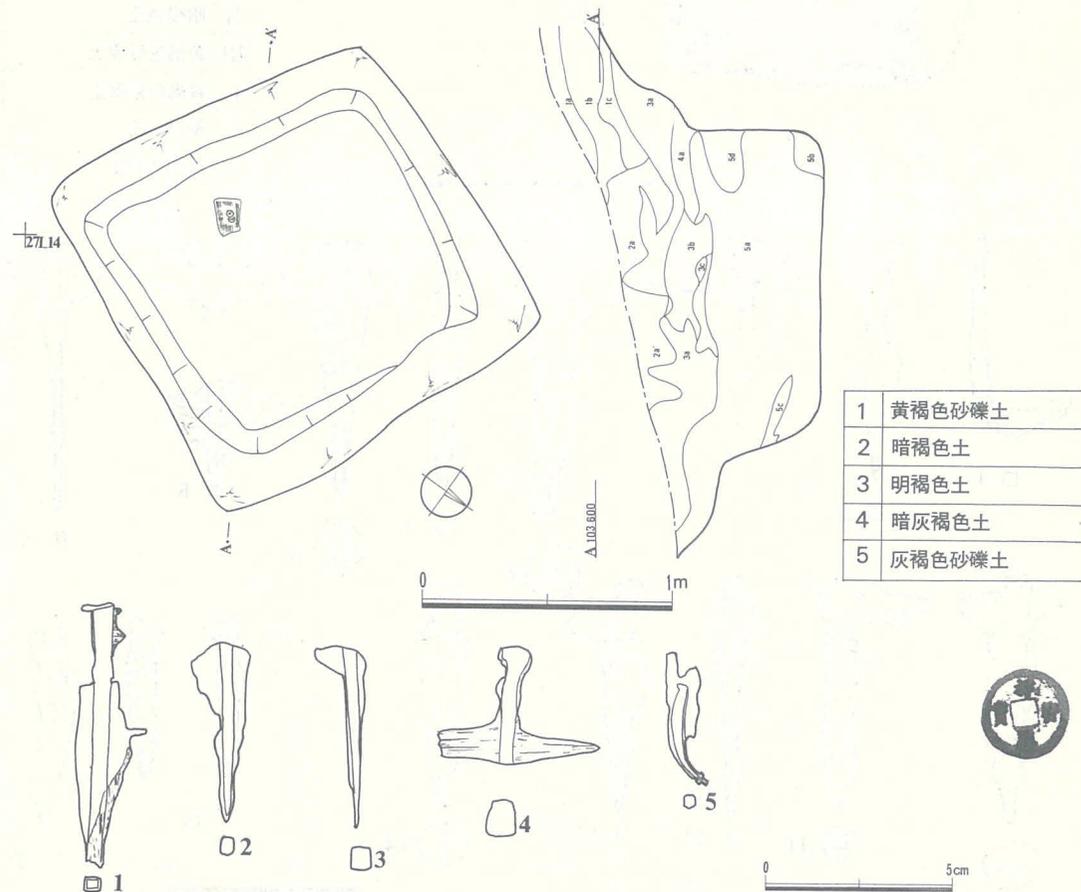
層：暗褐色土（黒色土及び若干の小礫が含まれるがⅡ層に対比されるものであろう）、3層：褐色砂礫土（ロームを若干含み粘性をおびるがⅢc層に対比されるもの）となっており壁沿いの3a、b、c、はやや固くしまっているが中央部はややソフトである。

以上が今回の調査で明らかにされた各墳墓の概要である。この他、同墳墓に混じって性格不明の小土壌が2基発見された。平面形が楕円形を呈し、長軸80cm、短軸70cm、深さ約30~40cmで緩傾斜の立ち上りを有す。覆土は主にⅤ層に対比される粘性の強い褐色土で若干小礫を含む。出土遺物は得られなかった。次に、これら土葬墓の諸特徴についてまとめてみたい。

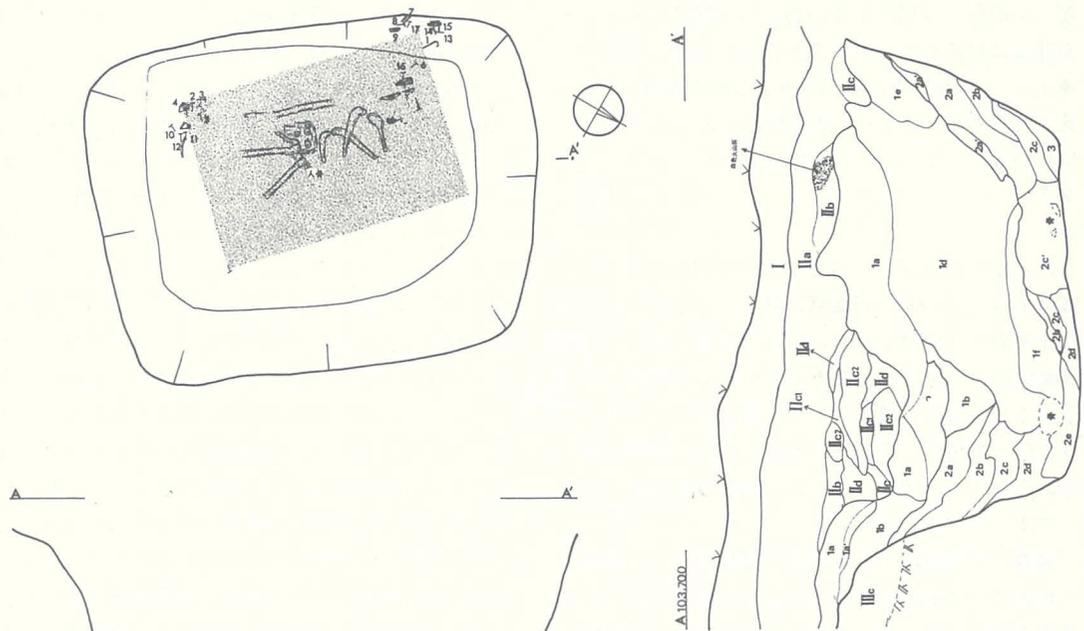
調査した墳墓はすべて木棺土葬墓である。墓壇の形状は、平面形が隅丸の正方形（第1号墓）か長方形（第2号~第7号墓）を呈している。方形が極たんに歪んだり、楕円形に近い平面形を呈す

るものはない。墳壇掘方は、かなり余裕をもって広く掘られている。調査した墓壇は、ほとんどが上部を削平されており、ひどいものは立ち上りが残っていないもの（第5号墓）もある。ある程度原形を保っている2号、3号墓の深さを計ると約90cm程度で、他の墓壇についてもほぼ同程度のものと考えられる。墓壇の長軸方位は第8図1の通りである。ほとんどは、真北か北北東にとっているが、2号墓のみ北北西である。

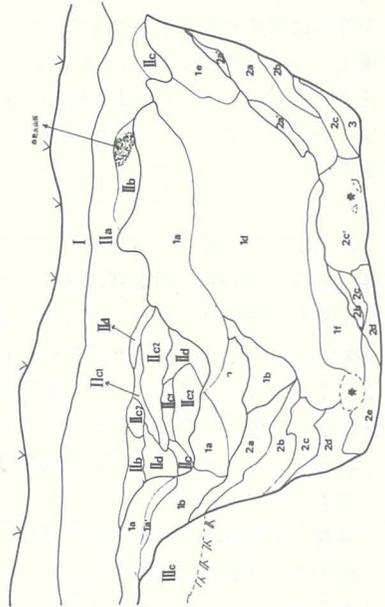
木棺は、出土した釘の位置からある程度の大きさが推定できる。長さ約95~100cm、幅約65~70cmのもの、長さ約90cm前後、幅約60cm前後のものがある。高さは、約40cm前後あるいはそれ以上のものと推定される。釘の出土状況は、四隅に5本ずつあるものと、10本ずつあるものに別れるようである。しかし棺の高さは、ほとんど一定しておりあまりばらつきはない。墓壇の深さと、棺の高さには約45~50cm位の差があり、墓壇の上部が削平されてる例が多いが、棺までは影響がないと



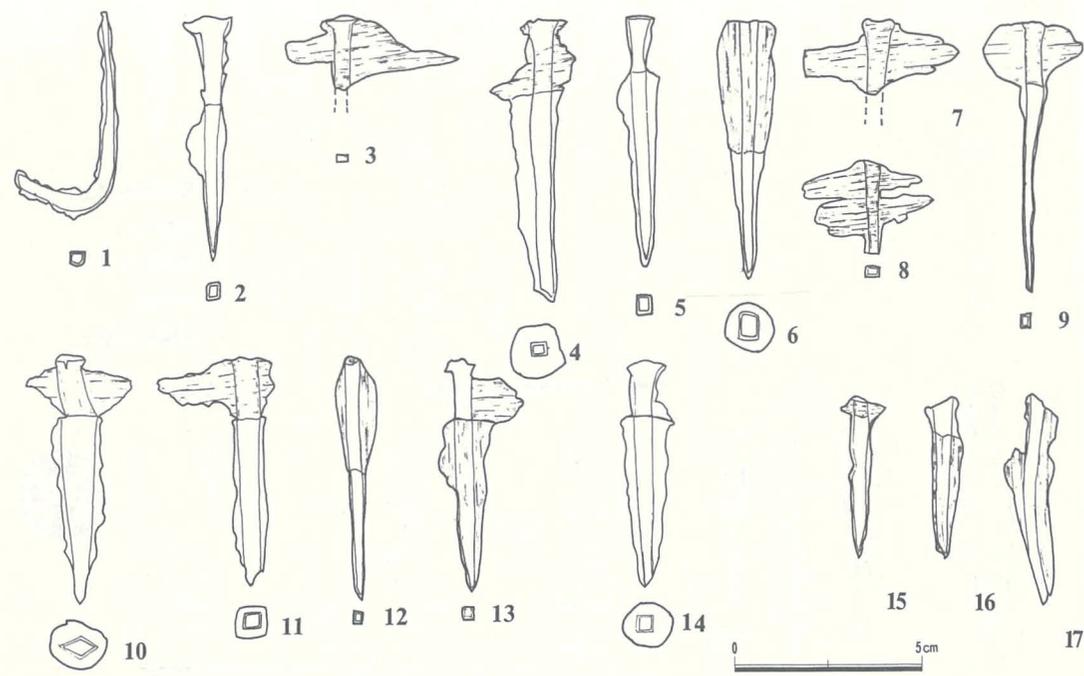
第2図 第1号墓(上墓壇実測図、下出土遺物)



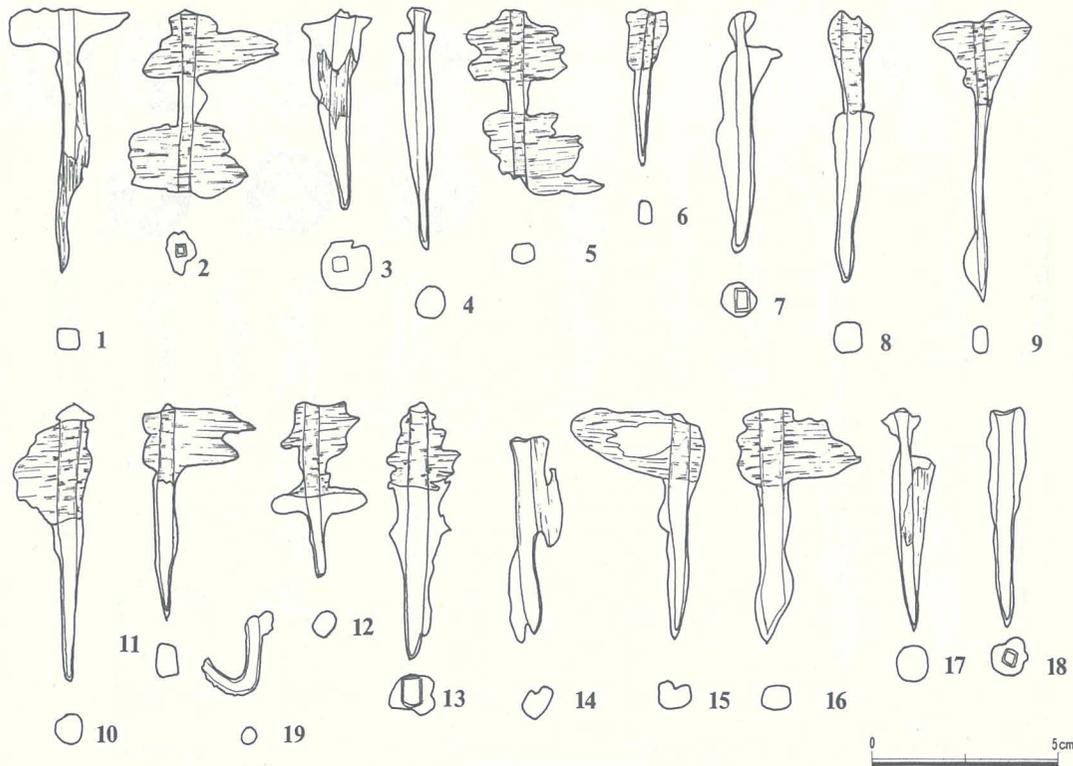
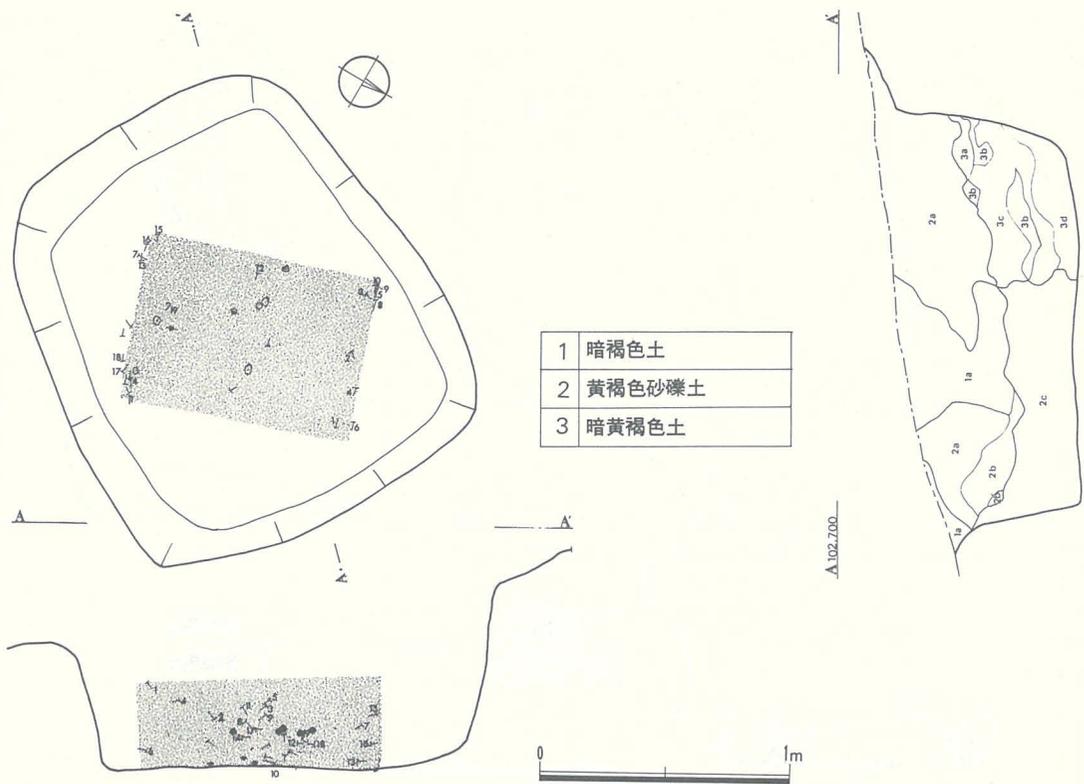
A.103.200.



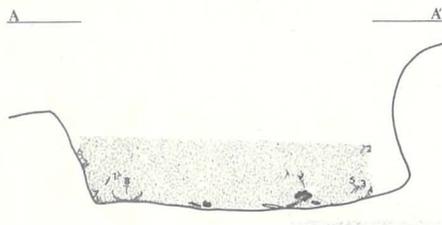
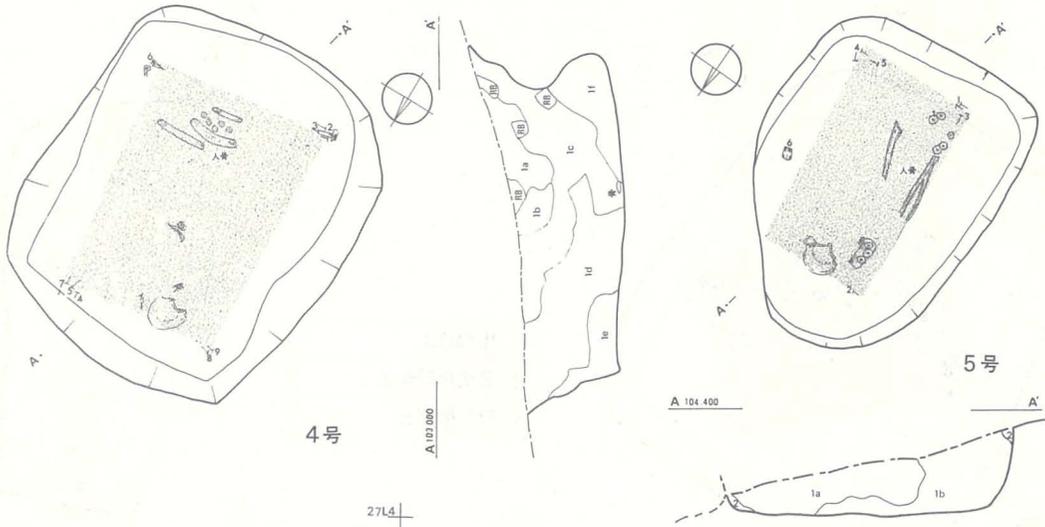
I	表 土
II	暗褐色土
IIIc	黄褐色砂礫土
1	黄褐色砂礫土
2	褐色土
3	黄褐色粘土



第3图 第2号墓(上、土城实测图·下、出土遗物)

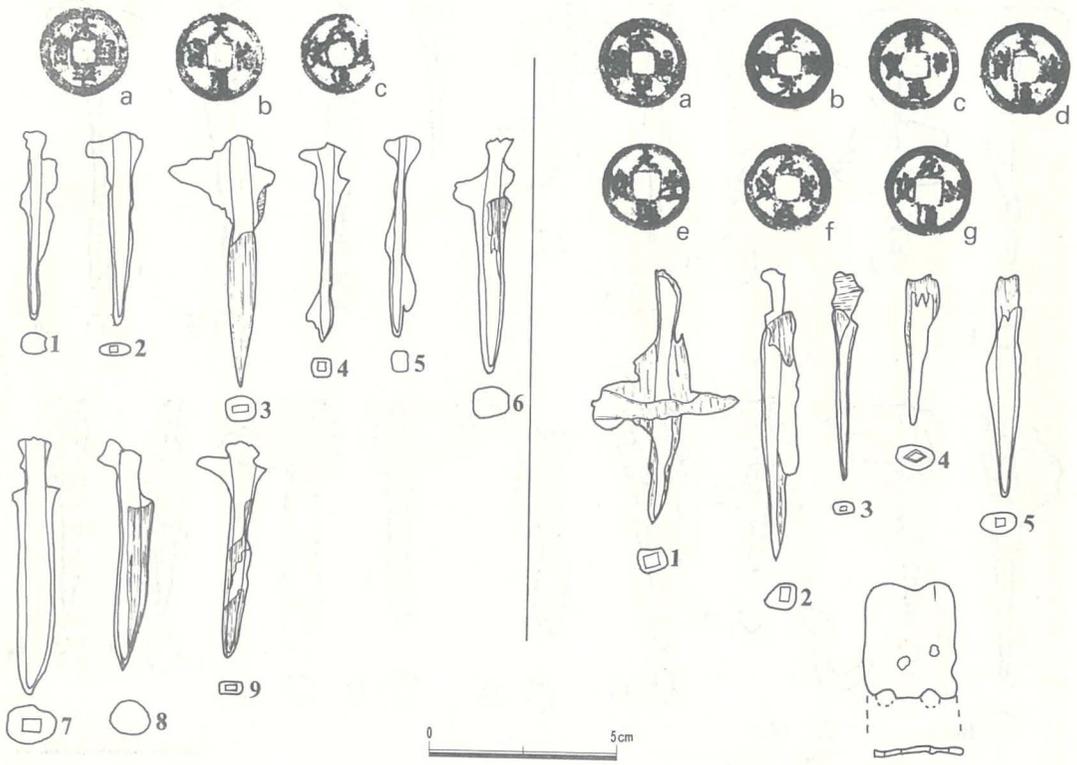


第4図 第3号墓(上、墓城実測図・下、出土遺物)

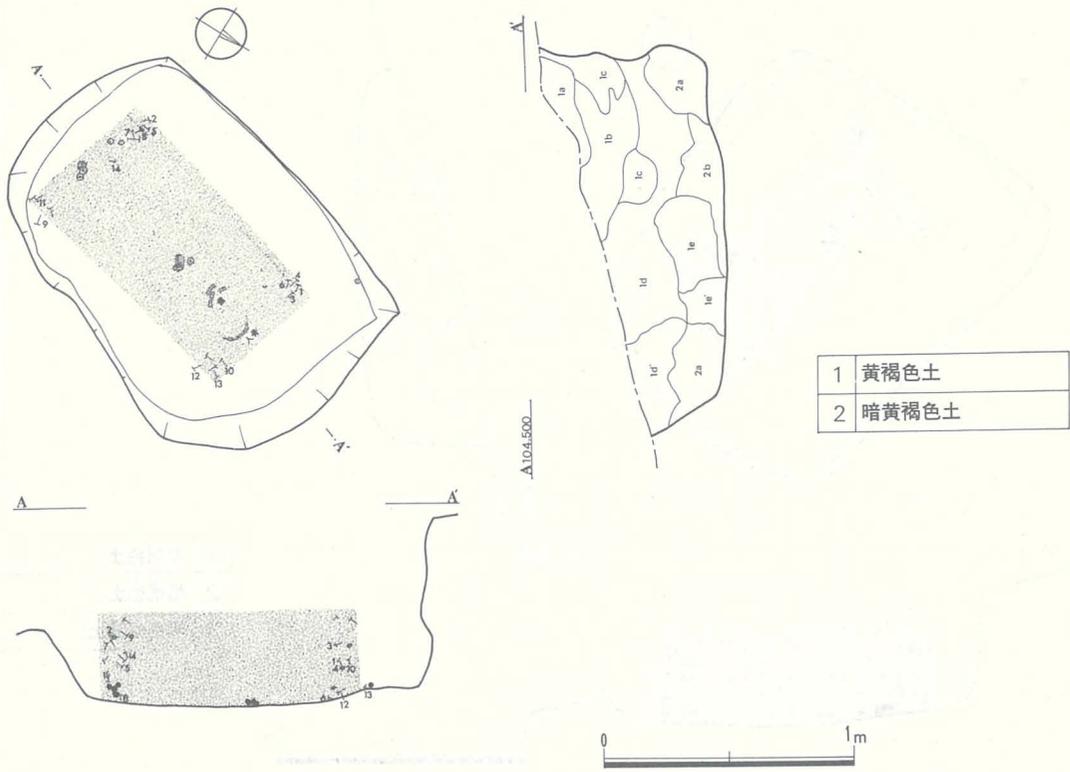


1	暗褐色土
RB	黄褐色粘土 (V層に對比される)

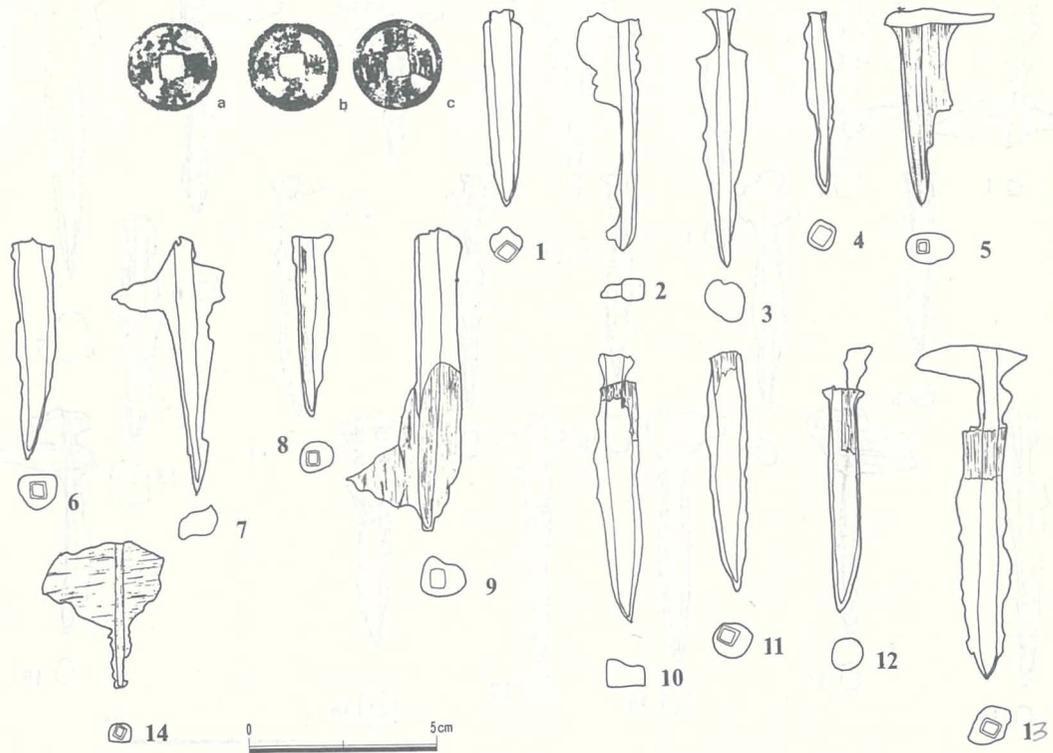
1	暗褐色土
2	黄褐色土



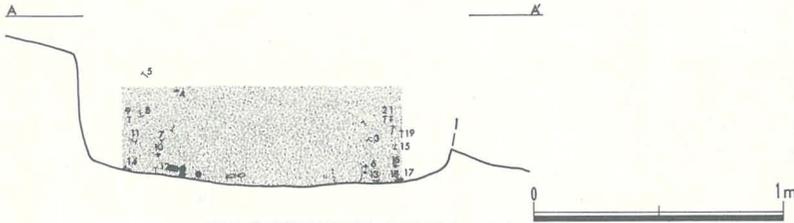
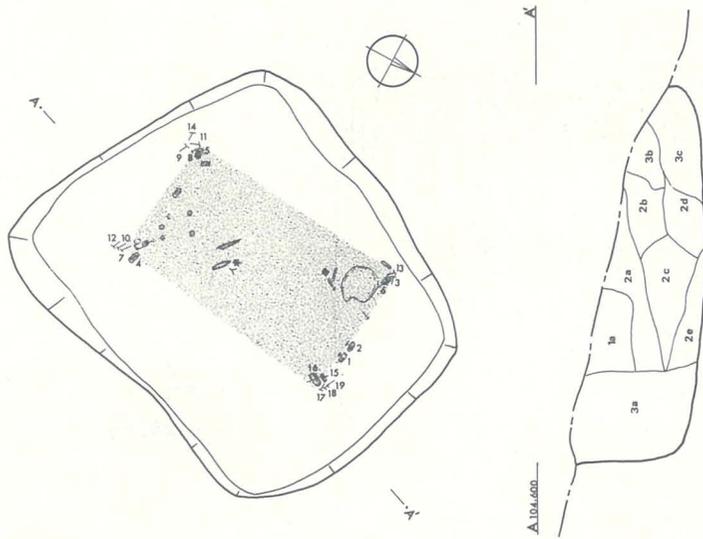
第5図 第4号墓(左)、第5号墓(右)(上、墓城実測図・下、出土遺物)



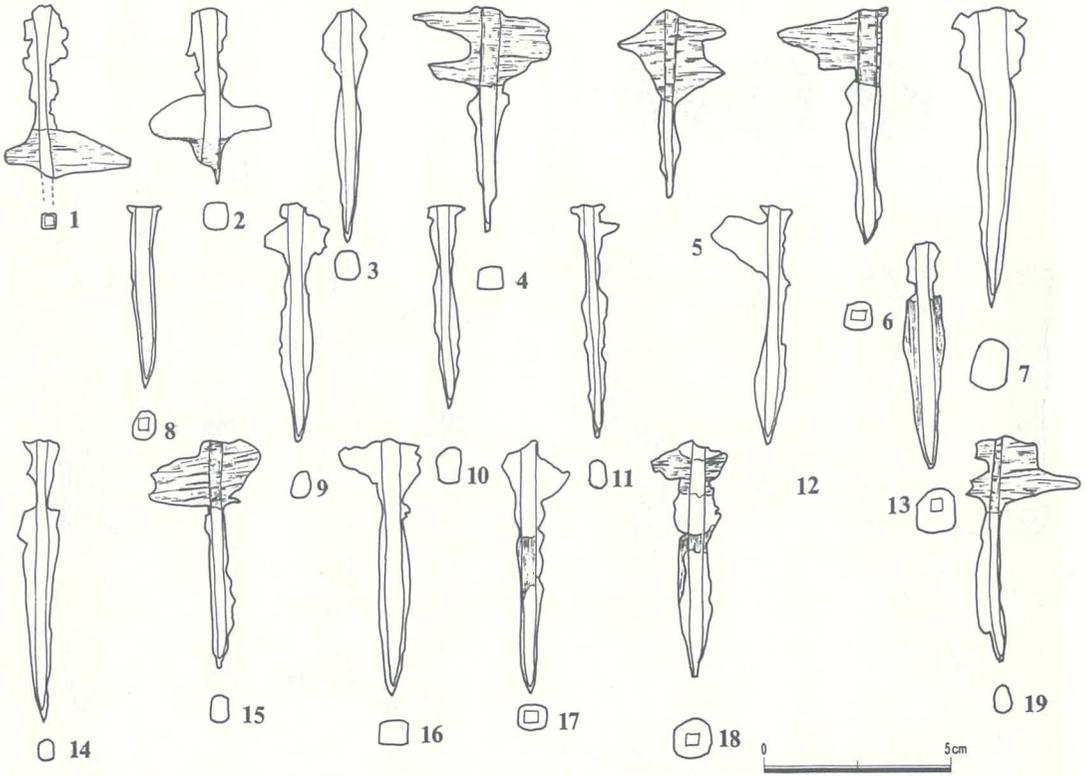
1	黄褐色土
2	暗黄褐色土



第6图 第6号墓(上、墓城实测图·下、出土遗物)



1	黒褐色土
2	暗褐色土
3	褐色砂礫土



考えていだろう。つまり棺は、少し扁平な箱型を呈するものと推定される。そこで死体を納める方法として考えられるのは、横に寝せた屈葬であろう。この場合、遺体を容易に棺に納める為に縄で縛ることが考えられるが、それとわかるものは発見できなかった。棺軸方位(第8図2)は北北西から北北東に集中し、頭位は2号を除き北方位である。

棺材に使われた板は比較的厚いものを用いたようである。出土した釘にはほとんどに木質部の附着がみられ、それによると厚さは約2cm位である。又、釘の出土状況からみて、上蓋、底板があったことも確認した。それは、一番上にある釘は、ほとんど縦位置の状態で先尖部を下に向けて出土している。又、人骨や古銭の真下に底板と思われる一部が残っていた。おそらく墓壙に納められた木棺は、すべて釘を打ちつけたものと推定される。棺に使用された釘は、いずれも鉄製品で断面が正方形あるいは、長方形を呈し、空洞になっている。(これは内部が腐食したものと思われる)又、中には菱形につぶれた様になっているものもある。釘の長さは、短いもので5cm程度、長いもので10cm程度、中間のもので6~8cmあり、中間のものが一番多い。太さは一定しており4~5mmである。長さによる釘の位置についてみると、四隅の上部にある釘は8cm以下のものがそろそろ傾向にある。つまり上蓋には、長身の釘を用いたと推定される。最下部にある釘は、いずれも横位置で出土しており、他の釘(体部に用いた釘)との区別がつかない状態である。

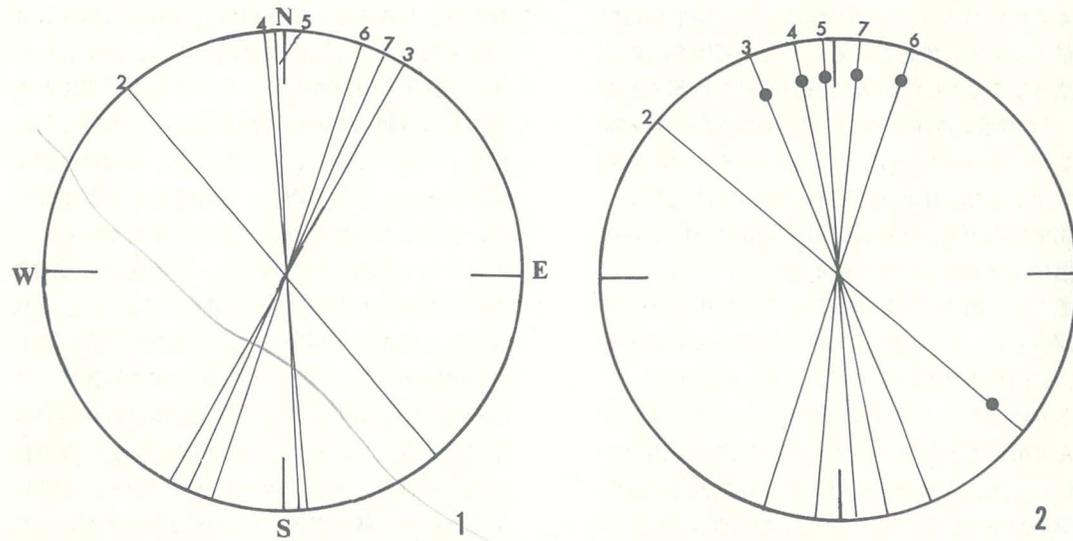
副葬品として出土したのは、古銭、小札、漆器、毛髪である。古銭は、すべての墓に検出されたが、漆器は3号(皮部のみ)で頭骨付近にふせた状態で出土した。毛髪は4号、小札は5号で、それぞれ1例のみである。古銭は渡来銭のみ検出された。(第1表)出土した古銭の総数は66枚だが、解読できたのはわずか17枚である。各墓壙による出土状況は、一ヶ所に一塊にある例(1号、2号)と、胸の部分と足の部分に別れている例(3号~7号)がある。前者の場合、古銭に附着して、袋状の織物の痕跡が認められた。第3表によると、各墓壙毎の古銭枚数は1号を除き、9枚、18枚、11枚、11枚、10枚、5枚となっている。銭名毎にみると、北宋銭が主で、明銭、唐銭とある。これらは、いわゆる「六道銭」として副葬されたものと考えら

れるが、6枚あるいはその倍数を有する例は3号のみである。しかし、特徴的なのは、いずれにも2~3枚重ねた状態で出土し、それを一単位とすると6の数値になるものがある。たとえば2号の場合、単品が4枚で、2枚重ねと、3枚重ねが1つずつある。3号の場合、3枚重ねが6個である。又、こうした複数で重なるものは腐食がひどく、サンドイッチ状になる部分は、ほぼ完全に腐食している可能性もある。それを考慮に入れると、1枚ないし2枚欠ける場合も、その倍数を副葬したものと推定される。以上の様な事から本遺跡は、この種の類例を隣町の松前町字上川墳墓群に求めることができ、しかも両者には極めて類似した様相が認められる。そこで唯一の副葬品である古銭に例をとって比較してみたい。銭種毎の比率によれば、北宋銭(50.50%)が高く、次いで明銭(洪武通宝14.4%。永楽通宝15.4%)となっており、本遺跡においても同傾向を示している。ただ多少異なるのは、明銭の洪武通宝(4.2%)と永楽通宝(1.2%)との比率度が若干前例より開くことである。又、日本銭の寛永通宝が墓壙より出土していないことも類似点としてあげられる。つまり、本例の墳墓の時期を上川墳墓群のそれにあてるならば、ほぼ同時期のものと推定される。勿論、この種の墳墓は発見例も少なく、又、簡素にして多くの副葬品も伴わないことから、これらからのみ論ずることは多少危険な事である。特に、本遺跡においては、道南に新しく流入した仏教文化の所産として注目される夷王山墳墓群との関連性が注目され、今後の調査研究の上でも貴重な資料といえる。新年度の墳墓群調査に期待したい。

(藤田 登)

2. 道路状遺構(第8図)

55年度の調査において、御代参道路に沿ってほぼ南北に走る土堤を数ヶ所切って観察したところ、白色火山灰(1741)に覆れたⅢa層(明褐色土)を確認した。断面観察によれば、このⅢa層は、やや小規模な土堤を思わせる盛り上りをみせており、当初はその上に重なる様に現存する土堤を新規の土堤とし、この盛り上りを旧土堤と考えた。しかし、本調査により新期の土堤を削除し、白色火山灰の上面でその形態を追ってみると、館神八幡宮跡の土留下部より南西部へS字を描く様に延びて



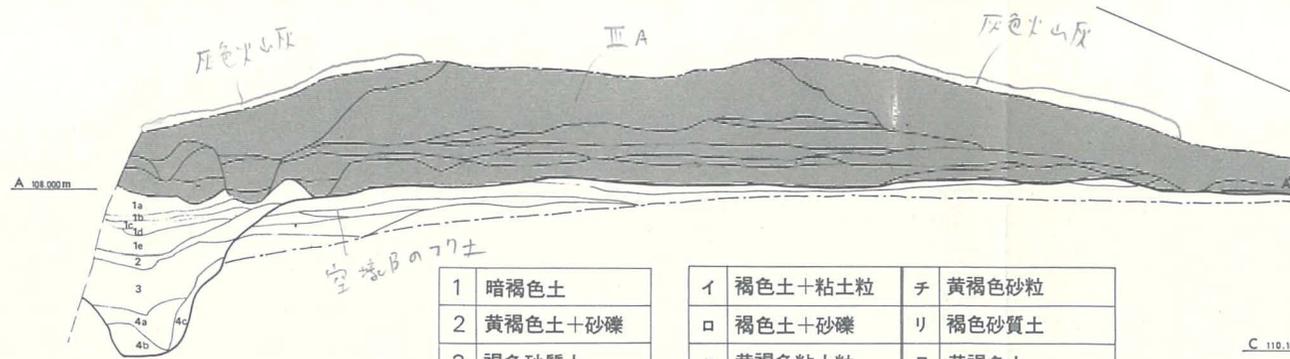
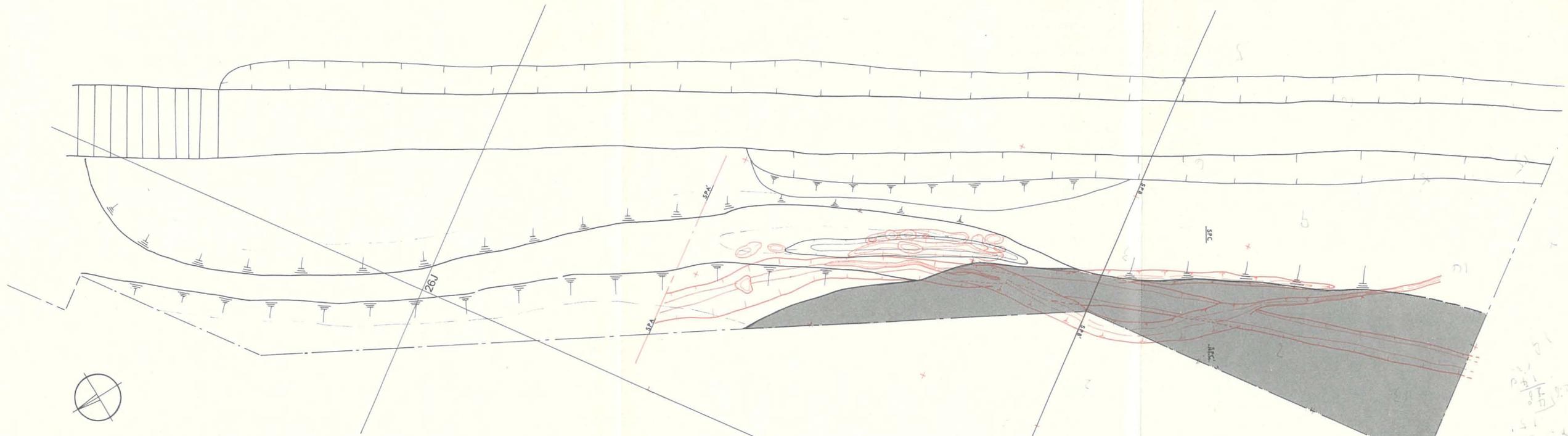
第8図 墓墳軸方位と木棺軸方位(頭位)

番号 錢名	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	計
開元通宝					○	○		2
大平通宝				○	○			2
景德元宝					○			1
祥符通宝					○			2
天禧通宝				○	○			2
皇宋通宝					○			1
元豊通宝				○	○			2
元祐通宝					○	○		2
紹聖元宝						○		1
永樂通宝						○		1
朝鮮通宝						○		1
解読不明	1枚	9枚	18枚	8枚	3枚	5枚	5枚	49
合計	2枚	9枚	18枚	11枚	11枚	11枚	10枚	66

第1表 墳墓出土の古銭一覧表

いる事がわかった。そして、盛り上りの上面は、やや平坦になり小粒の砂利を薄く敷いている。又、この平坦部は特に固くしまっていること等から、当遺構は道路状遺構と考えられる。この道路状遺構は、空壕AとBが位置する25K20、25区、26J

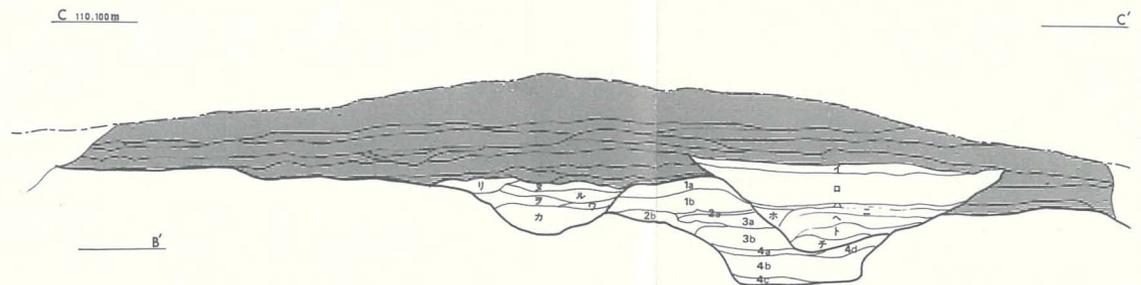
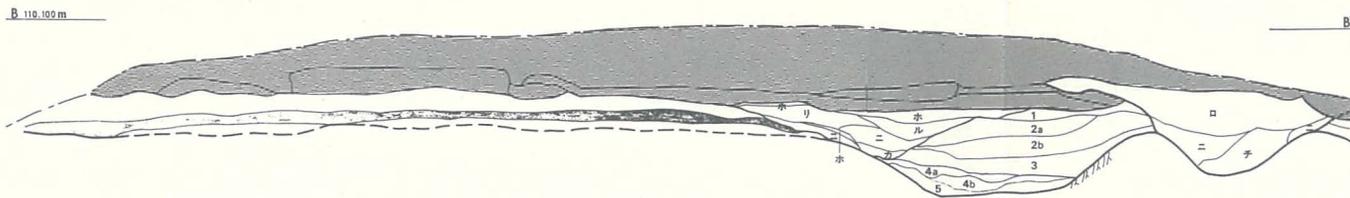
1、6区では、高さ約30~40cm位の土堤状を呈し、26J12、17区あたりでは逆に基盤(VI層)を浅く掘り込み凹みを呈している。長さ及び延長経路は、明らかでないが幅は、土堤状の部分で約1m、凹み部分では約2mを有す。当遺構の構築時期につ



III a (明褐色土)
VI (黑色粘質土)

- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色土+砂礫
- 3 褐色砂質土
- 4 暗褐色土+砂粒
- 5 暗褐色土+黒色土

イ	褐色土+粘土粒	チ	黄褐色砂粒
ロ	褐色土+砂礫	リ	褐色砂質土
ハ	黄褐色粘土粒	ヌ	黄褐色土
ニ	褐色土	ル	褐色土+砂粒
ホ	褐色砂粒	ヲ	明褐色土
ヘ	黄褐色砂質土	ワ	暗褐色土
ト	褐色粘土	カ	褐色砂質土



第9図 道路状遺構及び溝遺構実測図

いてみると、空壕A及びBとの重複する部分においては、各壕が浅い摺鉢状の凹みを有する程度まで、自然埋没した後に当遺構を形成するⅢa層が堆積している。つまり、空壕A、Bに伴う時期の遺構ではなく、両空壕の廃棄後から白色火山灰降下直前（幕末以前）までのものと推定される。

（藤田 登）

3. 溝遺構（第8図）

本調査で発見された溝遺構は3本で、前述の道路状遺構の真下に位置する。

本遺構においては、断面形態がV字状のもの、底面がやや平坦になるU字状のものがあり、前者が2本、後者が1本ある。空壕A、B及びCの形態に類似している。尚、前者の2本は55年度の調査で確認されており、Ⅲa層の土層説明の中でも述べている。この2本の溝は、掘り込みが浅く、Ⅲa層の中部からⅣ層あるいはⅤ層上面までで、深さ約30cm～35cm前後、幅は開口部で約1mである。その為に平面精査での遺構確認が極めてむずかしく、所々トレンチを入れて断面観察を進めながら検出した。よって原形を留めていない部分が多く、全望が明らかでないが、南側は、ほぼ平行に走り南東部へ延びており、北側は後者の溝に吸収されて不明である。後者は、Ⅲa層下部よりⅤ層（黄褐色土）を約35cm～40cm程度掘り込んでおり比較的

顕著に検出できた。幅は約80cm～90cm、深さは、40cm～50cmである。蛇行する様に走る前者に比べ、後者は、26K15、20区でややゆるいカーブを描くが南側にむかってほぼ直線に走る。

又、両者の3本の溝は、それぞれ重複関係にあり、前者の2本では、大きく蛇行する方が一方の溝より掘り込み面が高く、さらに2番目の溝（V字状）が後者の溝（U字状）を切っている。後者の溝は、1番目の溝にも切られていることから、前者間での切り合いはさておき、両者の重複関係は、前者は後者より新しい。やはりこれも空壕A、B及びCとの関係と類似する点である。又、後者は、空壕Bとも重複関係にあり、空壕Bの覆土を切って北部へ延び、55年度検出された浅い溝に接続する。この浅い溝はさらに空壕Aと接続している。そこで浅い溝が構築された時期についてみてみると、前者のV字状の溝よりは古いが空壕Bよりは新しく、空壕Aに接続する。空壕Aとの重複関係には不明な点があるにしても、供伴するか、あるいは極めて近い時期に構築されたものと考えられる。覆土の堆積状況は、前者のV字状の溝2本は、全てⅢa層に対比されるものである。後者は、上部にⅢa層に対比される層が薄く堆積する他は、粘性のある黄褐色土が主体で、底面近くに黄緑色の砂が若干堆積する。

（藤田 登）

II 遺物

本調査で出土した遺物は、陶磁器、鉄製品、銅製品、石製品、古銭、骨角製品、木製品、漆器、自然遺物として獣骨、鳥骨、魚骨、歯、貝殻、炭化米、木の実等がある他、縄文時代の石器、土器も出土している。特に本年度は木製品（漆器を含む）、自然遺物の獣骨、鳥骨、貝殻等、を多量に検出した。

1. 陶磁器類（第11図～第14図）

陶磁器類は、昨年度概報で述べた内容とほとんど変わらず、出土量もやや少ない。よって今回は、昨年に少なかった器形あるいは文様を主に掲載してみた。

a. 白磁（第11図、1～5、9）

完形品は一例もないがほぼ完形に復原されたも

のが数点ある。器形は、杯、皿、碗があるが、昨年極めて出土量が少なかった碗の破片が多くみられる。

1は杯で27K8区より出土している。

口径は6.5cm、器高は4cmである。高台を有し一気に口縁部まで外反する。胎土は、乳灰白色で精良である。釉調は灰白色で高台内部が一部露胎している。見込みは一条の円圈がみられる。

2、4、5は皿である。2は27K7区より出土している。口径は11.5cm、器高は2.8cmである。高台を有し口縁部は外反する。胎土は明灰白色でやや精良、細粒の黒色結晶が混じる。釉調は暗灰色で全面に施釉されている。5は輪花皿である。27K8区より出土している。口径は約12cm、器高は3cmである。高台を有し口縁部がやや内湾する。胎土は乳白色で精良、黒色細粒子を含む。釉調は

青色で全面に施釉される。3、4、9は削り高台を有するもので3、9は、碗と思われる。

b. 梁付(第11図6~8、第12図10~13)

昨年同様に碁笥底高台の小皿が多く出土した。6~8、10~13は27K、L区より出土、7は寿字文、8、10は草花文で、外部の文様は7は文字を圖案化したもの。8、10は蓮弁文と波濤文である。胎土は、7が灰白色でやや精良、黒色結晶を含む。8は赤灰色でやや粗、10は乳白色で精良。6は27L区で土葬墓の確認調査時に墓壙上部より出土した。菊花を呈した杯で口径6.5cm、器高1.7cmである。底部は碁笥底で、文様は見込みに菊花を施す。胎土は黄灰白色でやや粗。釉調は茶灰色で、高台内部とその周辺は施釉されていない。11、13は明瞭な高台を有す小皿で27K区より出土している。11は唐草文、13は内外面の口縁部と底部付近に円輪を二条施し見込みに一条の円圈がみられる。胎土は、11は乳白色で精良、黒色の結晶を含む。13は黄灰色でやや粗である。釉調は11が青白色で全面に施釉され、13は黄灰色で高台内部は施釉されない。

c. 青磁(第12図、14、15)

今回は極めて出土量が少なかったが、碗類の出土が目立った。

14は27L区より出土した。口径は約12cm、器高5cmでがっしりとした高台を有す。口縁部はほぼ直立する。胎土は乳白色で精良、黒色の結晶を含む。釉調は淡い緑色で高台内部は施釉されない。

15は27K区より出土した。口径は約13cm、器高5cmで全体に厚く重量感がある。胎土は黄灰色でやや粗。黒色の結晶を含む。釉調は緑色で高台内部は施釉されない。図示した2例は器高が底く器形は浅鉢と想定される。

d. 天目(第13図16~22)

今回は比較的接合資料が多い。

16は杯で27K20区で出土した。口径約6cm、器高約1.7cm、口縁部はほとんど反らず、高台をもたない。胎土は乳灰色でやや粗。黒色の結晶を有す。釉調は、濃茶色ではん点状に黒色が見られる。施釉は、内面だけで外面には部分的に付着した程度である。17、18は皿で26K、27K区より出土した。いずれも浅い高台を有し、全面に施釉されている。釉調は、17が濃茶色、18は赤茶色を呈す。19~23は碗である。19~21は27K、22は26Kより

出土した。

高台内部に明瞭な段差を有すもの(22)と丸みを呈す凹状のもの(19~21)があり、前者は胎土が精良だが後者はやや粗である。

舶載製品と国産製品がある中で、皿、22の碗以外は国産製品である。

国産陶磁器(瀬戸、美濃、志野、越前、伊万里、その他)(第13図23~28)

今回は、55年度の概報で掲載したものを若干補足する意味で復原できたものを教個体図示したに留めた。26は菊花皿で見込みに印花文を施す。昨年は小皿が主体であったが本調査では碗(23、24)が比較的多く出土した。

摺鉢(第14図)はやはり多量の破片が出土したが接合資料が少なく今回も1個体のみである。30は図上復元による。35は浅い皿状の鉢である。その他に炆器質陶器の破片が出土しており大半は大甕の破損品と思われる。

2. 鉄、銅製品(第16図)

a. 鉄製品(第16図8~15)

本調査で出土した鉄製品は昨年同様Ⅲb層(魚貝層)である。その大半は鉄鍋の破片で、完形品は、図示したものだけである。8の毛抜きは、長さ9cm、やや広い先端部が1.4cmの大型のもので、形態は現在のものとほぼ変らない。9、10は、1対のものと思われる。11~13は火打ち金でほぼ二等辺三角形を呈し、底辺の両端部を反り上げる。上部には1コあるいは2コの孔を有す。15は蓋と思われる。16は薬罐(ヤカン)と思われる製品の破片で肩部上半部と胴部上半に微隆起線が横走する。

b. 銅製品(第16図1~7)

1は、留金で長さ4cm、最大幅1.1cmの楕円形を呈す。厚さ4mmで若干反りぎみである。2、3、5、6は装飾品であろうか。4は、小柄と思われる。断面は、片側縁が平坦で、片側縁は、丸みを呈す。又、片面には文様が刻まれている。7は、二股脚のかんざし(簪)である。

3. 石製品(第15図)

本調査で出土した石製品は、砥石、石臼、ふいごの羽口がある。その中で今回は、石製の羽口が目立ち図示した他に破片が多数ある。羽口は、主

に26区、27区のⅢb層より出土した。1～3は、長さ約20cm前後、径10cm～11cmの円筒形である。1、3は比較的念入りな研磨がなされているが、2は成形痕が顕著に残る。又、火元に近いと思われる部分はひどく剝落している。4は土製の羽口で釉の付着がみられる。5～7は砥石である。8は石臼の破片で現存部の下部に挽き手孔と思われる凹みがある。

4. 古銭(第17図)

Ⅳ 魚貝層出土の木製品 (27K 2・7・20区)

1. 出土状況(第19図、第21図)

本地区は、55年度調査の継続である。(昨年は、27K 2、20区のⅢb層掘り下げの途中あまり形を留めない木製品が多量に出土した。よって、スタッフとの打ち合せの結果27K 7区を拡張し、改めて記録作成を行い検出することとした。)

木製品が出土するのは、表土から約150cm程度掘り下げたⅢb層中部層である。それまでは密に分布していた陶磁器、鉄、銅製品、古銭、骨角器等が極めて散発的に分布し始める。木製品と共に多く出土するのは、獣骨、鳥骨、魚骨、貝殻等の自然遺物である。又、漆器類も本体の木質部が顕著に残って出土している。第19図及び第21図1による分布状況は、種類毎(形態毎)あるいは部分的にまとまる傾向はなく、一様の分布を示している様である。(藤田 登)

2. 層序(第21図2)

本項で述べる27K 20、27J 16、17区の層序は、55年度の概報で掲載したが、前述の様に木製品の出土により完掘できなかった部分である。よって今回の調査で完掘を目ざし、その全望を把握すると共に前回報告した内容の補足をする意味で取り上げた。まず、Ⅲ層(a、b、c)を中心とした堆積状況を見ると、27J 16区では、Ⅲb層が主体で上層部に若干Ⅲa層が堆積する程度である。又、中間層には、Ⅲc層がレンズ状に堆積している。さて、ここで注目すべき点を二、三あげてみる。本来、Ⅱ層からⅢa層上面において堆積する白色火山灰が、27K 20区のⅢb層中(木製品が出土するあたり)にブロック状に混入している。又、旧沢跡部に集中して堆積するⅢb層が、27J 17区(若干平坦面を有

本調査で出土した古銭は、総数275枚で墳墓群より66枚出土している。今回は、3ケ年で出土したものをまとめ、時代別、銭別名の総計を出してみた(第3表)。総数は、612枚で解読できたものはわずか195枚である。第4表によると、渡来銭では北宋銭が極めて多く、次に唐銭、そして明銭、となっている。出土状況を見ると、渡来銭は壕跡部のⅢb層(魚貝層)より多く出土しており、日本銭は発掘区全体に散布している。(藤田 登)

する台地)のⅣ層上面に薄く堆積している。これは、同区にも当初ある程度Ⅲb層が堆積していた事が推定される。こうした事実から生じるいくつかの問題点を述べてみたい。旧沢跡に厚く堆積するⅢb層の断面観察によれば、全体的に乱れた状態にある。それは白色火山灰の混入、そして出土する遺物が小片に分割された様に散在すること等からもいえる。つまり、旧沢跡部に堆積するⅢb層は、人為的な行為が加入していることを思わせる。又、27J 17区においてⅢb層が堆積していたと思われる痕跡があることから、当初は27Jに堆積していたⅢb層が、なんらかの形で旧沢跡へ移動したことが推定される。堆積状況からそれを追ってみると、まず道路状遺構を構成するⅢa層の盛土の為に若干旧沢側へ押し寄せられ(Ⅲa層の下部にも多少Ⅲb層が混入する)さらに、白色火山灰降下後に畑地造成によりある程度整形され、大きな凹みとして残っていた旧沢跡へ完全に押し流されてしまったのではないだろうか。

以上、55年度概報の補足とⅢb層の堆積状況からみる若干の所見を述べたが、まだ説得力ある結論を得ることができない。それは、Ⅲb層中に含まれているとする白色火山灰の分析が終っていないこと、そして同地区に分布するⅢb層の調査が部分的なものでしかないことによる。

筆者らは、さらに同地区における全面発掘を切に望むところである。(藤田 登)

3. 出土遺物(第22図～第35図)

27K 20区、27K 2区、27K 7区よりの出土である。合計約4000点程出土した。以下種類別に代表的なものを掲載する。

漆器 (第22図1~4)

1は土圧のため左右につぶされているが、内面朱漆塗、外面は黒漆塗に漆絵で胴部中央に植物文が3個を一単位として3ヶ所に配図されている。木質部はよく残っている。汁碗と推される。2は内面朱漆塗、外面は黒漆塗に漆絵で竹が胴部中央3ヶ所に配図される。口唇部がやや摩滅しているが、ほぼ完形に近い。直径9cm、高さ約3cmである。盃である。3は内面朱漆塗、外面は黒漆塗に漆絵で鶴が4ヶ所に配図されている。木質部の残存状況はわるい。直径約13cm、汁碗と推される。4は容器の底部である。内面は朱漆塗である。5は方形を呈する箱状のものである。左側縁部を欠損する。柾目材使用。

箸状木製品 (第23図7~30)

合計約3000点程出土しており、木製品総出土量の約3/4を占める。これらはいずれも細い棒状とし、両端を細く削るもので3~8面の面取りを施している。長さは20~30cm前後が最も多く全体の8~9割を占める。尚殆んどのものがやや湾曲している。断面が隅丸長方形のもの、丸形にちかいもの、三角形のものがある。26、27、28は大型で長さ35cm前後が多く魚箸あるいは菜箸と考えられる。29、30については中央部より先端部にかけて二つにわかれてものをささむようになっており、魚等を焼く時に用いるはさみ串の可能性があり。長さも30cm前後と比較的大きい。

底板 (第24図31~34、36、37、40)

31は端部が丸味をもって台形状に加工される。直径10.7cm、厚さ1.0cmをはかる。柾目材使用。32は一方の端部がやや薄い。体部は波状に湾曲している。端部に小孔を穿つ。直径16.0cm、厚さ1.0cm。柾目材使用。33は1/5程であるが、推定直径18.0cm、厚さ0.5cm。34は33と同様推定直径約18.0cm、厚さ0.3cm程であるが、33に比しややていねいに加工されている。体部は波状に湾曲している。柾目材使用。36は端部は丸味をもって台形状に加工される。表面は荒く、裏面はていねいな加工が施される。推定直径約18.0、厚さ1.0cm程である。37は端部が丸味をもって台形状に加工される。表裏面とも黒く着色されている。表面中央部に斜めに多数の擦痕が走る。直径約16.0cm、厚さ0.7cmである。40は周縁部及び表面の摩滅が著しい。尚端部に焼成痕あり。推定直径約22.0cm、厚

さ1.0cm程である。柾目材使用。

蓋 (第24図35、43)

35は非常に薄く、中央部に隅丸方形の小孔を穿つ。直径11.0cm、厚さ0.6cm。柾目材使用。43は中央部に長方形の小孔を穿つ。尚小孔内には把手の一部と思われるものが残存する。裏面は黒く着色されている。

折敷 (第24図38、39、41、42)

38は四隅を小さく切り落とし中央部に円形の小孔を穿つ。約8.5cm×8.5cm、厚さ0.2~0.3cmと非常に薄い。39は中央部が摩滅して薄くなっている。隅を大きく切り落としている。長さは24cm、厚さ0.7cm程である。41は丸型折敷である。とじ孔あり。斜めに多数の擦痕が走る。長さ22cm、厚さ0.9cm。42は端部を垂直に切り落とす。長さ20cm、厚さ1.1cm

ヘラ (第25図44、45、46、47、第27図60)

44は柄の先端部を欠損している。体部、柄部とも扁平である。体部中央に小孔を穿つ。端部は、やや摩滅ぎみである。現存長19.5cm、厚さ0.6cm程である。45はほぼ完形である。体部左端、先端に焼成痕がある。体部先端はやや薄い。飯ベラと推される。長さ19.3cm、厚さ0.6cm。46は全面に黒く着色されている。整形はていねいに施され、体部は先端にいくに従い薄くなり、先端は使用のため摩耗している。飯ベラと推される。長さ19.3cm、厚さ0.6cm。47は体部は先端にいくに従い使用のため摩耗している。先端部を欠損する。残存長15.3cm、厚さ0.3cm。60は体部断面は湾曲し極めて薄い。柄部は湾曲しない。全体に極めてていねいなつくりである。長さ30.5cm、幅(体部)3.8cm、厚さ0.5cm、柾目材使用。

下駄 (第25図48、第26図49、50)

すべて連歯下駄である。残存状態は極めて悪く完形品はない。48は縦に割られ、さらに前壺付近を横に破損した状態で出土したものである。全体の形状は隅丸長方形を呈する。前壺は後壺よりやや小さい。後壺は穿孔方法は器面に対してやや斜めに行なわれている。前歯、後歯とも破損が激しく、左右どちらの足に用いられたかは不明である。大きさより見て子供の下駄の可能性があり。残存長13.8cm、現在幅6.9cm。柾目材使用。49は材質のためか腐食が著しい。現存長21.0cm、現存幅9.6cm。50は後壺は右側のみ存在し、穿孔方法はほぼ

直角である。尚器は極めて薄く0.2cm～0.3cm程である。広葉樹使用。現存長17.0cm、現存幅10.5cm程である。

錐 (第27図56)

先端部に鉄が装着される。柄部体部とも断面形は円形を呈する。柄部幅1.5cm、現存長23.0cm、厚さ1.0cm。

クシ状木製品 (第27図58、59、第28図64、68、69)

58は断面形が長方形を呈する。先端部にいくに従い細くなり、先端部の一端を削って細く尖らせている。長さ21.0cm、最大幅23cm、厚さ1.0cm。柾目材使用。59は断面が長方形を呈する。両端を下から上へ斜めに削る。両端部はやや丸味をおびる。長さ35cm、幅1.6cm、厚さ1.1cm柾目材使用。64は断面形がやや偏平である。中央部で削りを入れ、さらに先端部で一端を切り細く尖らせている。長さ29.2cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、柾目材使用。68は断面が六角形を呈する。先端部を削り鋭利に鉛筆状に尖らす。中央部が最も厚い。先端部断面は五角形を呈する。現存長23cm、最大幅1.8cm、最大厚0.9cm。69は断面が六角形で偏平である。68同様先端部を削り鋭利に尖らす。長さ26cm、最大幅1.0cm最大厚0.6cm。

杭状木製品 (第28図62、63、65、66、第31図88)

62は断面が偏平な方形である。先端部にいくに従い厚みをます。切断面は極めて加工が荒い。柾目材使用。現存長31.5cm、幅10.8cm、上端の厚さ0.7cm、先端部の厚さ1.6cm。63は形態的にみると中央部に若干のくびれを施し、下半部では両端より加工し先端部を鋭利に尖らせている。加工状況は上半部は荒く、下半部はていねいに整形される。尚上部頭には焼成痕あり。長さ25cm、上半部最大幅3.6cm、下半部最大幅4.5cm、厚さ2.7cm。板目材使用。65は断面形は中央部は円形、先端部は6面に面取りされ不整六角形状をなす。上半部に焼成痕あり。残存状態は極めて悪い。現存長38.4cm、幅4.2cm。66は断面形が上半部は長方形、下半部は不整六角形を呈する。長さ20.4cm。板目材。88は加工が極めて荒い、頭部に若干の整形を施し、先端部を斜めに削平する。全長65cm、幅5.6cm。

浮子 (第29図70)

表面中央及び側面に二つの溝を有する。表面中央の溝はせまく深い。側面の溝は広く浅い。裏面

に二つの小孔あり。長さ16.0cm、幅9.5cm。

箕 (第29図72)

残存長56.8cm、残存幅32.8cm、厚さ1.6cmを有する。極めて脆弱である。両側縁とも上部を欠損している。体部よりの立ち上がりはなだらかである。図上上部は体部より垂直に立ち上がる。入口の部位もやや段差を持つ。体部は入念な加工が施され、中央に一条のやや高い部位を形成する。

鞘 (第30図74～78、第32図97)

74は表面がていねいに加工される。焼成痕あり。内部索孔は方形を呈する。断面には2枚の板の合わせ目がみられる。長さ14cm、幅3.7cm、厚さ1.7cm。柾目材使用。75は出土時より2枚の板がはがれていた。中央部に弓状の段差を有し、中央より末端部を厚くする。全体によく整形されている。現存長23.6cm、幅3.5cm最大厚1.5cm。柾目材使用。76は中央部より末端部にかけて徐々に厚みを増す。先端部背部分が剝離、破損している。現存長23.4cm、幅3.8cm、最大厚1.8cm。柾目材使用。77は先端部、末端部をやや欠損する。作り方は前出のものと殆んど同じである。結合部合わせ目を丸く整形している。現存長22.0cm、幅3.8cm、最大厚1.4cm。柾目材使用。78は片側部分のみである。中央部よりやや先端部側に小孔を有する。先端部は欠損している。現存長25cm、幅3.2cm。柾目材使用。97は中央部に小孔を穿つ。加工は荒く残存状況は悪い。残存長54.0cm、残存幅2.4cm。

弓状木製品 (第31図79～87)

両端部が薄く偏平に加工されることが特徴であり、断面方形なものや隅丸長方形のものがある。79は断面形が方形を呈する。中央部でやや薄くなる。両端部はやや丸味をおびる。やや湾曲する。現存長121.6cm、幅3.2cm、厚さ2.8cm80は断面形が隅丸長方形を呈する。厚さは上端へいく程薄く偏平となる。両端部欠損。現存長81.6cm、幅2.8cm、中央部厚さ2.0cm、上端部厚さ1.0cm。81は断面が方形を呈する。中央部より上端へいくに従い、徐々に幅は細く、厚さも薄く、湾曲度も著しい。下半部を欠損している。現存長70cm、先端部幅0.8cm、中央部幅2.2cm。82は断面形は上端部は方形、中央部は隅丸長方形、下端部は三角形を呈する。形態的には上端部は一端を下から上へ斜めに削りを入れ、偏平にしている。中央部は握りやすいようにくびれを入れる。最も幅と厚さがあ

る部位である。下端部は非常に薄く丸味を帯びている。焼成痕あり。全長80cm、幅は中央部6cm、上端部2.2cm、下端部3.6cm。厚さは中央部3.0cm、上端部1.4cm、下端部0.8cm。83は断面形が隅丸三角形を呈する。やや湾曲する。幅は下端部に向って徐々に広がる。端部はやや丸味を帯びる。残存長88cm、幅は中央部3.8cm、先端部1.6cm、厚さ1.8cm。やや湾曲する。84は断面が隅丸長方形を呈する。現存長81.0cm、幅2.4cm。85は断面が長方形を呈する。両端部は薄く偏平に加工が施される。全長53.4cm、幅1.8cm、厚さは中央部1.0cm、両端0.5cm。86は断面が隅丸長方形を呈する。全長73.6cm、幅2.0cm、厚さ1.2cm。87は断面形は隅丸長方形。両端部は偏平で丸味をおびる。

棒状木製品（第32図89～96、98～100）

先端が弓状木製品と同様に偏平に丸味をもって整形されるが、基部は直角に切断されるものが多い。89は断面形が中央部はほぼ方形、図上下端部は円形を呈する。現存長74.0cm、幅1.6cm、厚さ2.0cm。90は大型で重量感あり。断面は不整形円形を呈する。加工は荒い。現存長98.0cm、幅0.5cm、厚さ4.2cm。91は断面が方形、先端部欠損。基部は直角に切断される。現存長47.2cm、幅1.8cm、厚さ1.8cm。92は基部、先端部欠損。現存長47.6cm、幅2.4cm、厚さ1.0cm。93はほぼ完形である。断面は隅丸方形を呈する。先端部にいくに従い薄くなる。先端部は丸味をおび小孔を穿つ。中央部よりやや湾曲する。基部は直角に切断される。全長83.6cm、幅2.4cm、厚さは先端部1.0cm、基部2.0cm。94は断面が偏平な方形を呈する。中央部より先端にかけて大きく湾曲する。幅も先端にいくに従い細くなる。基部は直角に切断される。先端部欠損。現存長82.0cm、幅は先端部1.8cm、基部3.0cm。95は頭部にえぐりを入れつまみ状のものを作出する。断面は方形である。現存長79.2cm、幅3.2cm、現存厚2.6cm。96は先端部欠損、基部が直角に切断される。現存長50.0cm、幅2.8cm、厚さ1.0cm。98は偏平で両端を欠損する。現存長52.8cm、幅6.4cm、厚さ0.8cm。99は現存長43.0cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm。断面は方形。100は現存長56.0cm、幅7.0cm、厚さ3.2cm。

その他の木製品（第22図6、第27図51～55、5761、第33図101～107、第34図109～111）

6はかぎ状を呈する。上部に円形の孔あり。

51は断面がかまぼこ状を呈する。両端は小さな切りこみが入り、方形に整形されている。柾目材。52～55は同種のものとして推される。いずれも断面は偏平なかまぼこ状を呈する。形態的にみると両端に左右より小さな切りこみを入れ方形に整形している。いずれも柾目材使用。53、54はそれぞれ体部に三角形、直線状の彫刻状のものが刻まれる。61は断面形は不整形六角形。中央部が細く、両端4cm程はていねいな加工が施され、段状に太くなっている。102は両端につまみ状のものを有する。下部に鋭角に切りこみを施す。尚中央部にわずかに擦痕あり。柾目材使用。103は中央部にえぐりを入れ、中央部より下についてはていねいに八角形に面取りが施されている。104は断面形が方形を呈する。左端に三角形の彫刻状のものが刻まれている。柾目材使用。106は鎌状を呈する。断面形は偏平なかまぼこ状。表面は身中央部をやや厚くし、両側縁に刃をつける。表面はほぼ平端に整形され、身下部に直線的に突起を設ける。左側縁部及び基部を欠損。柾目材使用。108、112とも曲物その他に用いられる樹皮である。110は両端に方形の小孔を穿った柾目材である。

第29図71、第35図113、114

いずれも空壕Aが寺の沢に接する付近にて発見されたものである。71は全長約156cm、幅22cm、頭部の厚さ7cm、体部の厚さ2cmを有する大型のものである。形態的には頭部は丸味を帯びるよう削りを入れ整形されている。頭部と体部の間に段を有し、体部は極めて薄い。体部表面はていねいに加工される。多数の擦痕あり。裏面はやや荒く整形される。113は下駄である。後壺は縦に欠損、前壺付近も欠損している。器は隅丸方形を呈する。114は丸木船状木製品である。全長4m90cm、幅約36cm、高さ約37cmを有する。一端は方形を呈し、もう一端は欠損する。尚下に板材及び棒材が枕木状に敷かれており、これらは上の本体を固定するためのものであると考えられる。

以上出土木製品の概略について述べた。

現在整理分析中であるが、今後さらに民俗資料との比較検討により細分析を行なっていきたい。

（齊藤 邦典）

骨角製品（第34図1～8）

1は装飾品と推される。2はキテである。体部にはやや左傾するように縦に2つの索孔をもつ。

表面には茎槽あり。3はヘラと推される。入念な加工が施される。4は鏃である。尖頭部を欠損する。

5、6、7は中柄である。8は装飾品である。

(齊藤 邦典)

V 勝山館跡土葬墳墓出土の人骨及び動物遺存体

土葬墳墓出土の人骨

百々 幸雄

第1号より第7号墓までから人骨が出土しているが、そのほとんどが断片的であり、ここでは、中でも比較的保存状態の良い第4号墓出土の人骨について概略を記することにする。

第4号墓出土人骨(PL32、上段)

頭蓋冠の右半側と歯冠が残るのみである。頭蓋冠は右頭頂骨の大部分、左頭頂骨の一部、後頭鱗部及び乳突部よりなる。その大きさからみて、成人骨であることには間違いなさそうであるが、性別は不明である。矢状縫合と右ラムダ縫合は、外板は全開であるが、内板には一部癒着傾向を認める。右ラムダ縫合には、少なくとも4個の縫合骨を認める。右アステリオン骨と頭頂切痕骨は存在しない。右の頭頂孔は欠失する。頭蓋冠の厚さは右頭頂結節付近で4mmで普通である。

歯冠は、上顎大白歯3個、下顎大白歯4個、小白歯3個が個定される。う歯は認められない。咬耗はあまり進んでおらず、大白歯でⅠ～Ⅱ度の段階にあり、比較的若い年齢段階にあったものと思われる。(札幌医科大学解剖学教室)

尚、上述の墓擴より出土した毛髪は、北海道警察本部 刑事部犯罪科学研究所法医科長 富居清兵衛氏の鑑定をうける機会を得た。その結果、資料の毛髪は人の頭髪と認められた。以下に分析結果を述べる。

①資料の毛髪は、ほとんどが切損しているが中には本来の形状(先まで細くとがっている)を留めているものも認められる。

②資料の毛髪は、いずれにも毛根の付着が認められない。(折れる、切れる、切断する等)

③資料の毛髪は毛小皮(キューテクル)は、ほとんどが強度に剝離、損傷している(摩耗している)。

④資料の毛髪は性別、血液型は検査不能の為

不明である(毛根の付着が認められない為)

⑤資料の毛髪は長さは、約3～6cm、太さ0.06～0.1mm。

⑥資料の毛髪は、一定方向にそろって束状になっており、同一人のものと推定される。

動物遺存体

西本 豊弘

1、出土遺物の概要

昭和55、56年度の勝山館跡の発掘調査で出土した動物遺存体は、ミカンのダンボールで約10箱分である。そのうち貝類が約3箱で、残りの7箱分が獣骨である。それらの資料のほとんどは、27K区の魚貝包含層分布域より出土したものである。その他に魚骨分析用の土壌柱状サンプルが約20箱分である。資料の詳細な分析結果は改めて報告することとして、ここではその概要を述べるに止めたい。

a 貝類

貝類は、19種が認められた。クロアワビが最も多く部分的にブロック状にまとまって出土した。殻長5cm位の小さいものもあるが、殻長10cm前後の中型の個体が主体である。アワビに次いで多いのがクボガイと思われる。クボガイも少量がまとまって出土している他に、土壌サンプルにも散見された。タマキビ、クロタマキビは、土壌サンプルに幼貝を含めて少量見られただけであり、意識的に採集されたものとは思われない。イガイ類、ベンケイガイも少量含まれていた。その他の種は極く少量が出土しているだけである。また、貝皮も少量採集されているが種は不明である。

b ウニ類

エゾバフンウニとキタムラサキウニの2種が土壌サンプルに含まれていた。それらはブロックを形成するほど多くなく、極く少量が散見されただけである。

c 魚類

魚類は7種以上が含まれていた。魚骨は、発掘

時点で任意に採集されたものが少ないので、土壌サンプルの内容の一部分を第2表にした。ウグイは、55年度のサンプルに多く含まれていた。椎骨の大きさからみると体長50cm前後の大きな個体であり、川に棲息する小型のウグイではなく、降海型のマルタと思われる。ニシンは、魚骨の中で最も出土量が多い。特に56年度のサンプルはすべてニシンが主体である。サケ類は、55年度の任意採集資料の中によく発達した歯を持つ大きな顎骨が散見された。また、56年度のサンプル中に椎骨が少量づつ含まれており、ニシンに次いで目立った魚種であった。それらのサケ類の椎骨は火を受けているものが多い。椎骨の大きさや形状からみて、シロザケの可能性が大きいと明確には言えない。また、これらのサケ類の骨の他に、体長30cm前後の小型のマス類ではないかと思われる椎骨も出土している。カレイ類は55年度のサンプルの主体であったが、56年度のサンプルには、ほとんどみられない。この他のマダラ、ホッケ、ソイなどは極く少量含まれていただけである。また、椎体長2mm以下の小さな魚種もみられたが種は不明である。

d 鳥類

鳥骨の出土量が少ないが6種認められた。大型のワシ類のおそらく同一個体の右側上肢の骨(尺骨、桡骨、中手骨各1)がまとまって出土した。

e 哺乳類

動物遺存体の多くが哺乳類の遺骸である。小さく割れたものが多く、種名が定かでないものも多いが、エゾシカの骨片が最も多いと思われる。イヌの遺骸も頭蓋骨数個分の他、四肢骨片もかなり含まれていた。頭蓋骨や四肢骨の大きさからみると、現代の柴犬よりもかなり大きいイヌが多いように思われる。中型獣では、イヌに次いでカワウソの骨が目立った。タヌキ、キツネ等の他の陸獣類の出土量は少ない。オットセイの雄の犬歯や四肢骨片も少量みられたが、海獣骨の出土量は少ない。クジラの骨は、骨器の原材として多用されていた。この遺跡では、ウマの骨が出土していることが特徴のひとつである。(PL32、下段) 歯や四肢骨片からみて数個体以上含まれている。頭蓋骨はなく、下顎骨が2個体分出土している。いずれも幼獣のため形質についての検討は慎重を要するが、歯の大きさと形状からみて比較的小型のウマと思われる。(札幌医科大学解剖学教室)

2. 出土動物遺存体種名

a 貝類

腹足類	Class Gastropoda
1. クロアワビ	<i>Haliotis (Nordotis) discus</i>
2. ベッコウガサ?	<i>Cellana grata</i>
3. クボガイ	<i>Chlorostoma lischkei</i>
4. タマキビ	<i>Littorina brevicula</i>
5. クロタマキビ	<i>Littorina (Ezolittorina) squalida</i>
6. ツメタガイ	<i>Neverita (Glossaulax) didyma</i>
7. エゾチヂミボラ	<i>Nucella freycineti</i>
8. イボニシ	<i>Thais clavigera</i>
9. ヒメエゾボラ	<i>Neptunea arthritica</i>

二枚貝類

二枚貝類	Class Bivalvia
1. エゾタマキガイ	<i>Glycymeris yessoensis</i>
2. アカガイ	<i>Scapharca broughtoni</i>
3. ベンケイガイ	<i>Glycymeris albolineatus</i>
4. イガイ?	<i>Mytilus coruscus</i>
5. ホタテガイ	<i>Patinopecten (Mizukiopecten) yessoensis</i>
6. コタマガイ	<i>Gomphina (Macrodiscus) melanaeigis</i>
7. ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
8. ビノスガイ	<i>Mercenaria stimpsoni</i>
9. ウバガイ	<i>Spisula sachalinensis</i>
10. ベニサラガイ	<i>Peronidia lutea</i>

b ウニ類

ウニ類	Class Echinoidea
1. エゾバフンウニ	<i>Strongylocentrotus intermedius</i>
2. キタムラサキウニ	<i>Strongylocentrotus nudus</i>

c 魚類

魚類	Class Pisces
1. ウグイの1種	<i>Tribolodon</i> sp.
2. ニシン	<i>Clupea pallasii</i>
3. サケの1種	<i>Oncorhynchus</i> sp.
4. ソイの1種	<i>Sebastes</i> sp.
5. ホッケ	<i>Pleurogrammus azonus</i>
6. マダラ	<i>Gadus macrocephalus</i>
7. カレイ科の1種	Plesronectidae gen. indet.

d 鳥類

鳥類	Class Aves
1. カラスの1種	<i>Corvus</i> sp.
2. ワシの1種	Accipitres fam. indet.
3. カモの1種	Anatidae gen. indet.
4. ウの1種	<i>Phalacrocorax</i> sp.
5. アホウドリの1種	<i>Diomedea</i> sp.
6. カモメの1種	<i>Larus</i> sp.

e 哺乳類

哺乳類	Class Mammalia
1. エゾノウサギ	<i>Lepus timidus ainu</i>
2. ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>

第2表 土層サンプルに含まれる魚類椎骨数量

種名	層位	55年度 I	56年度 C-2層	56年度 C-10層	56年度 C-21層
サケ(a)		1		2	1
サケ(b)		12			
ニシン		50	20	22	32
ウグイ		30	1		
ホッケ			2		
カサゴ		2			
マダラ					2
カレイ		135			
種不明		24	2		2
計		254	25	24	37
サンプル量 (c. c.)		—	6,200	3,100	2,300

注 サケ(a)はシロザケタイプ、サケ(b)はマス類の小型と推定されるものを示す。

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| 3. ヒグマ | <i>Ursus arctos yesoensis</i> |
| 4. イヌ | <i>Canis familiaris</i> |
| 5. エゾタヌキ | <i>Nyctereutes procyonoides albus</i> |
| 6. キタキツネ | <i>Vulpes vulpes schencki</i> |
| 7. クロテン | <i>Martes zibellina</i> |
| 8. ニホンカワウソ | <i>Lutra lutra whiteleyi</i> |
| 9. オットセイ | <i>Callorhinus ursinus</i> |
| 10. エゾシカ | <i>Cervus nippon yesoensis</i> |
| 11. ウマ | <i>Equus sp.</i> |
| 12. クジラの1種 | Cetacea fam. indet. |

VI おわりに

本年度の発掘調査では、土葬墳墓の発見、溝遺構及び道路状遺(旧御代参道路)の発見、空壕Aの西側末端部の確認、空壕Bの東側延長部の確認、そして丸木舟状木製品をはじめ、多種類の木製品出土等により、55年度以上の成果が得られた。

近年、東北地方より南方における諸地域では、これらの類似する資料が増しつつあるが、それ故にまた問題の多くは以後の課題として残されているといえる。本遺跡においても、類例を求めることができたのは極めて少なく、貴重な資料が豊富に得られた反面、十分な結論を得ることができなかった。そこで最後に、本資料より二、三の注目すべき点と問題点について要約してみたい。

本調査で発見された土葬墓は、和人のものと考えられるが、道内において、類似する調査例を求められるのはいまだ限られた地域でしかない。

それによると、瀬棚町の火葬墳墓群(加藤邦雄「瀬棚町発見の火葬墓について」北海道考古学第17輯1981)、松前町字上川墳墓遺跡(久保泰「松前町字上川墳墓遺跡の調査」松前藩と松前1979)、

木古内町札刈遺跡における土葬墓(野村「札刈遺跡」木古内町教育委員会1974)、そして夷玉山墳墓群等がある。この中で土葬墓は、札刈遺跡における一例と松前町上川遺跡墳墓群である。中でも松前町の例は、本例との類似点が多く前項でも

述べた通り比較対象の唯一の資料であった。

和人の墓地として先に注目を浴びた、道内唯一の規模を有す夷玉山墳墓群は、火葬墓であることは言うまでもない。又、同墳墓群は本年度行なわれた分布調査で、既知の分布範囲をはるかに上まわる分布状況が明らかにされ、あらためてその重要性が問われてきた。そして、今回の土葬墓の発見と共に、両者の関連性についても極めて注目すべき点である。それは、両者間での埋葬方法がまったく異なっているながらも、墓の構築時期についてみると、540年±90年BPの年代が出ていている同火葬墓とは大きなずれはないと考えられる。つまり、ほぼ同時期において火葬墓と土葬墓の存在があると考えれば、広域な分布を示す夷玉山墳墓群の中にも土葬墓の混在がありうるのではないだろうか。幸いにして新年度には墳墓群の発掘調査が予定されており、その成果が待たれるところである。

次に、溝遺構においては、55年度の調査で発見されたものとは多少異なる点がある。昨年度の例では、溝の内部に無数の小ピットを有し、方形を描く様う屈曲するもので、建物跡の周囲をめぐる堀の可能性があると報告した。本例は、内部に小ピットをもたず、一部若干曲線を有すがほぼ直線的に南北方向に延びている。そしてこれは、途中で空壕Bを切り、昨年度発見された空壕Aに附設

すると考えられる浅い溝と接合する。空壕 A と B の関係は、55年度の概報でほぼ同時期に構築されたと報告したが、本溝が空壕 A に附設するものと考えらるならば、空壕 B は A より多少古い時期に構築されたものであり、さらに古く空壕 C があることになる。

道路状遺構はこの溝遺構の真上にある。調査区内での状況では、S字状に南北方向に延びているが南側へ延びる部分はまったく予想できない。北側の館神八幡宮跡部の土留と接する部分では、土留の東側か西側を廻る様にして延び、八幡宮の北側か、東側にあると推定される正面入口に通じると思われる。永禄五年(1562)創立と言われる夷王山神社(旧称医王山神社)と八幡宮、及び砂

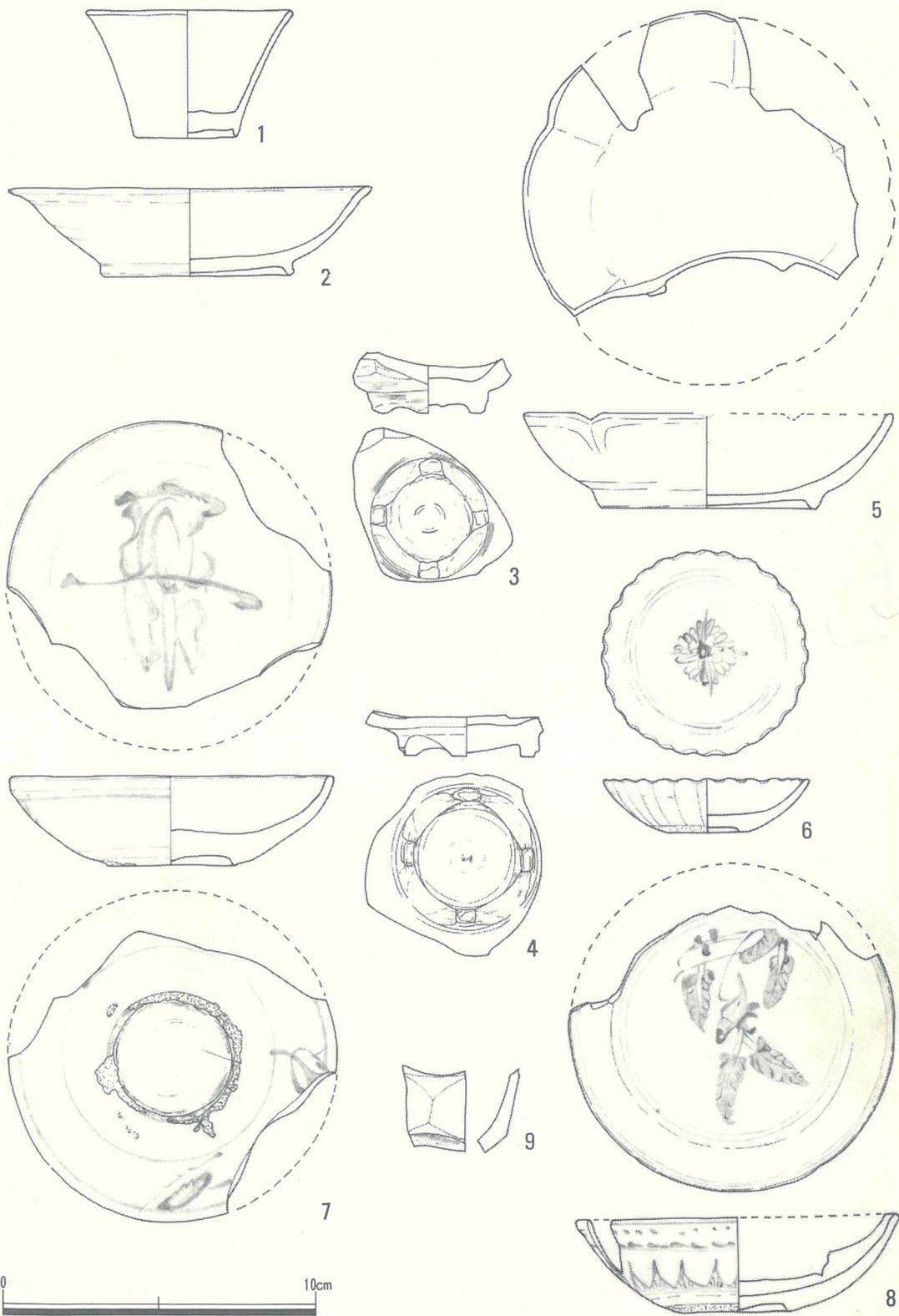
館神社が「上之国三社」と言われ、藩主が自らこの三社に参拝し、毎年正月には名代の奉幣を慣例とした。これを上之国代参といい、当時の御代参道路として残っていたのが本遺構と思われる。

本調査で出土した遺物の多くは木製品で、本遺跡の調査研究の上でとりわけ興味深い資料といえる。現在も果敢に整理分析を進めており、本報告ではその一部にすぎない。ちなみに製品の種類としては、生活用具、武具等があり、全般に形態的特徴を把握できたものには生活用具類が多い。陶磁器類は56年度概報で述べた内容を若干補足する程度で前項で述べた通りである。やはり、国産陶磁器の比率が高く、中でも、瀬戸・美濃の製品が主

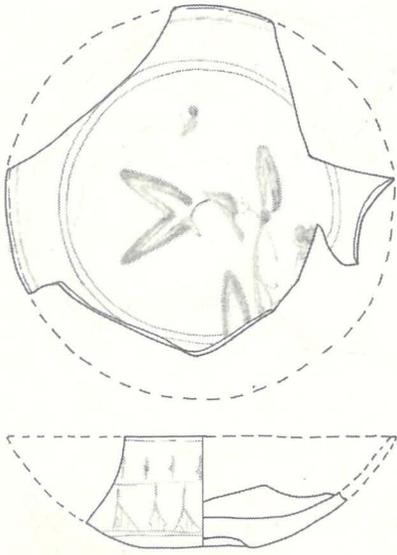
体である。又、越前系の摺鉢が多く出土しているのに対し、甕類や壺類の出土が極めて少ない。鉄製品は、鉄鍋の破片が多量に出土しているが、錆の付着がひどく復元が極めて困難であった。銅製品は、昨年度より資料がやや少なく、昨年度注目された鏡は、小破片が1点出土したのみである。石製品は、砥石の他にふいごの羽口の出土が目立った。これは、他の類例が皆無に等しく、注目すべき資料である。古銭は、やはり渡来銭が中心で北宋銭が極めて多く、主にⅢb層(魚貝層)より出土している。日本銭の寛永通宝は、土堤の削平作業時に館神八幡宮跡の付近で集中して出土した。骨角製品は、昨年同様中柄が多く、他に若干の装飾品が出土している。尚、調査終了まぎわに発見された丸木舟状木製品は、概観を把握したに留め新年度の調査を待つて明らかにしたい。これらの事は、今後類似遺跡の調査研究を待つて解明されるべき点も多いが、筆者らもさらに整理分析を行い、説得力のある考察を展開できるよう努めたい。

最後に、整理分析にあたっては、札幌医科大学解剖学教室の百々幸雄氏、西本豊弘氏。北海道警察本部、刑事部犯罪科学研究所の富居清兵衛氏。江差町の建具店主・岩坂松蔵氏、並びに萩原熔接鉄工所・萩原喜一氏の方々には、大変お忙しいなか御助力をいただいた、文末をもって感謝の意を表します。

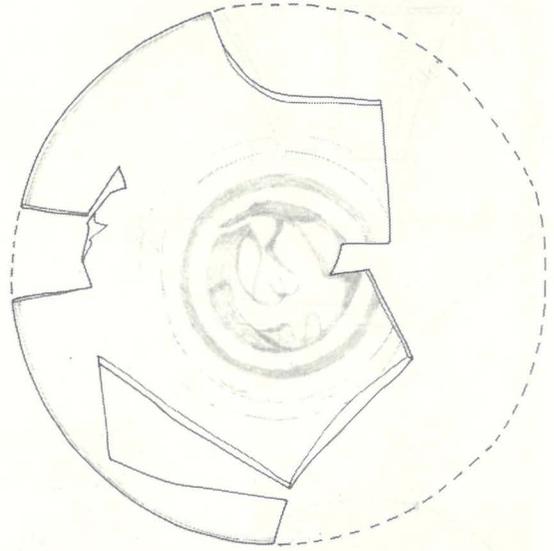
(藤田 登)



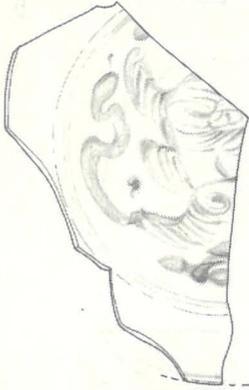
第11図 舶載陶磁器(白磁、染付)



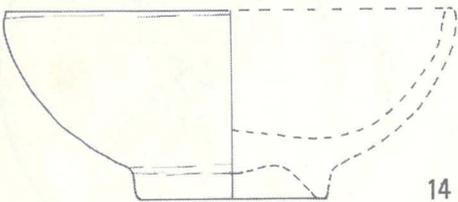
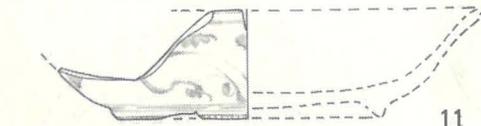
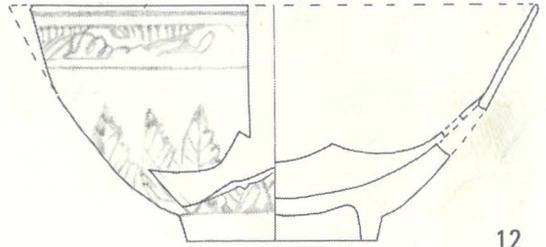
10



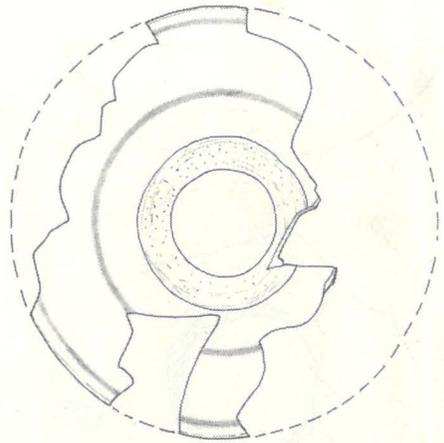
12



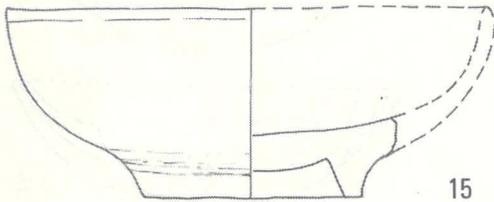
11



14

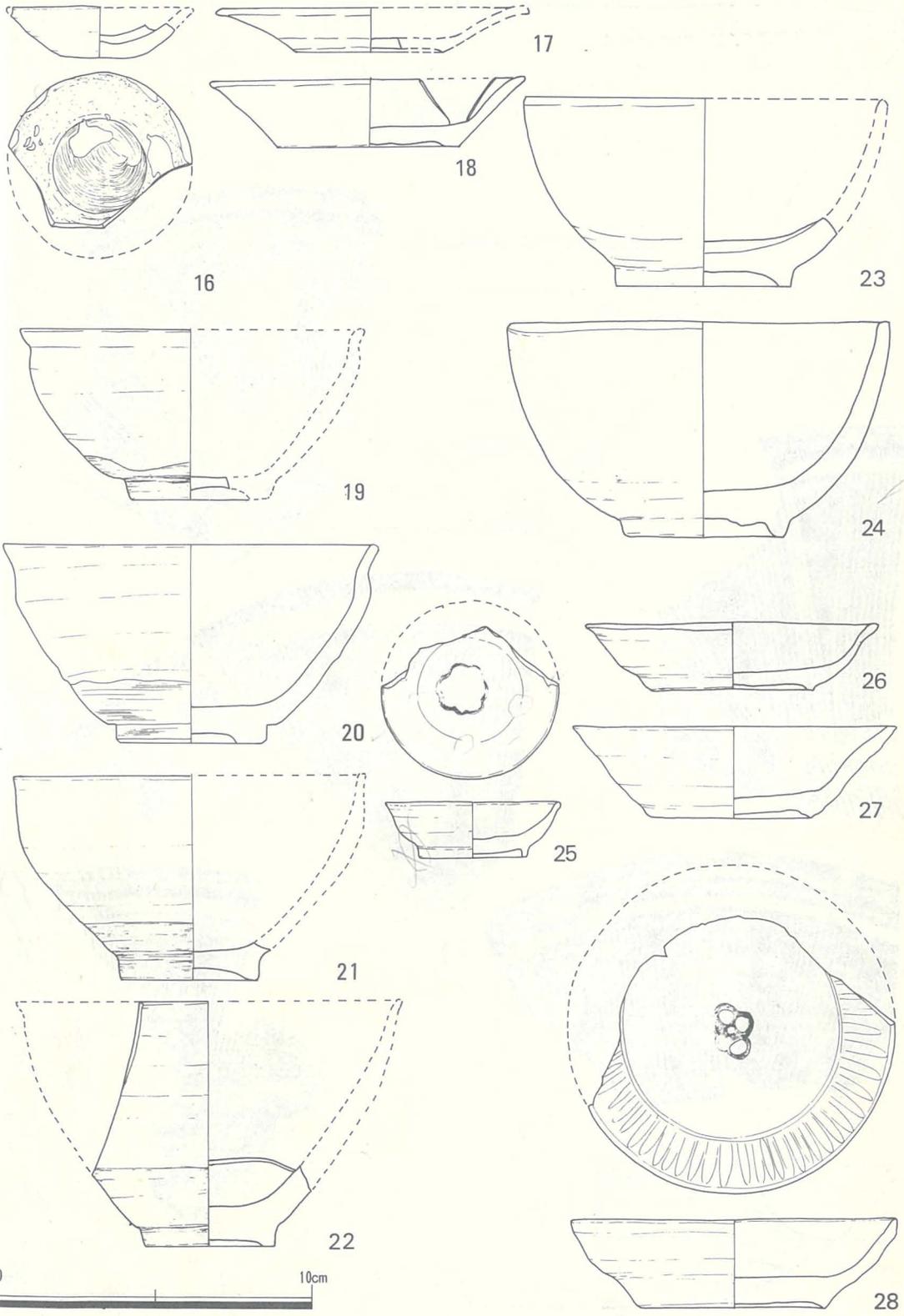


13

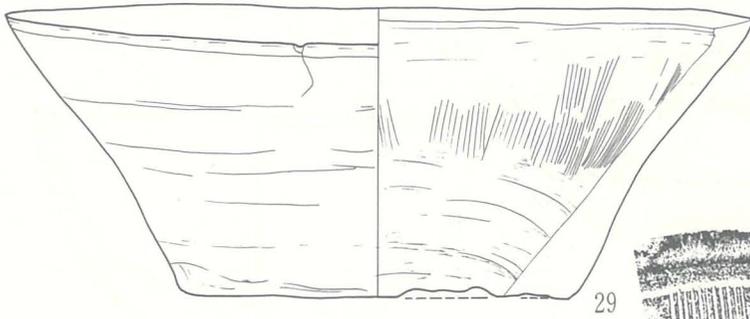


15

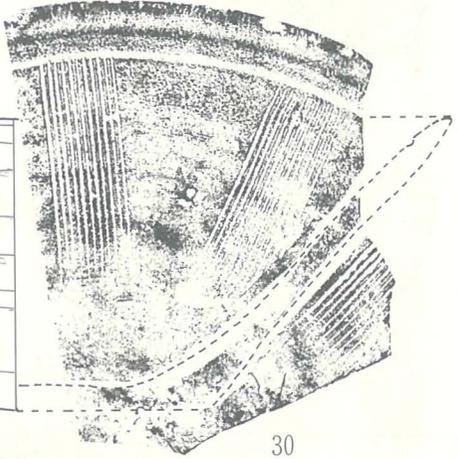
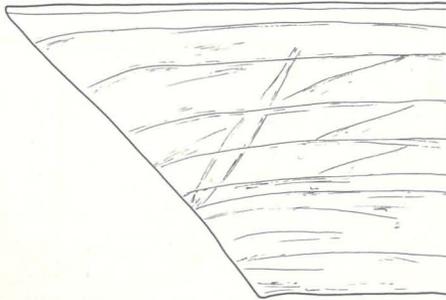




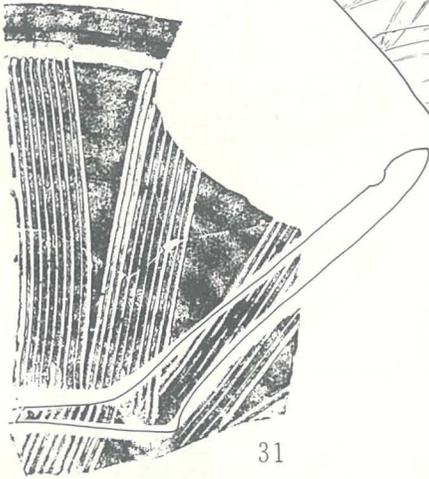
第13図 舶載陶磁器と国産陶磁器(天目、瀬戸・美濃)



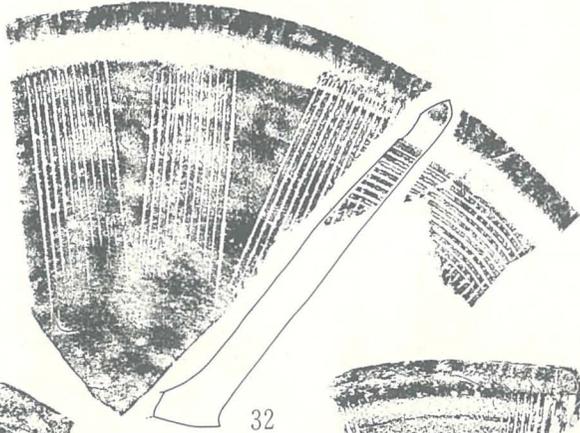
29



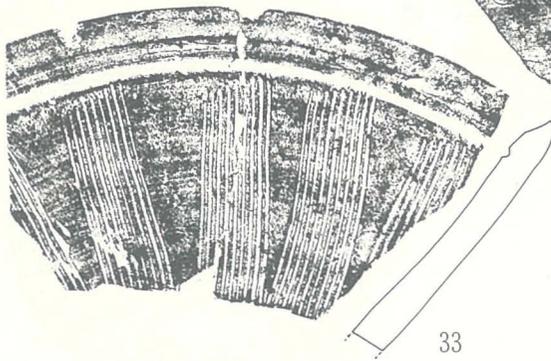
30



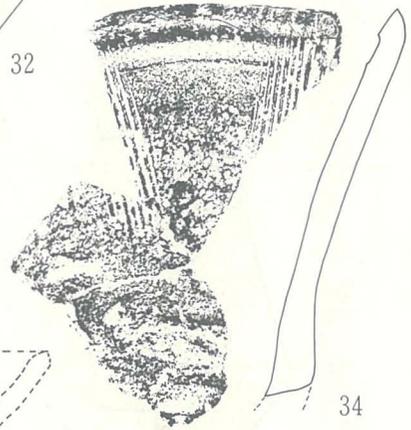
31



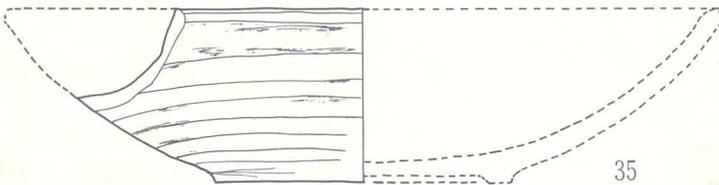
32



33

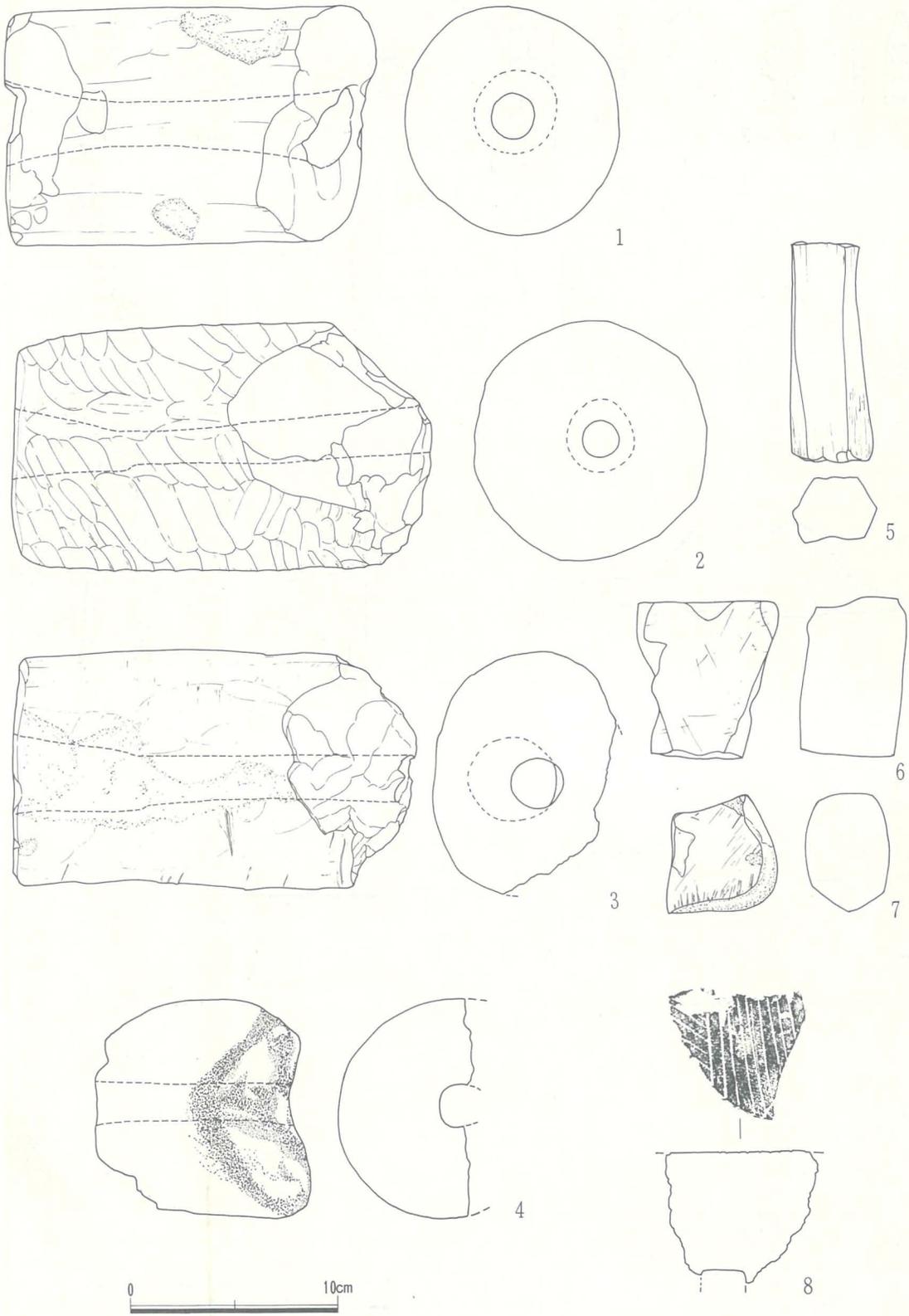


34

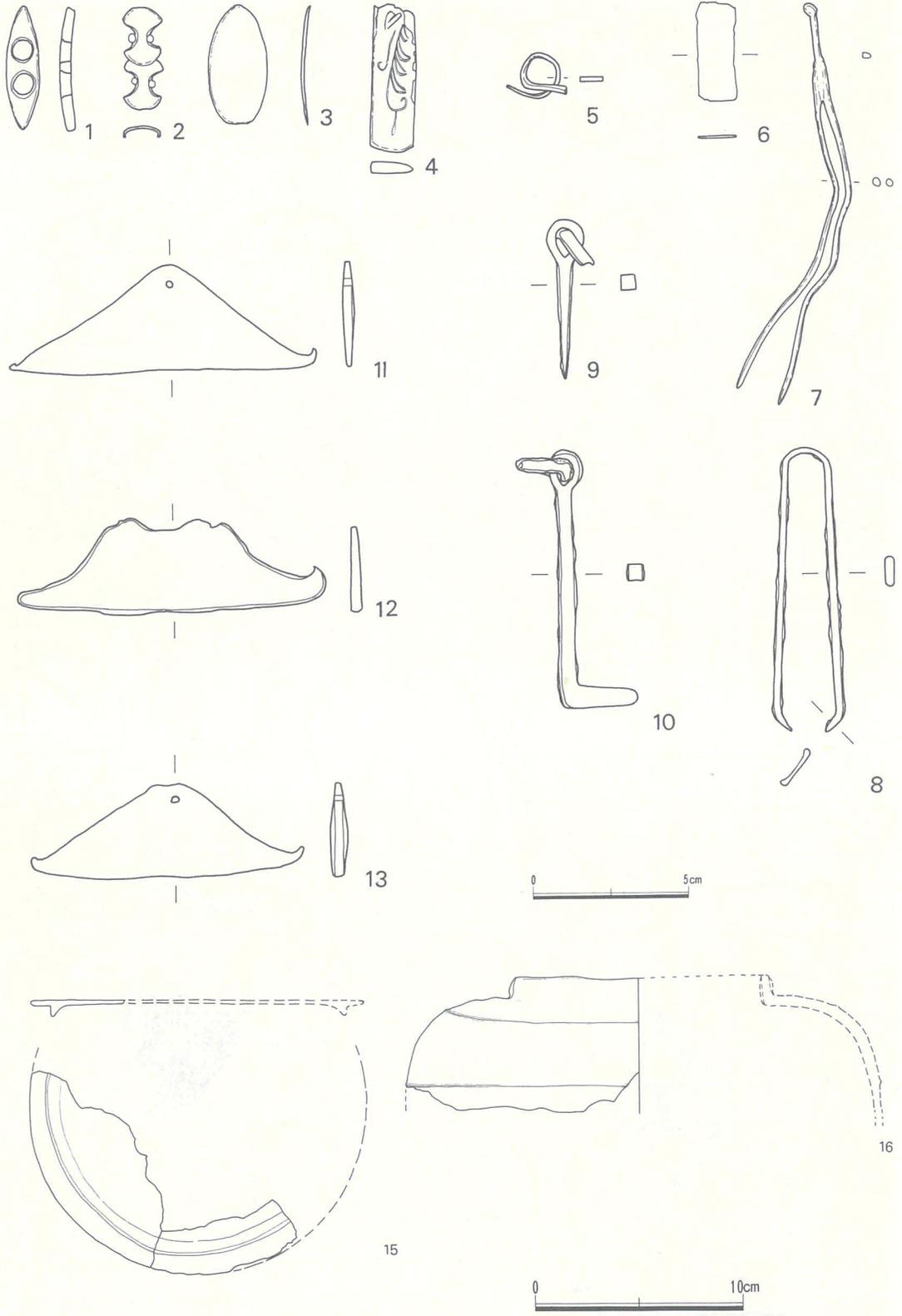


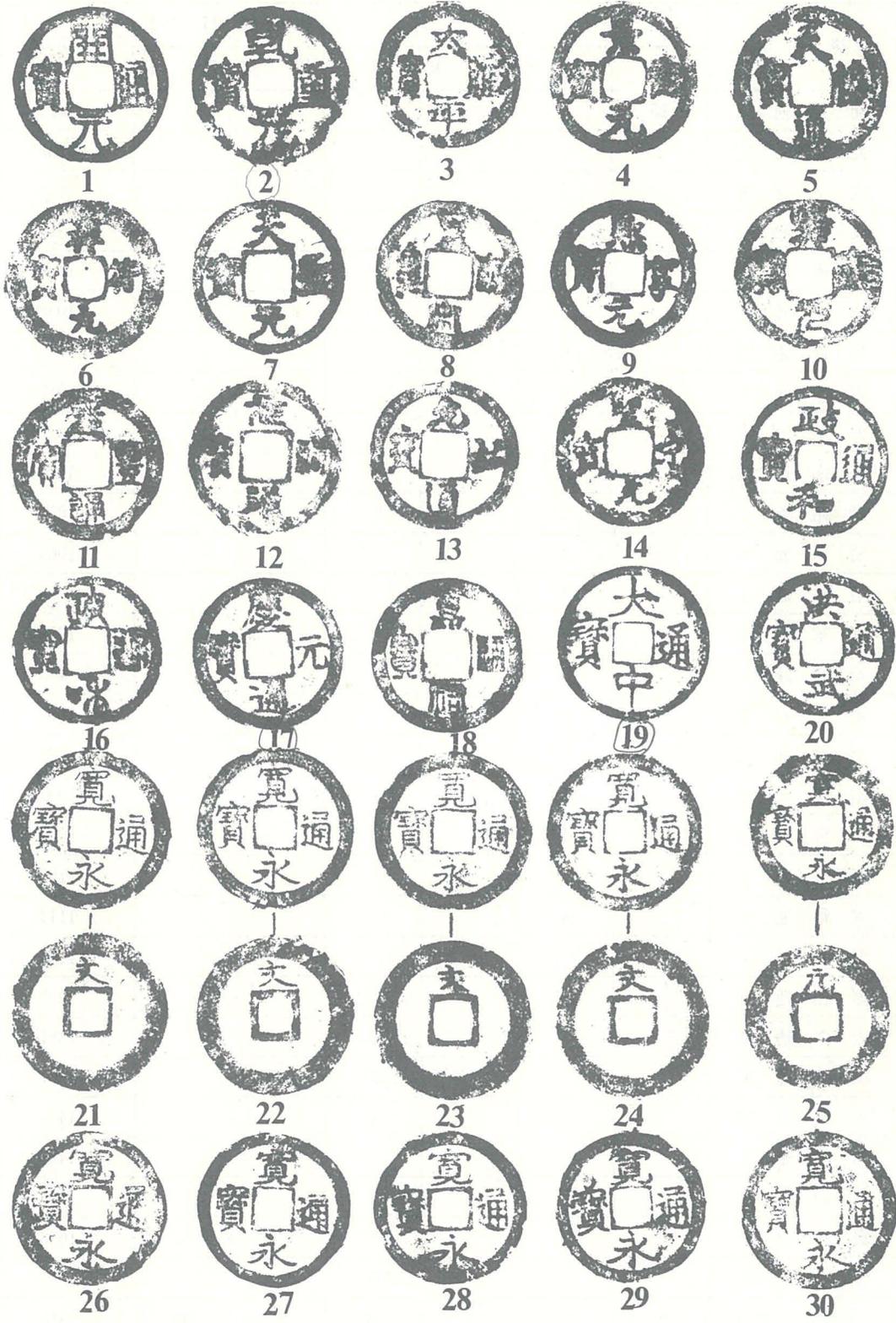
35



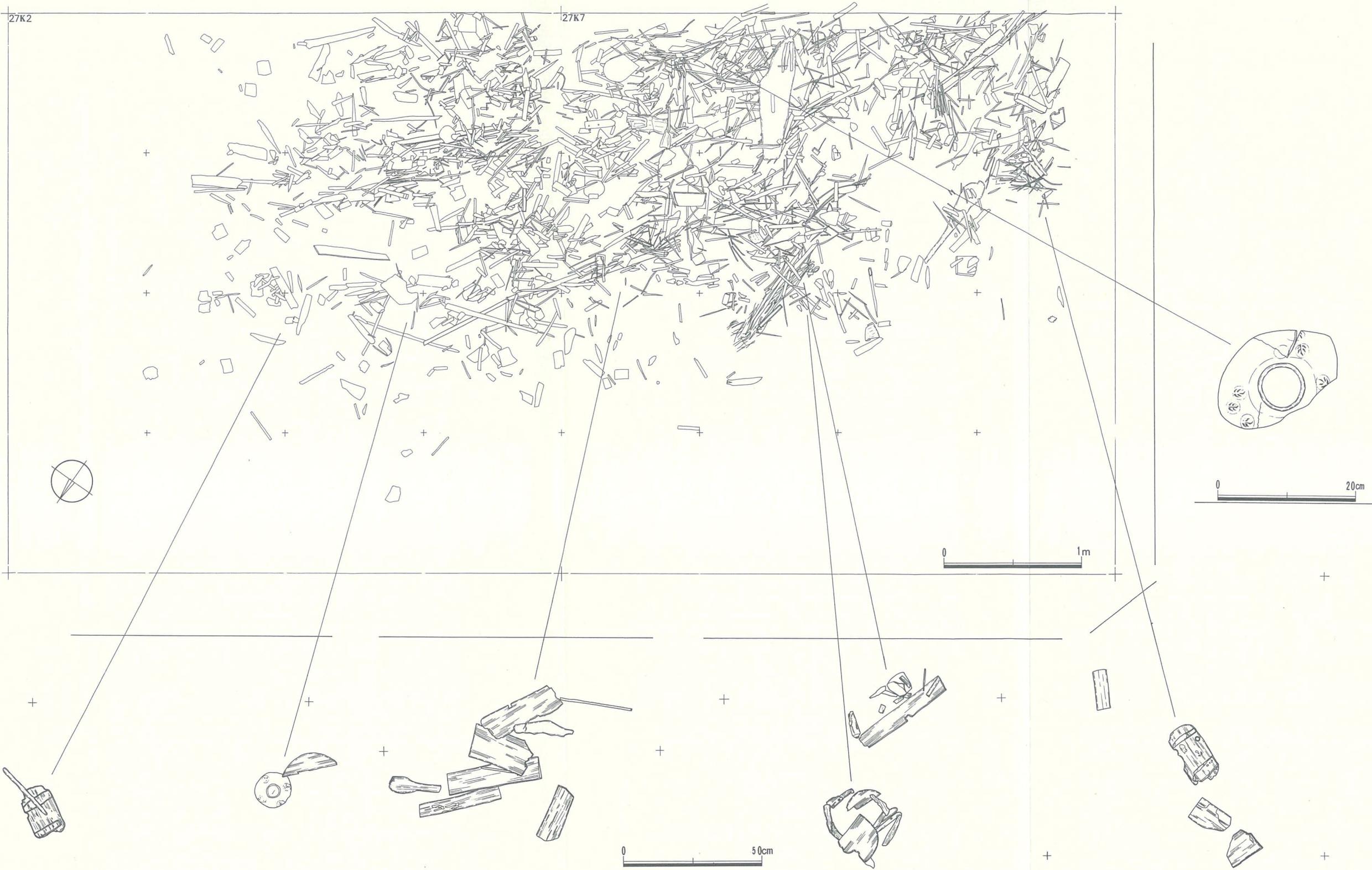


第15図 石製品(ふいごの羽口、石臼、磁石)

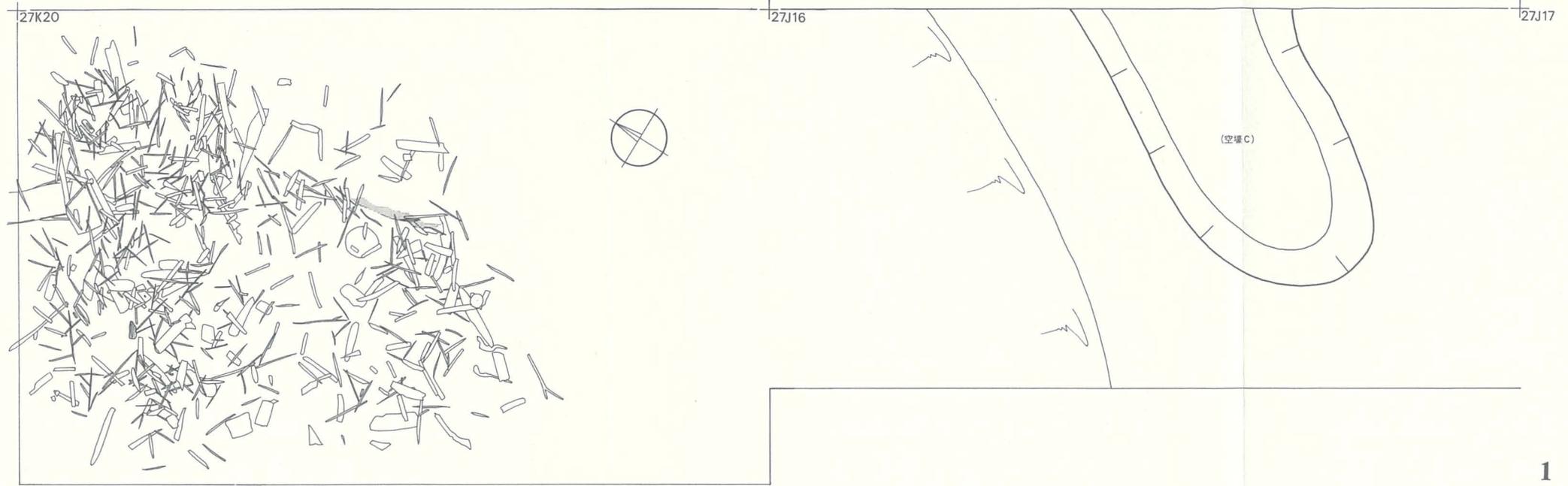




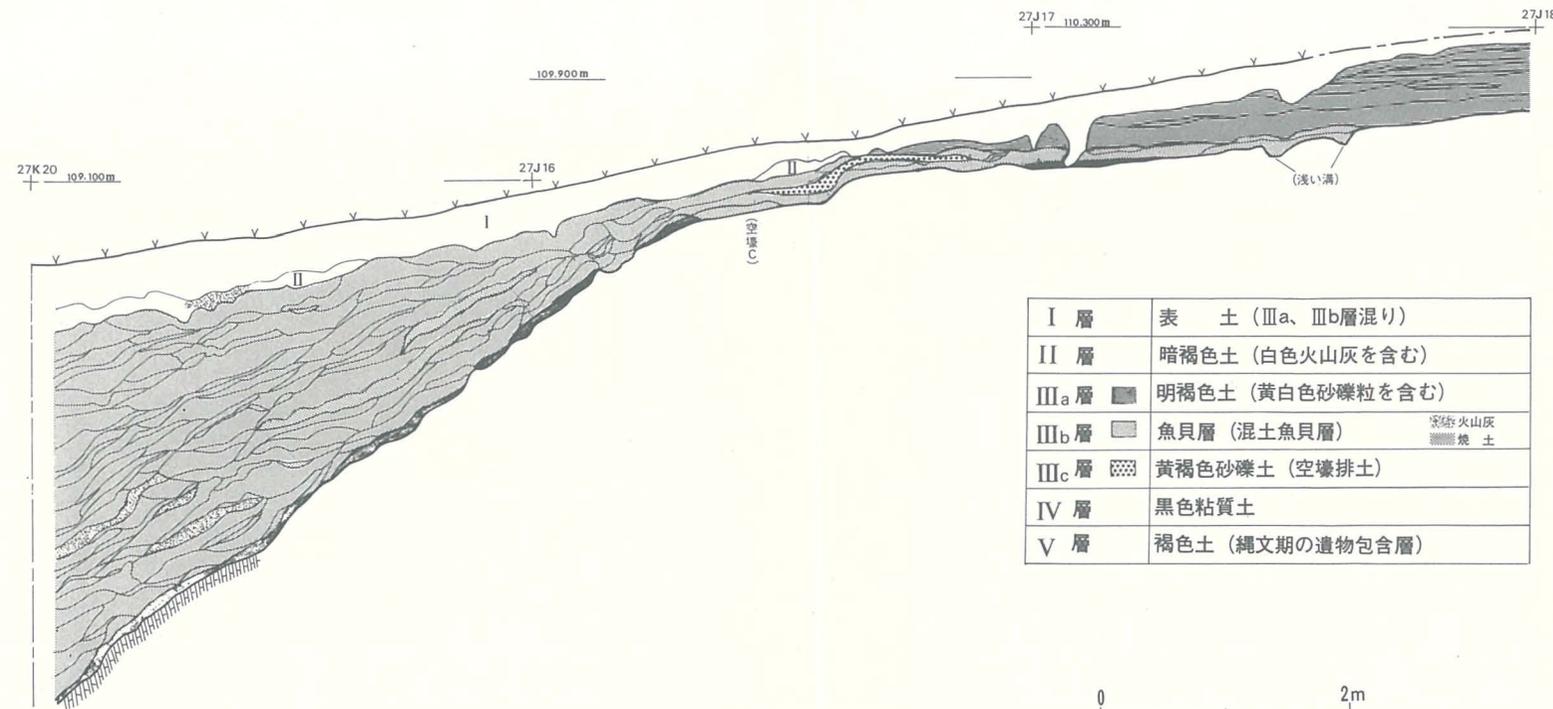
鑄名	中 国				朝 鮮	日 本	初 鑄 年
	唐	北 宋	南 宋	明	朝 鮮	日 本	
開元通寶	15						621
乾重元寶	1						758
太平通寶		5					976
成平元寶		2					998
景德元寶		5					1004
祥符元寶		3					1008
祥符通寶		6					1008
天禧通寶		6					1017
天聖元寶		4					1023
皇宗通寶		8					1039
嘉祐元寶		2					1056
治平元寶		1					1064
治平通寶		1					1064
熙寧元寶		7					1068
元豐通寶		14					1078
元祐通寶		4					1086
元祐元寶		1					1086
紹聖元寶		1					1094
元符通寶		1					1098
聖宋元寶		1					1101
政和通寶		4					1111
慶元通寶			1				1119
嘉熙通寶			1				1237
大中通寶				1			1361
洪武通寶				25			1367
永樂通寶				7			1408
朝鮮通寶					2		1423
弘治通寶				1			1488
寬永通寶						92	1636
解讀不明	418						
合計	16	76	2	34	2	92	616



第18図 木製品出土状況図(27K2、7区)



1

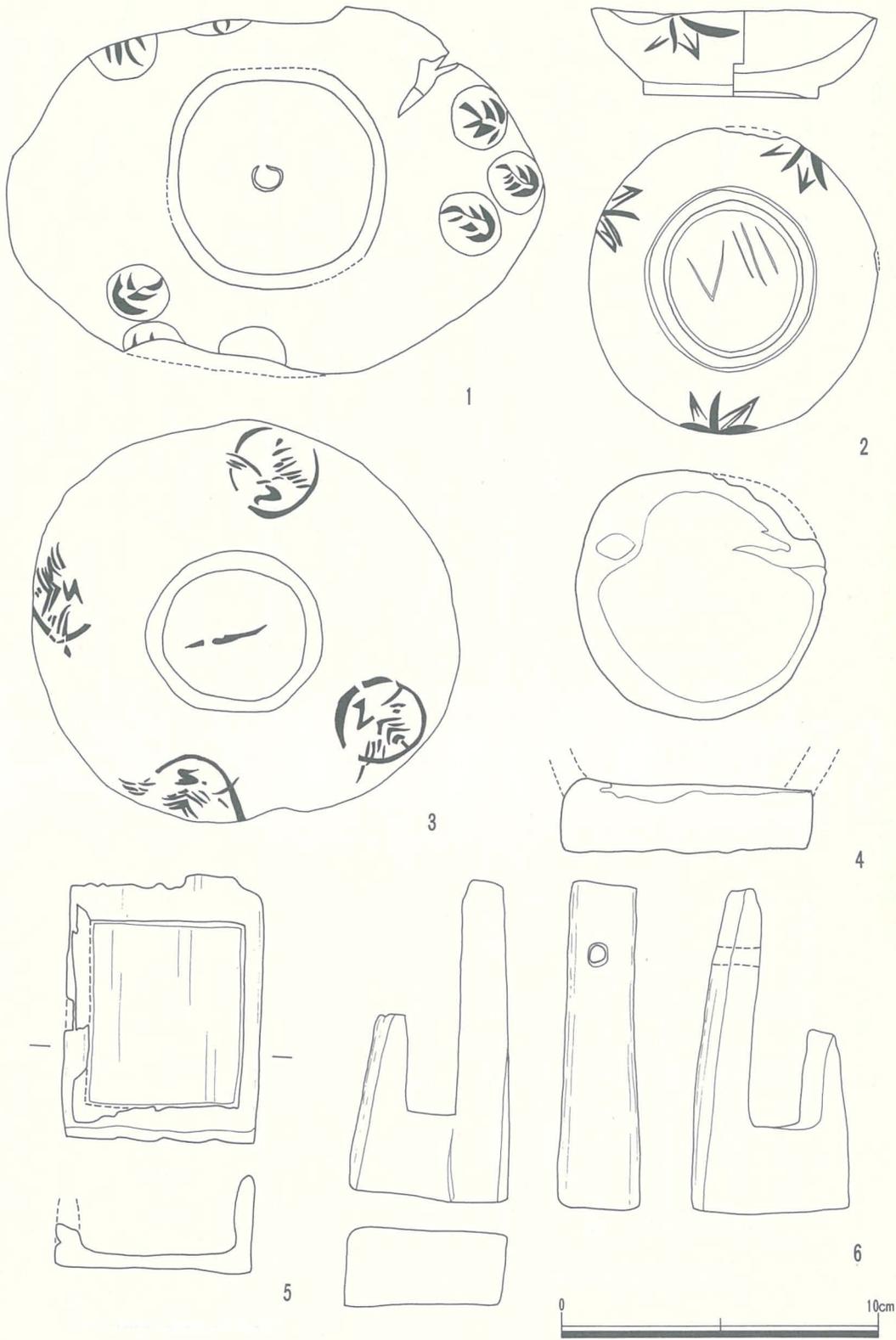


I 層	表土 (Ⅲa、Ⅲb層混り)
II 層	暗褐色土 (白色火山灰を含む)
Ⅲa 層	明褐色土 (黄白色砂礫粒を含む)
Ⅲb 層	魚貝層 (混土魚貝層)
Ⅲc 層	黄褐色砂礫土 (空壕排土)
IV 層	黒色粘質土
V 層	褐色土 (縄文期の遺物包含層)



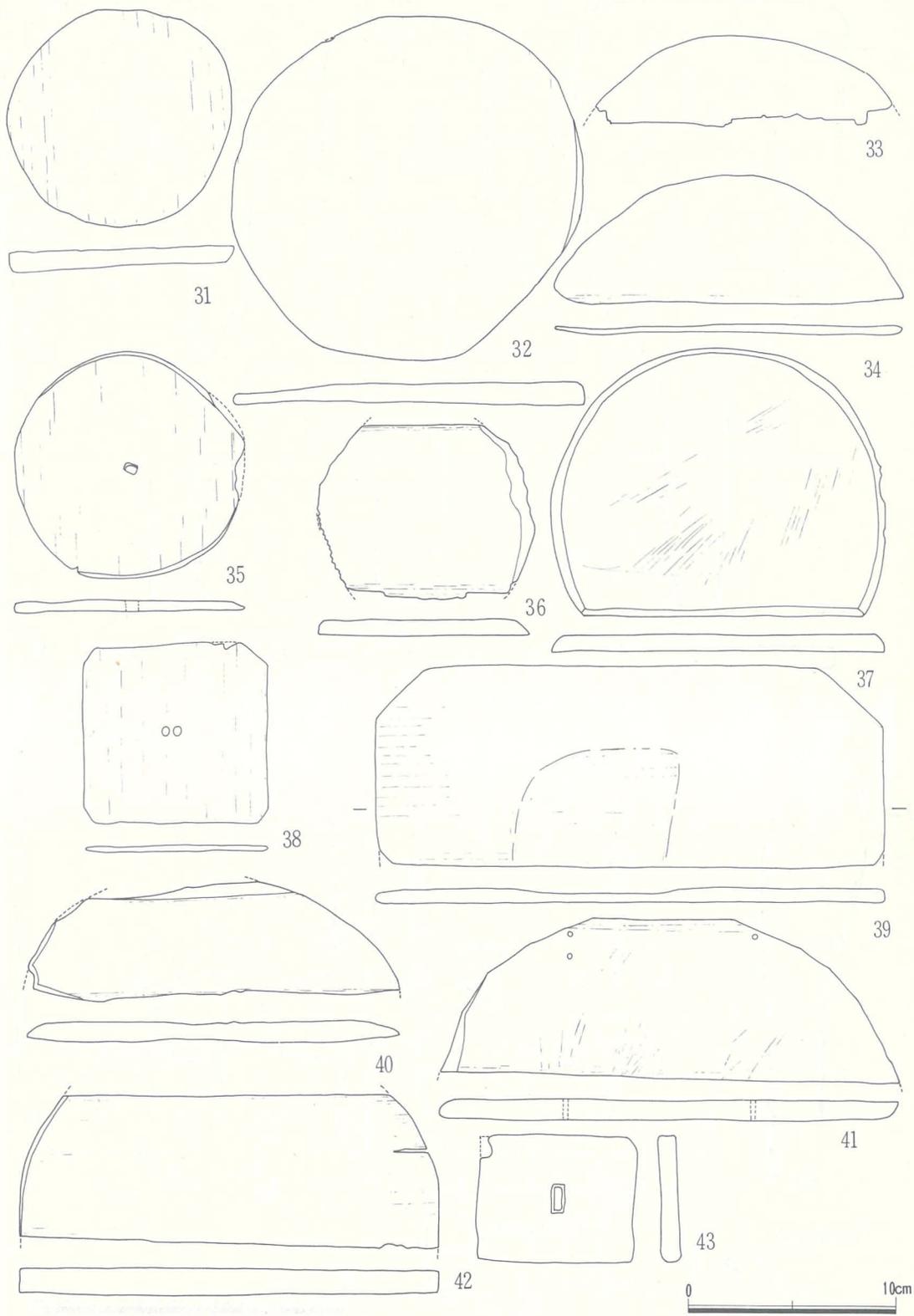
2

第20図 木製品出土状況図及びセクション図(27K20、27J16、17区)

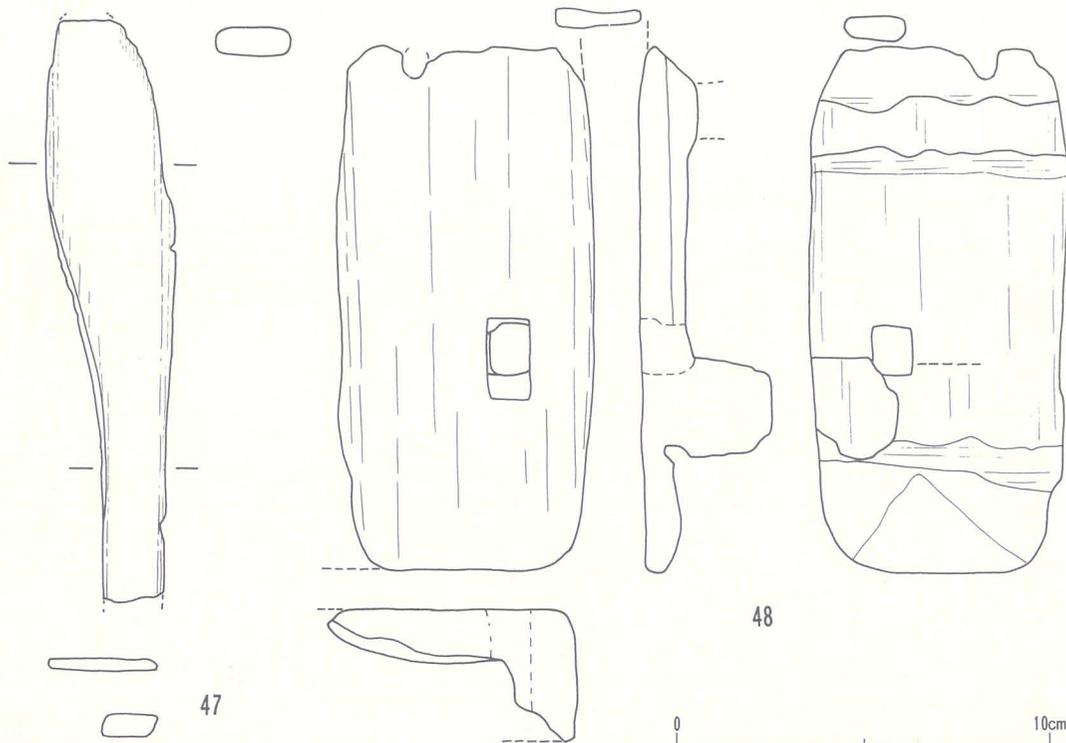
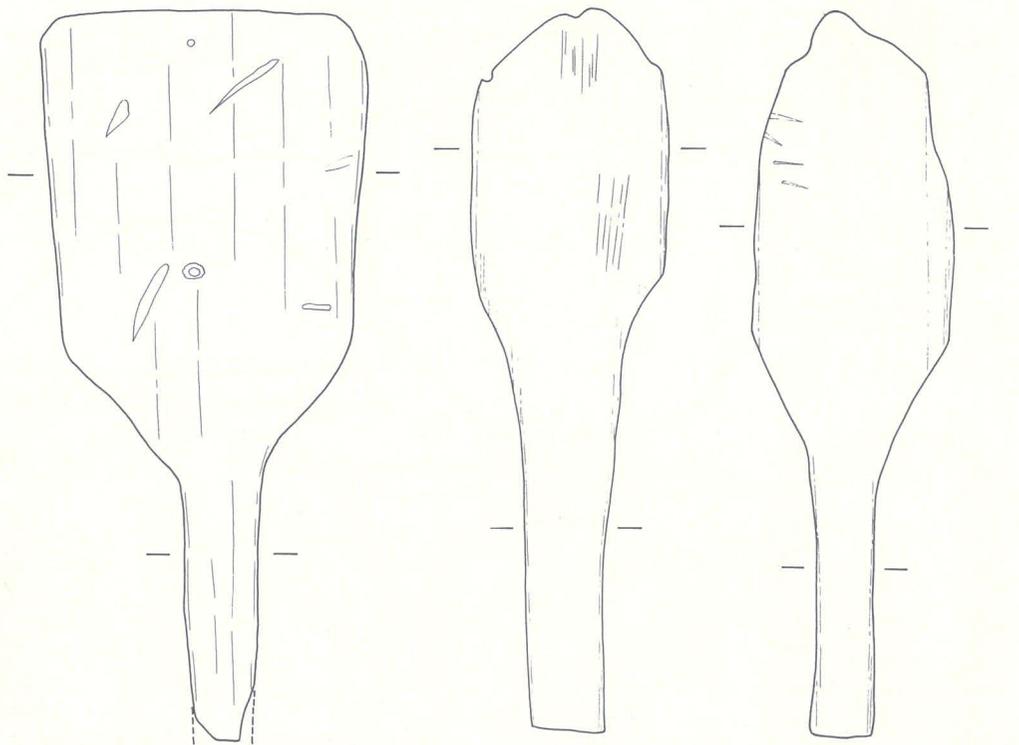


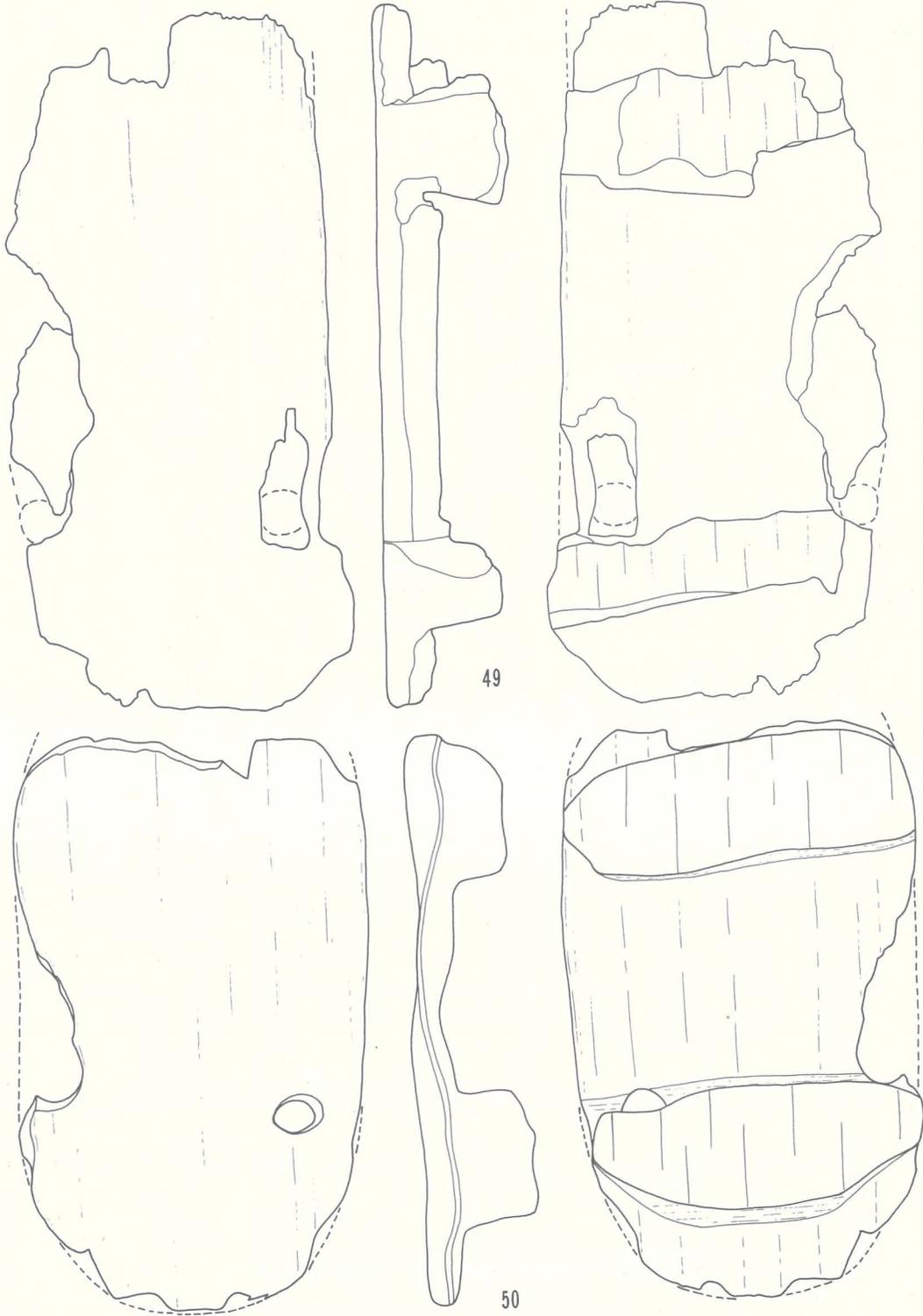
第22図 木製品 (漆器、その他)



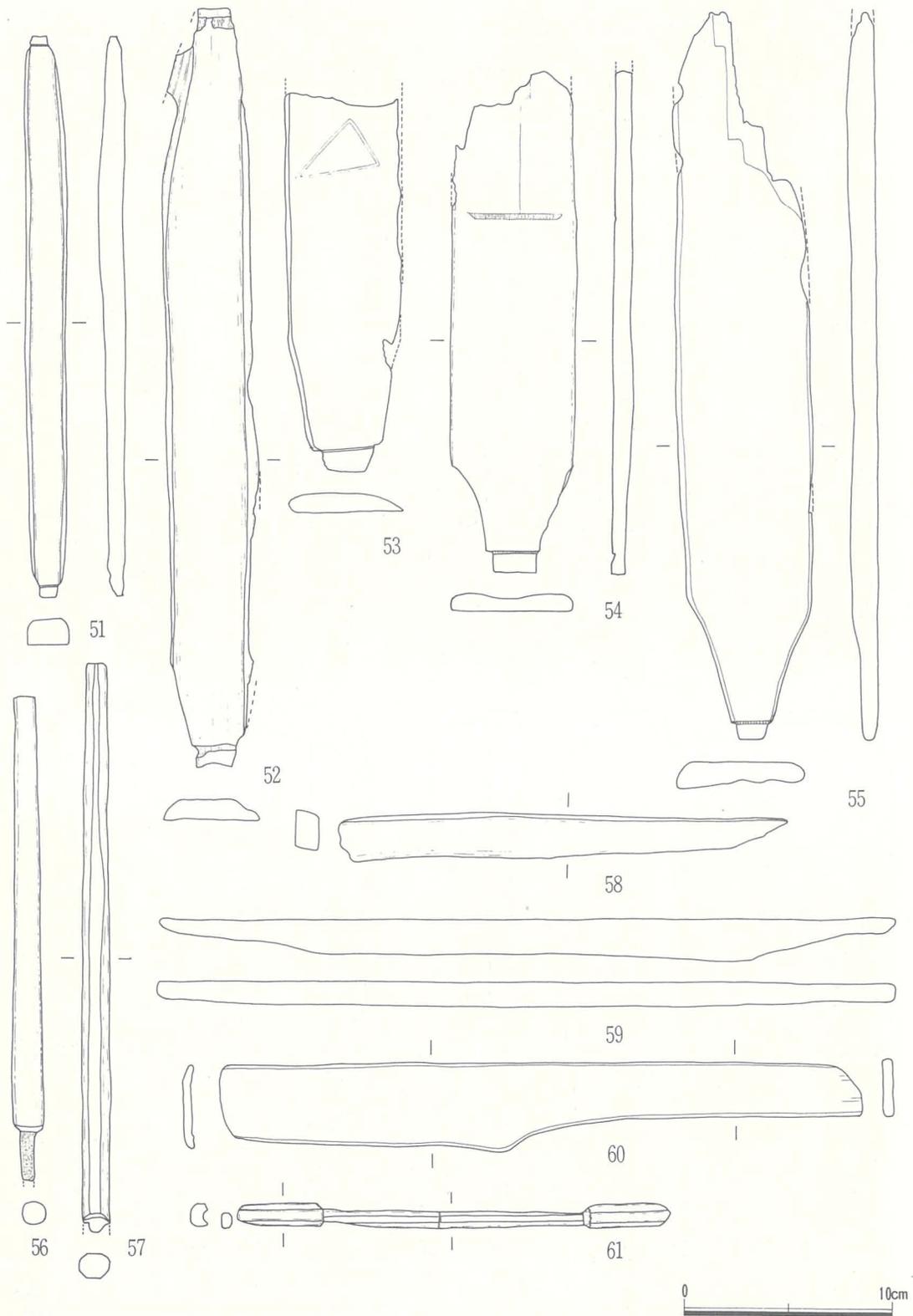


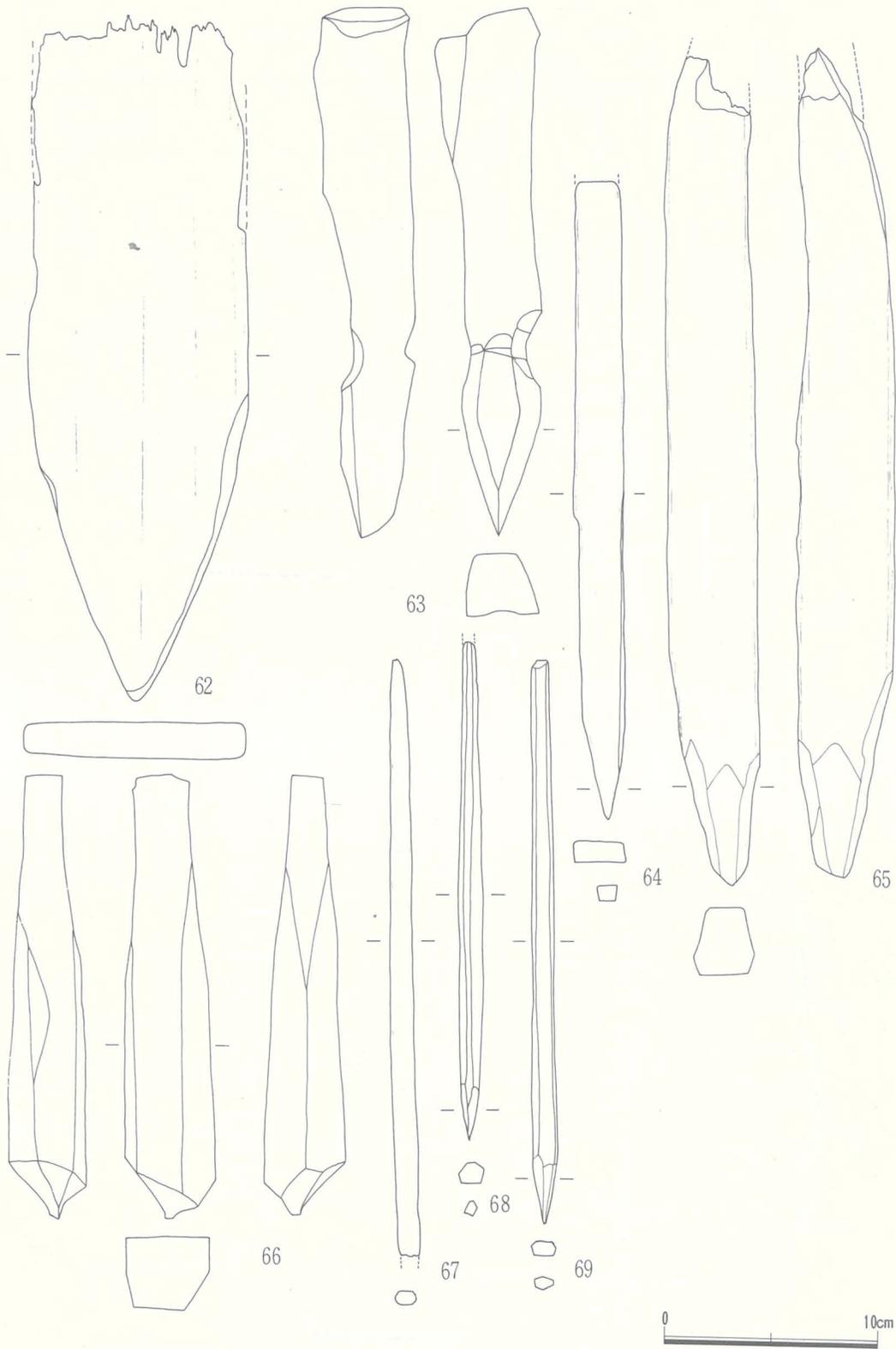
第24図 木製品(底板、蓋、折敷)



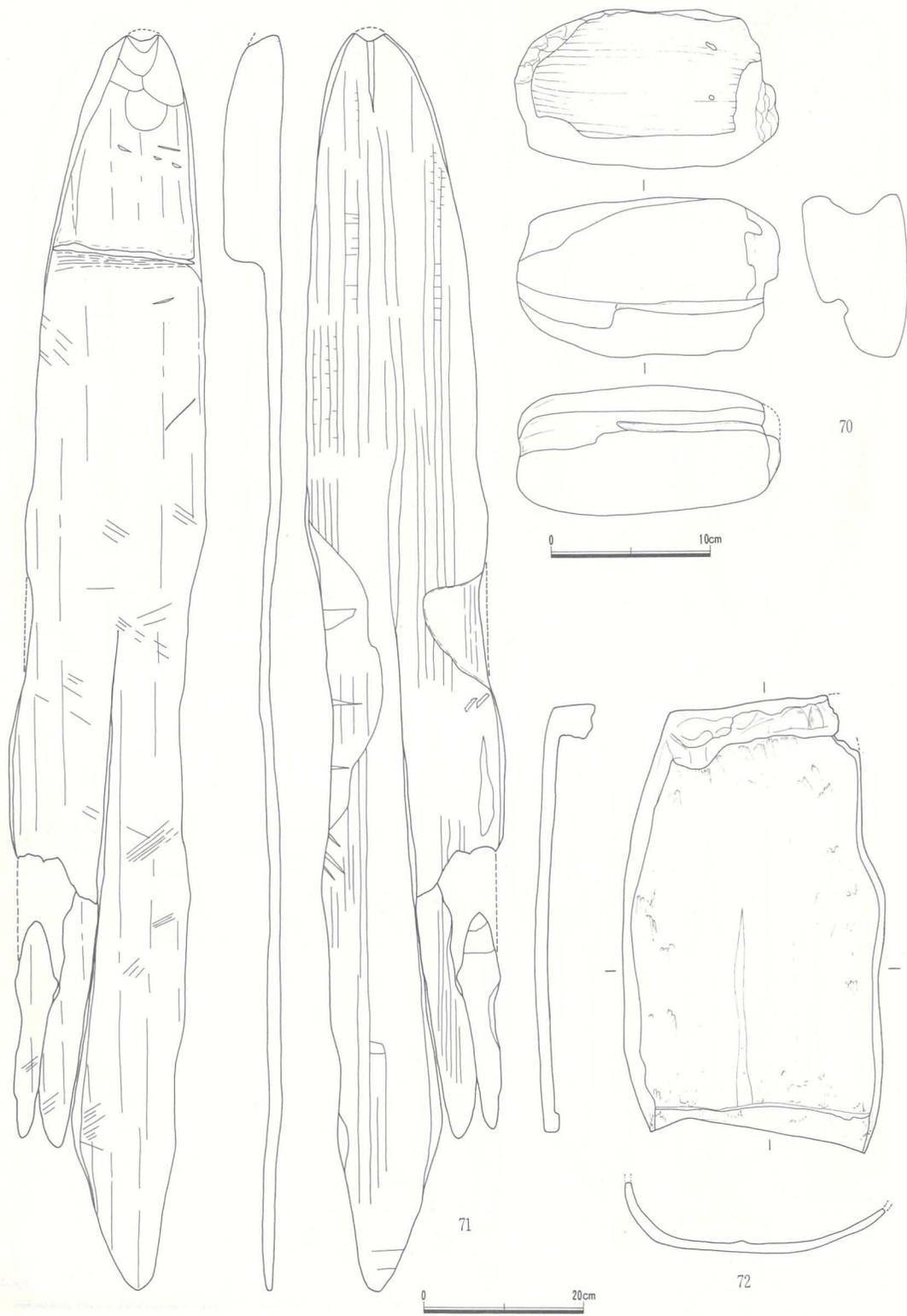


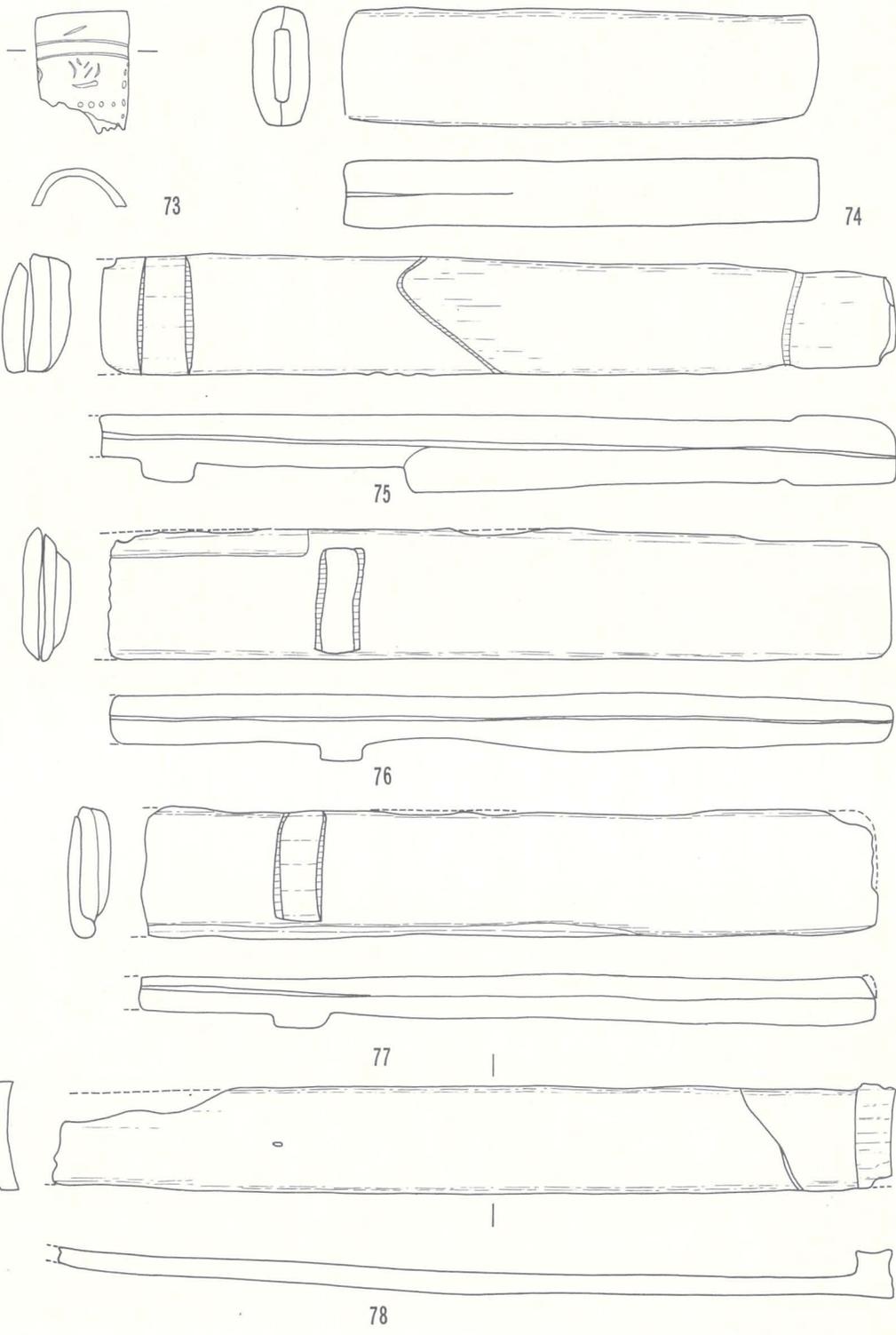
第26図 木製品(下駄)



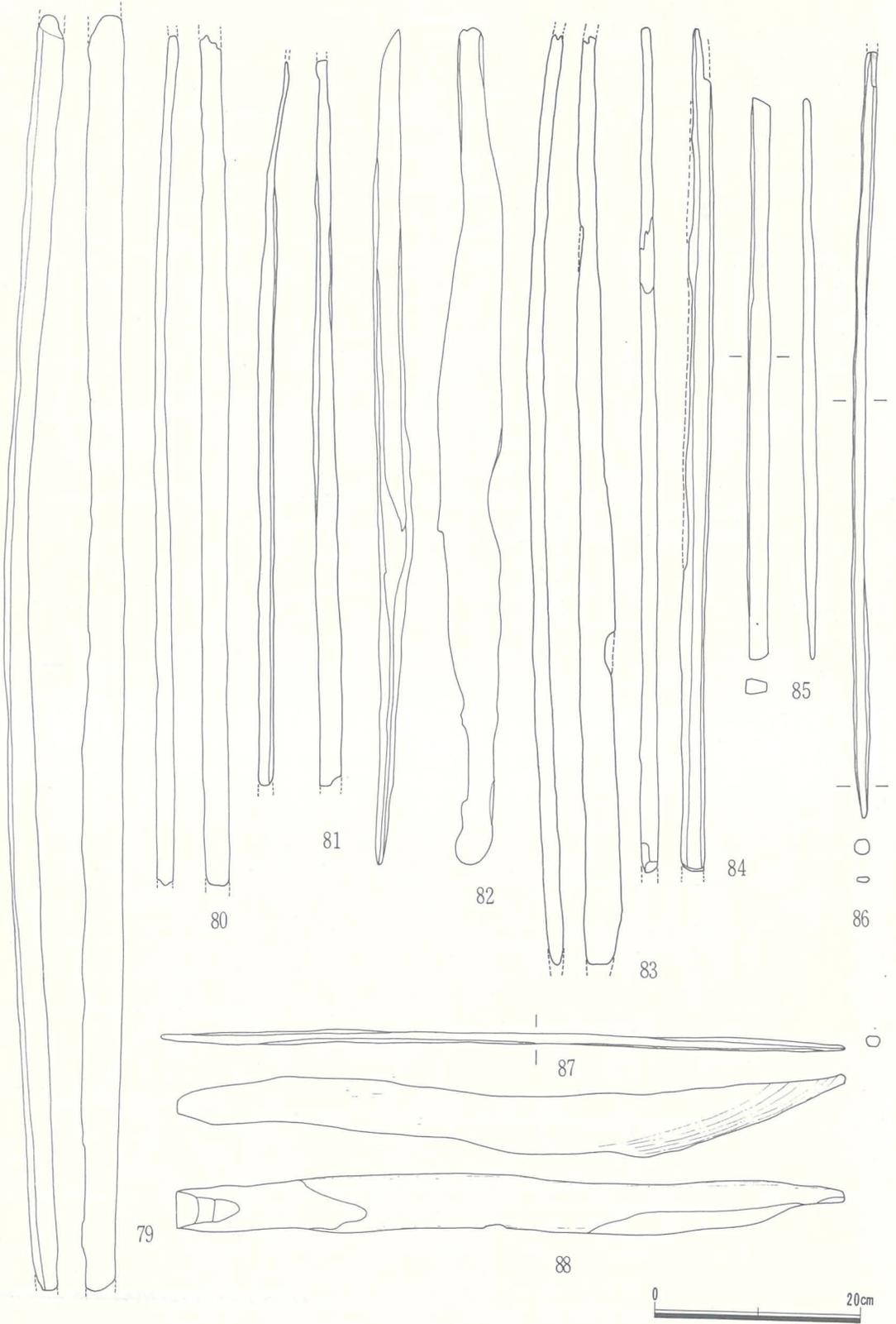


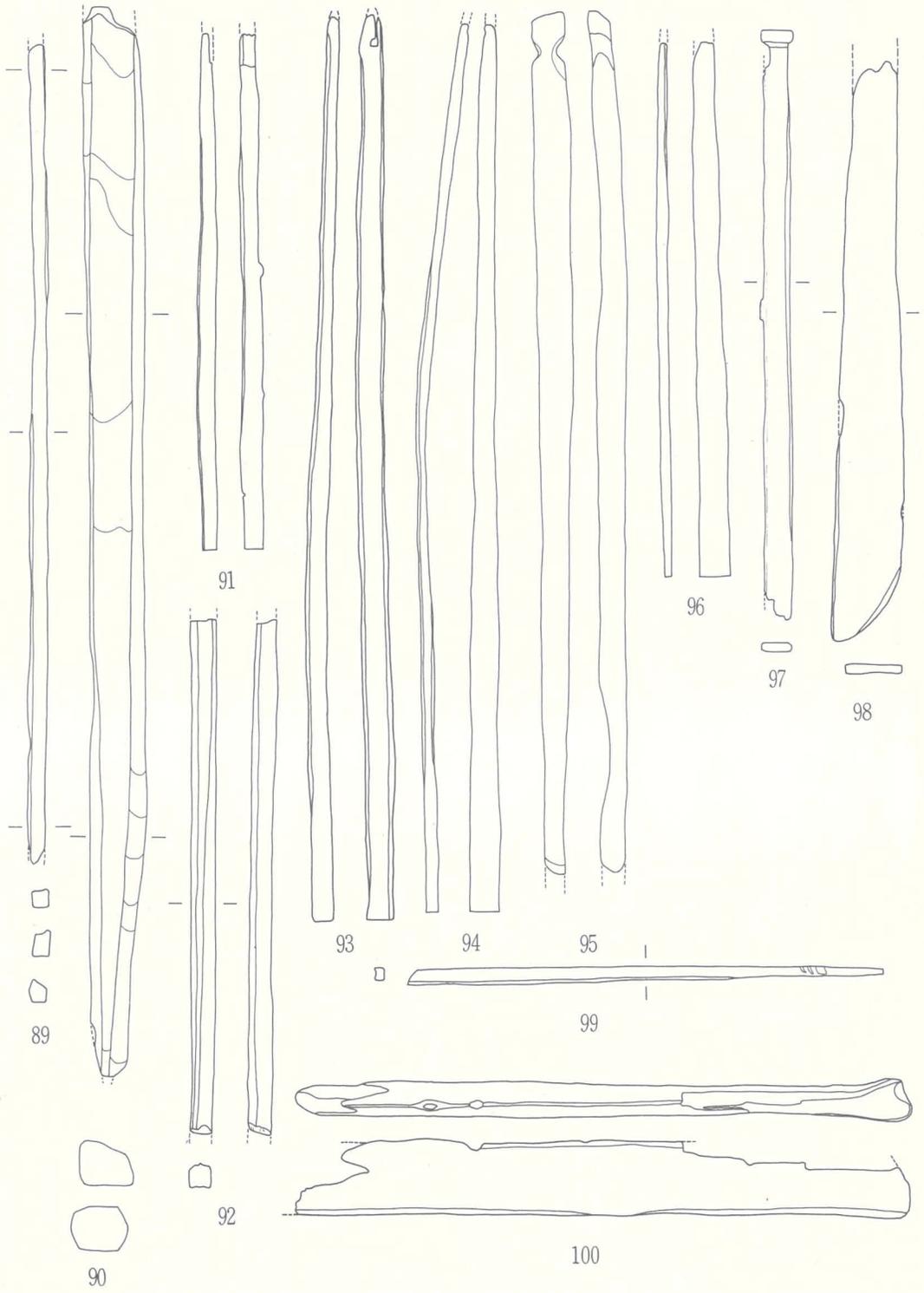
第28図 木製品(杭状木製品、クシ状木製品)



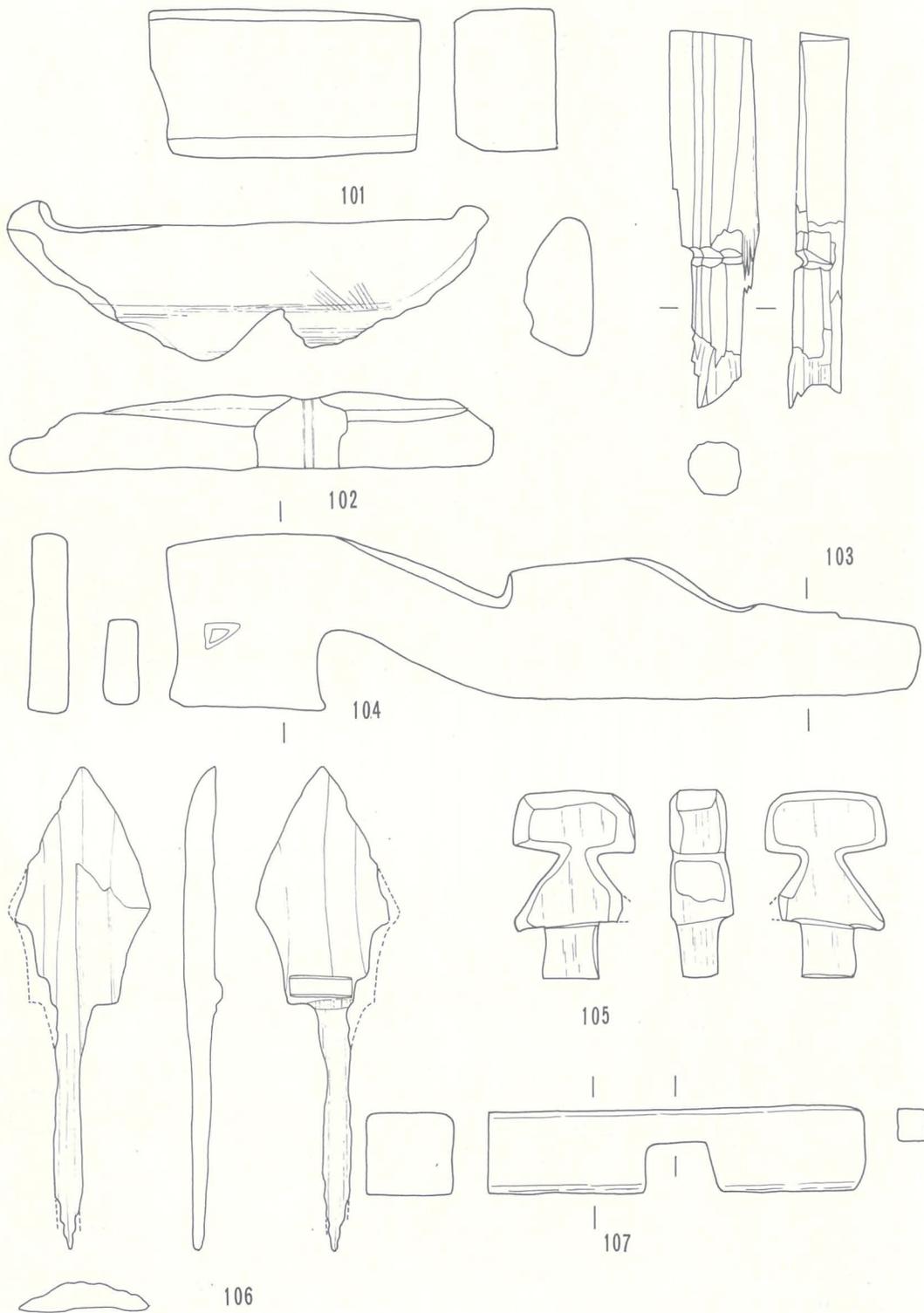


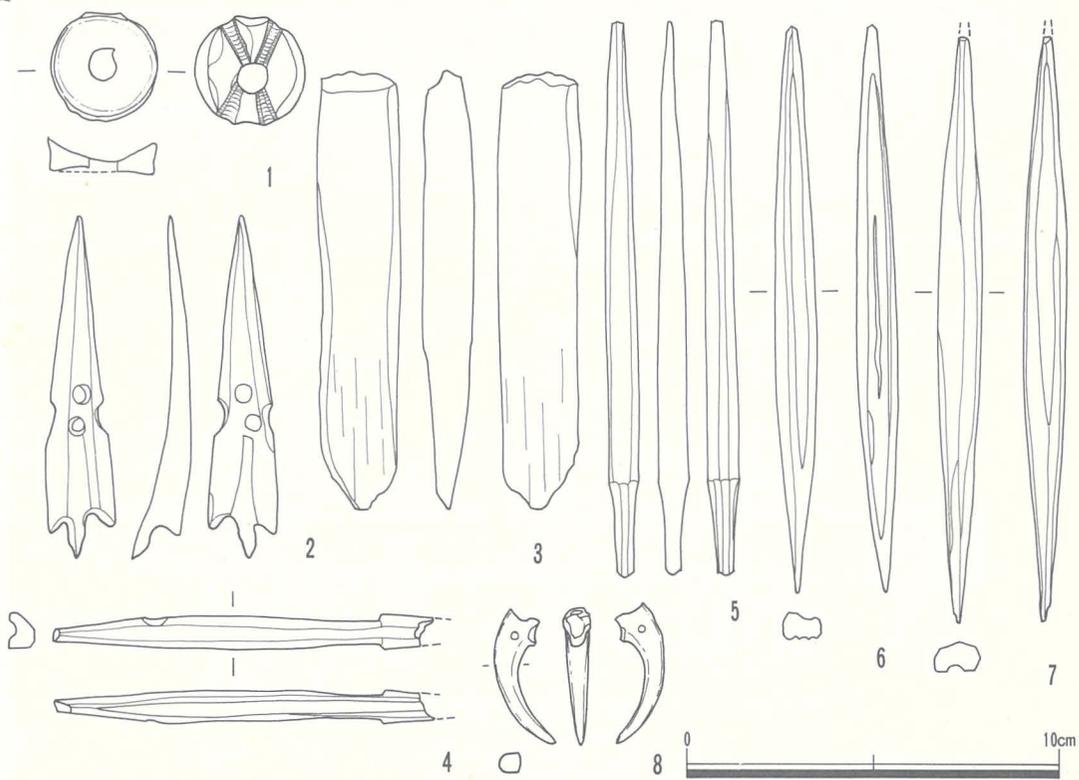
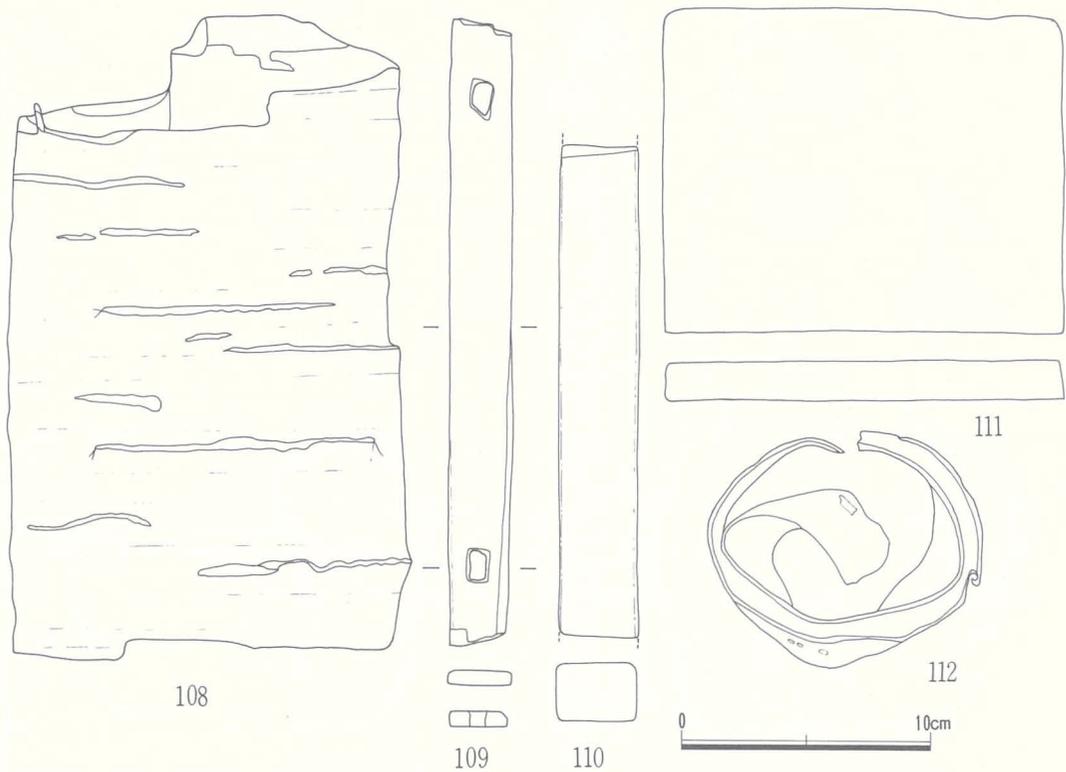
第30図 木製品(鞘)

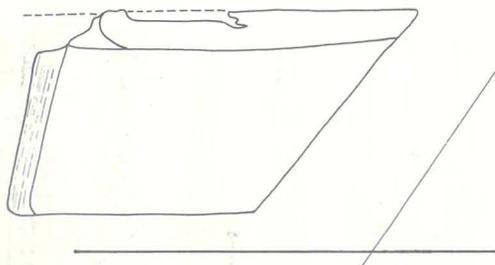
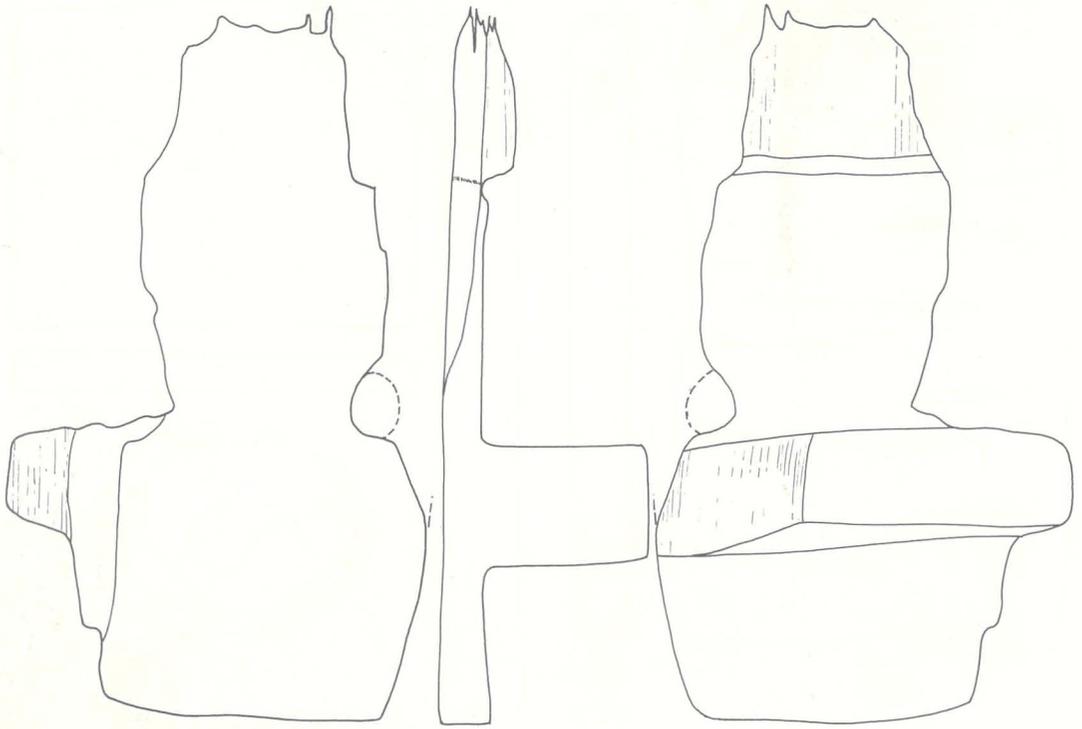




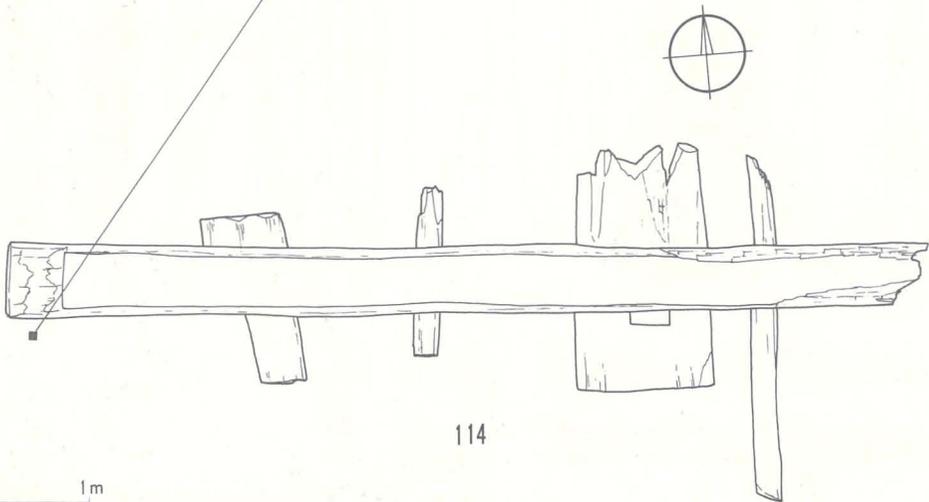
0 20cm





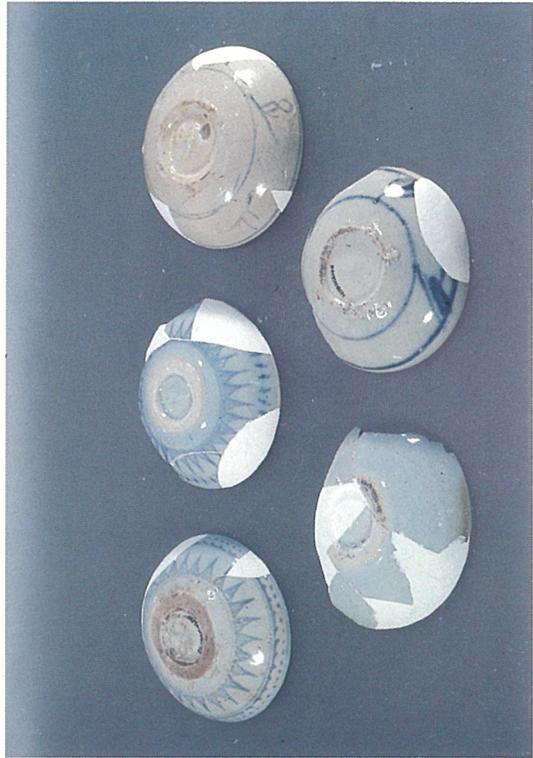


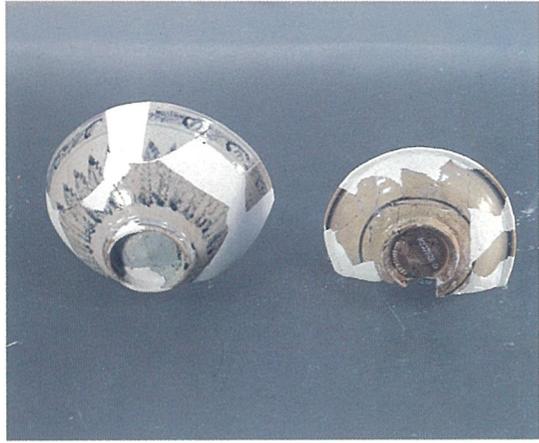
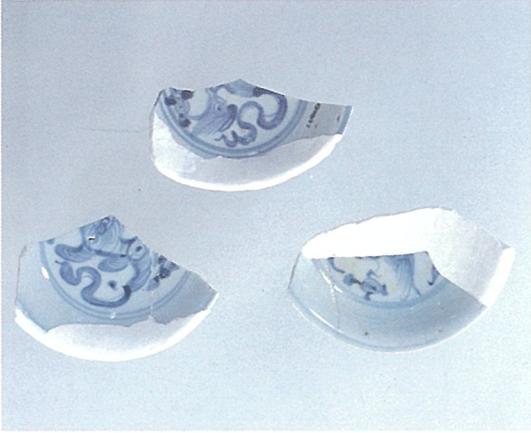
113

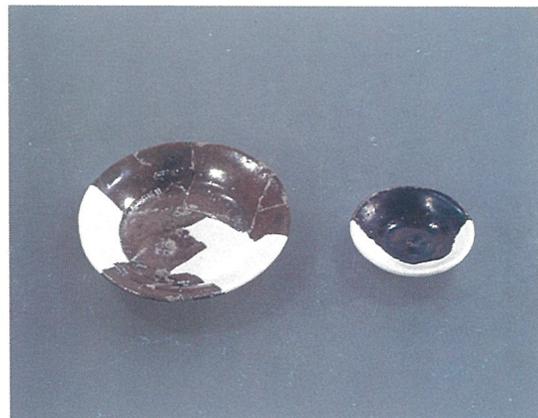


114















壕跡部遠景 1 (発掘前)



壕跡部遠景 2 (発掘後)



作業風景 1 (土堤部)



作業風景 2 (壕跡部)



道路状遺構



溝遺構全景 1 (北東より)



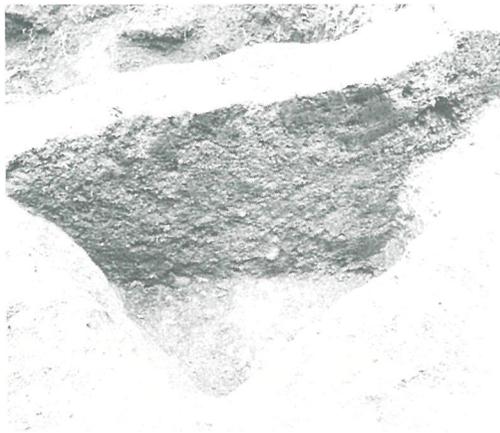
溝遺構全景 2 (南西より)



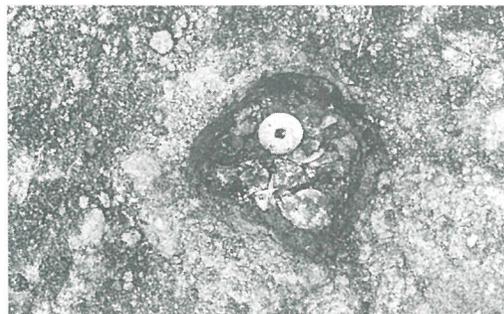
溝遺構全景 3 (北東より)



道路状遺構及び溝遺構セクション



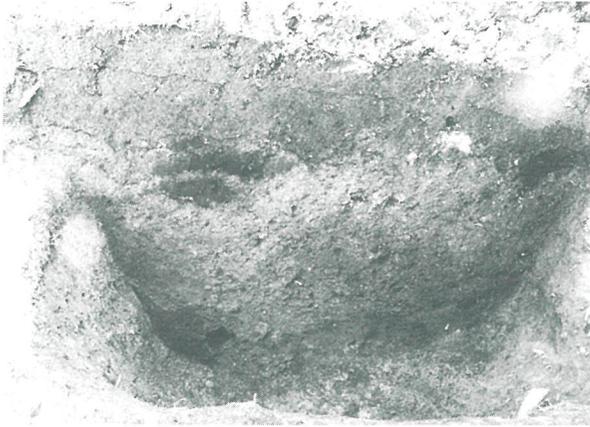
1号墓セクション



1号墓出土の古銭



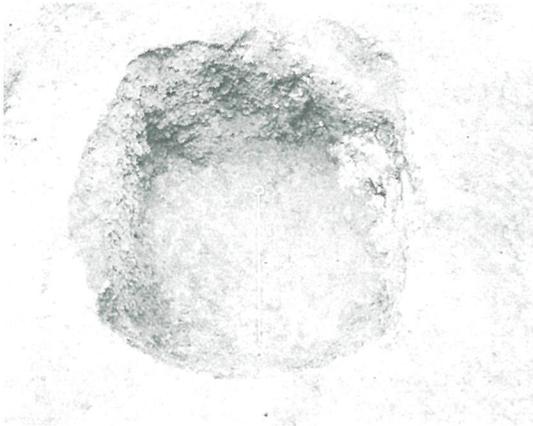
1号墓全景



2号墓セクション



2号墓全景



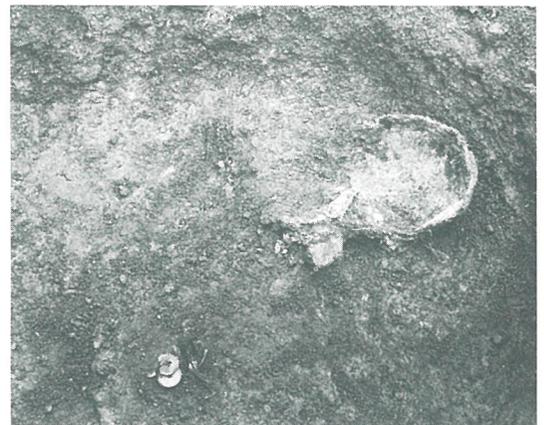
3号墓全景



4号墓セクション



4号墓全景



4号墓出土の人骨及び古銭



5号墓セクション



5号墓出土の人骨



6号墓セクション



6号墓全景



7号墓の確認面



墳墓群の実測作業



墳墓群遠景



木製品出土状況 1 (27K 2・7区)



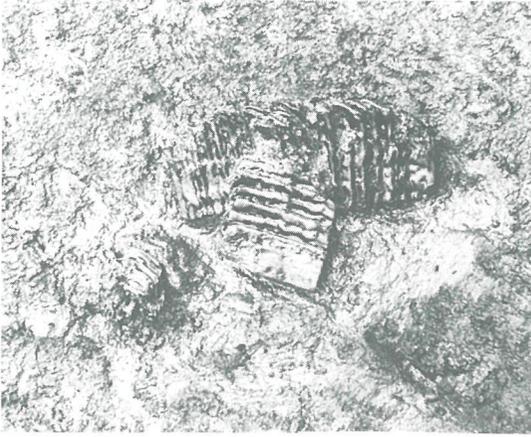
木製品出土状況 (27K 7区)



水汲み作業 (27K20区)



27K20区北壁セクション



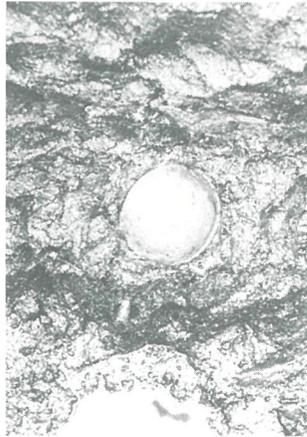
鎧の一部



天目碗



石製羽口



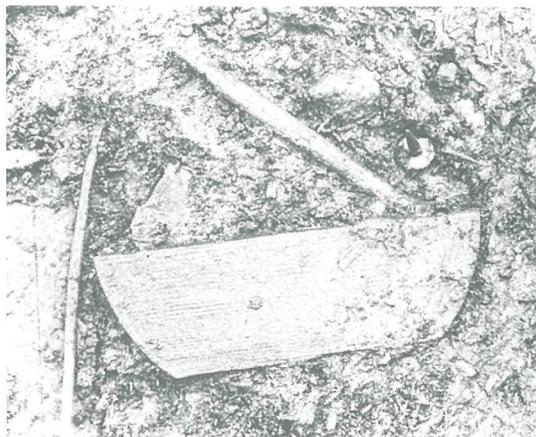
漆器1 (盃)



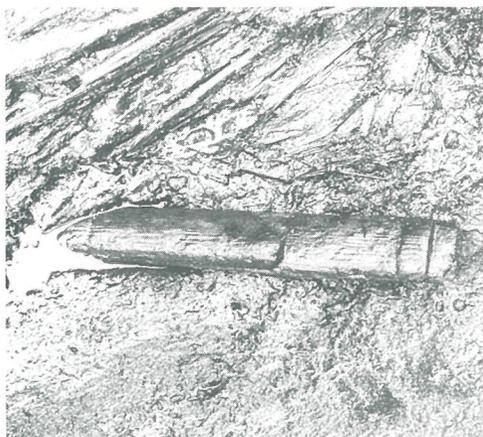
漆器2 (碗)



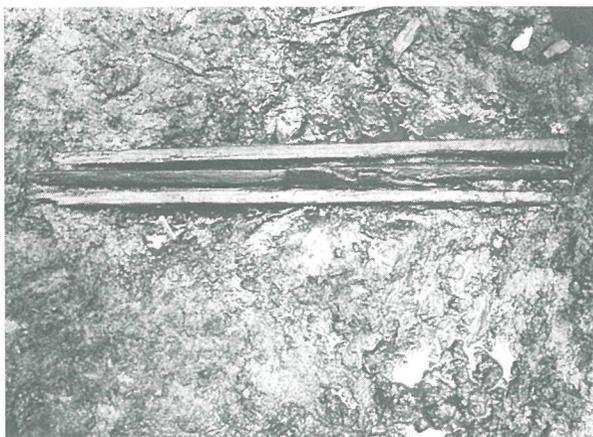
漆器3 (碗)



桶底板・錐



鞘



弓状木製品



下駄



ヘラ



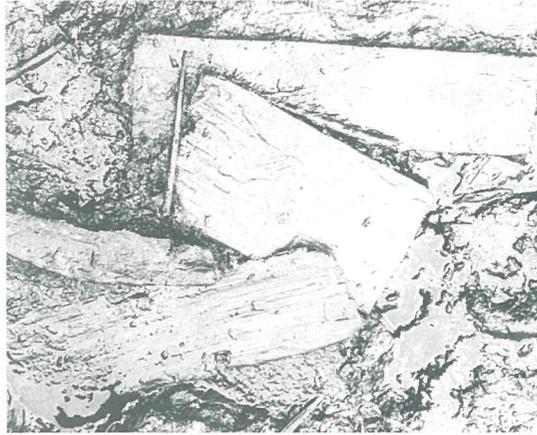
曲物の底板



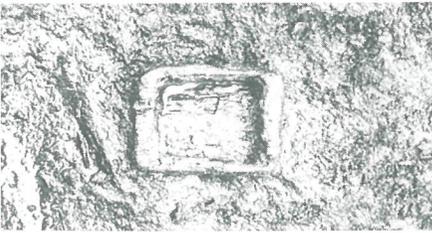
曲物



杭状木製品



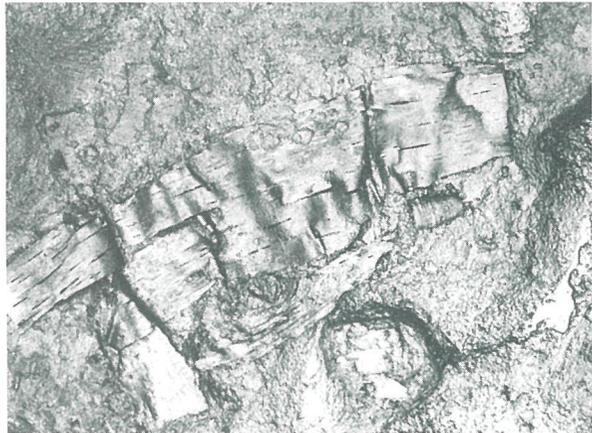
板 材



小物入れ状木製品



獣骨 1



樹 皮



獣骨 2 (鳥類)



獣骨 3 (馬)



その他の木製品



丸木舟状木製品1 (北東より)



丸木舟状木製品2 (南東より)



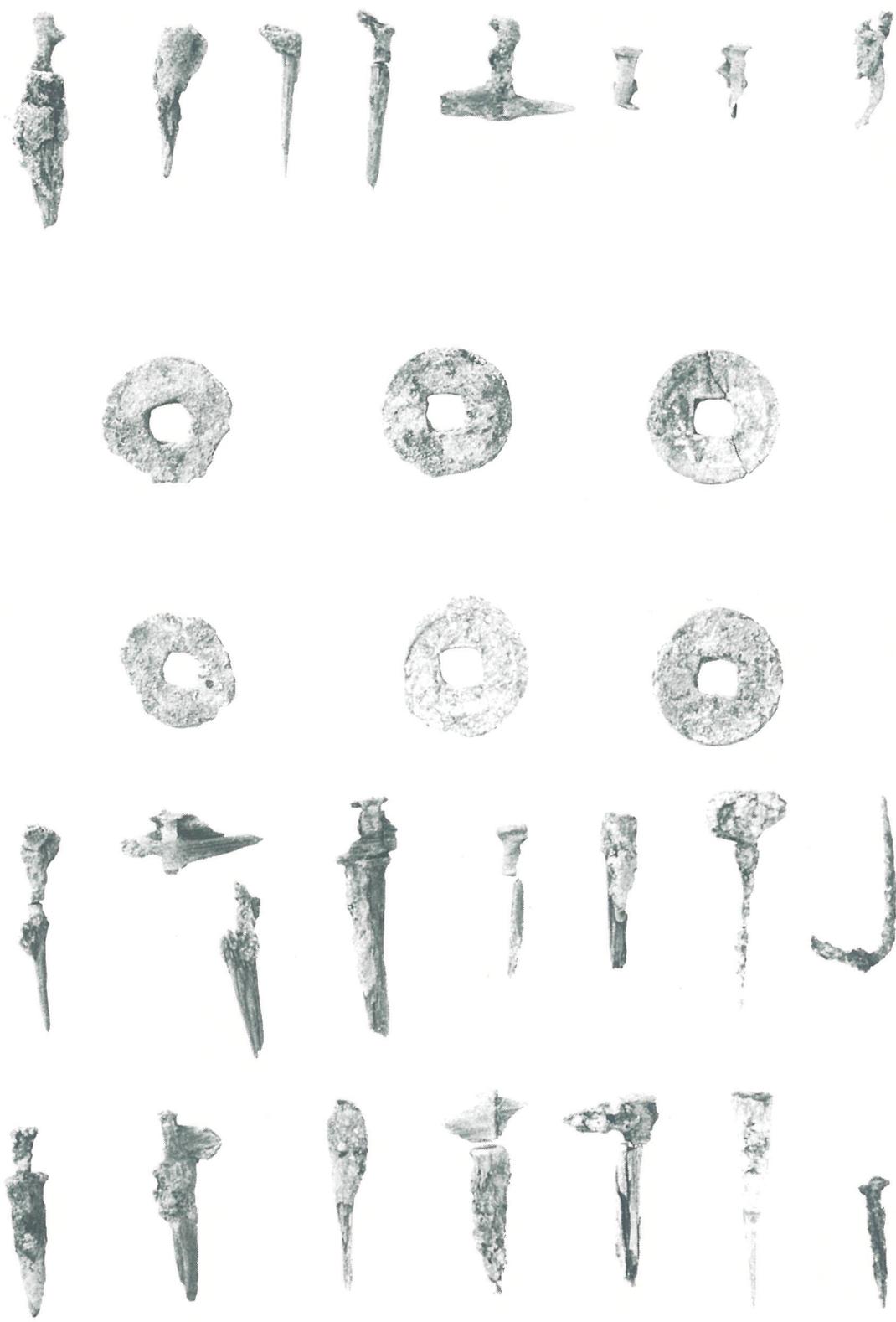
丸木舟状木製品と下駄



調査後の壕跡部

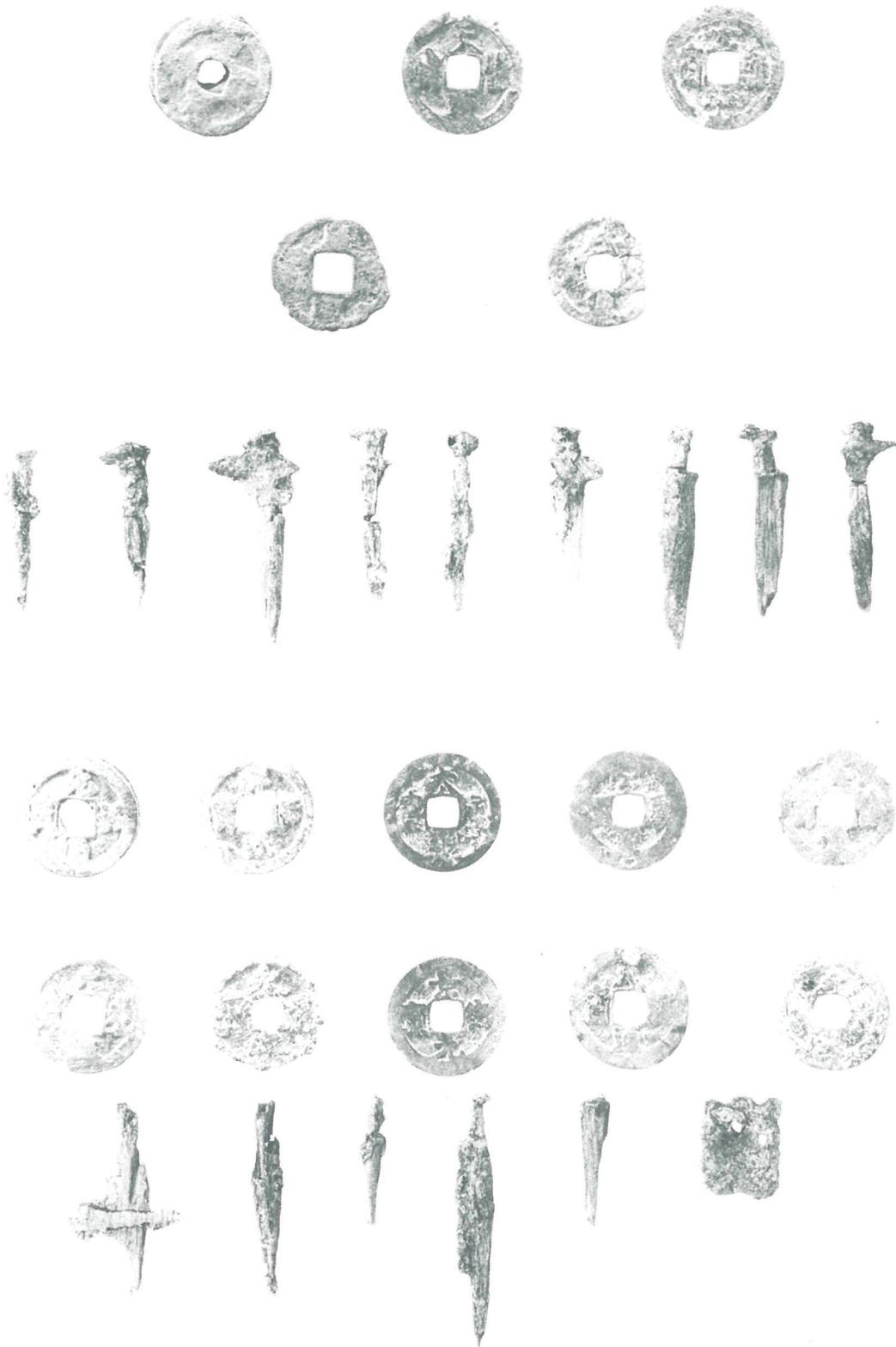


芝張後の空壕A

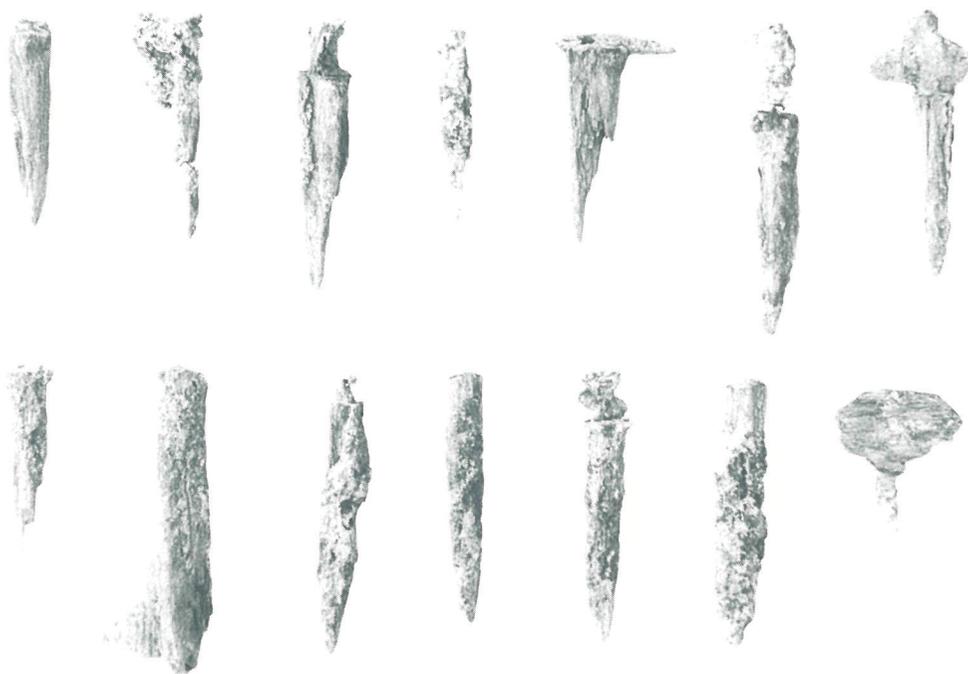
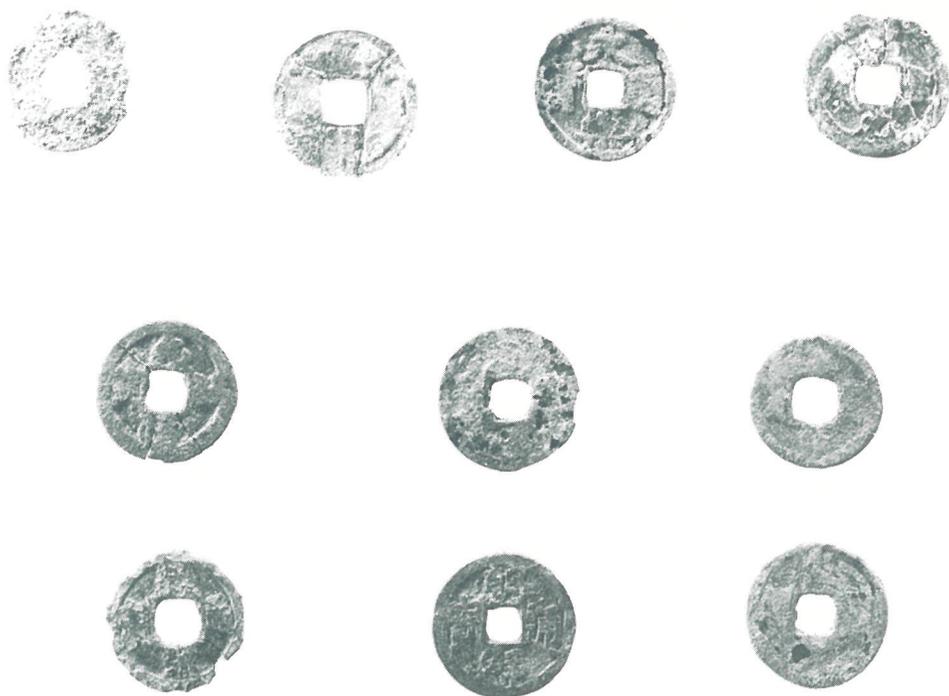


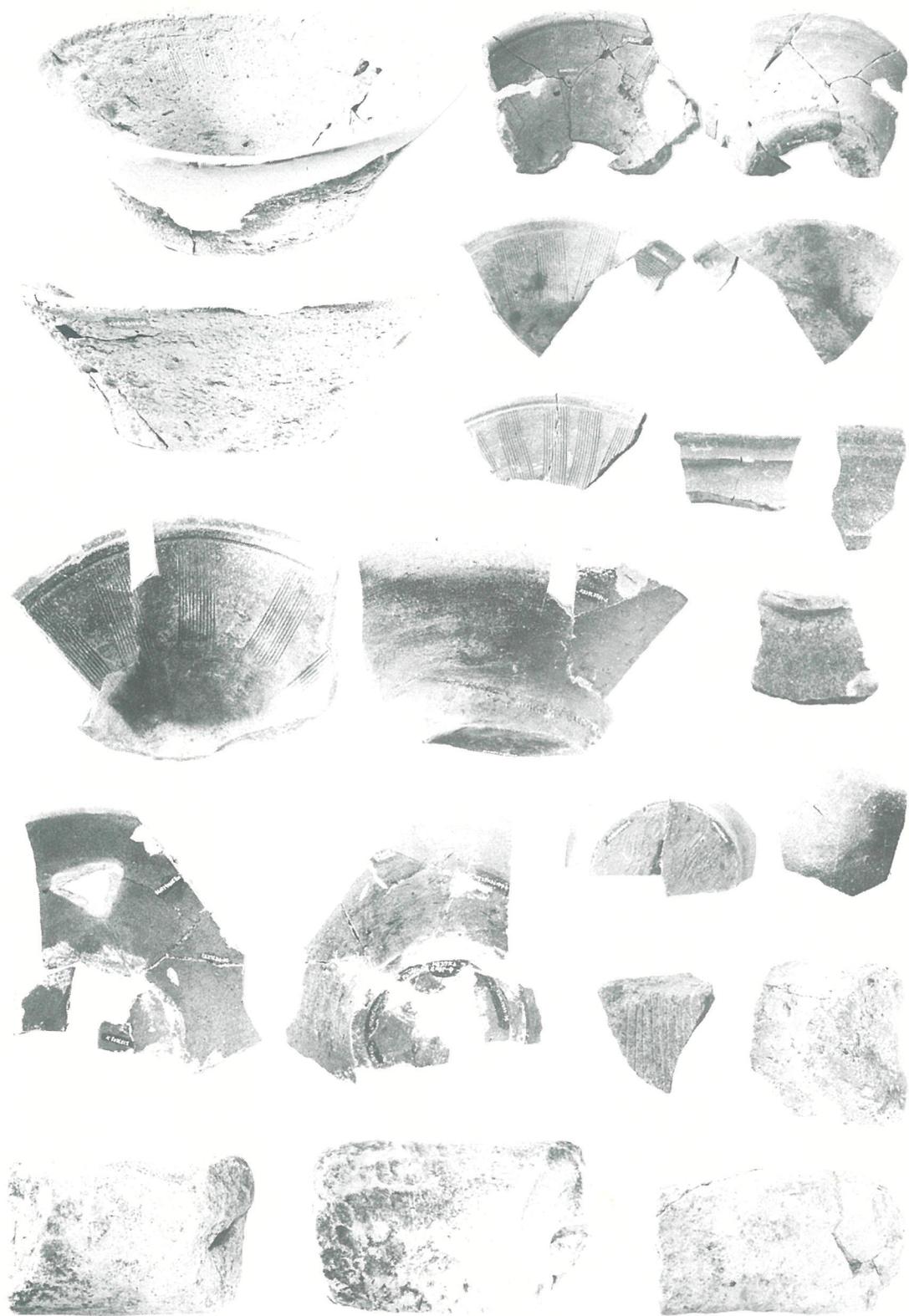
PL15 墳墓出土の釘、釣針、古銭(上、1号墓・下、2号墓)

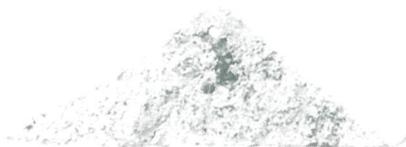
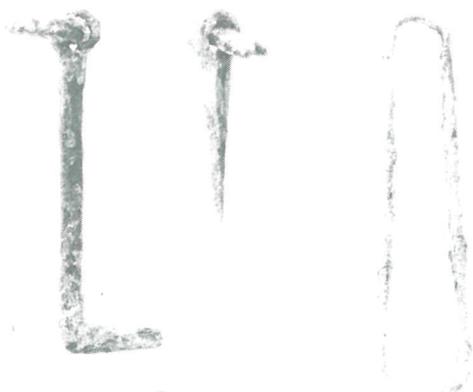


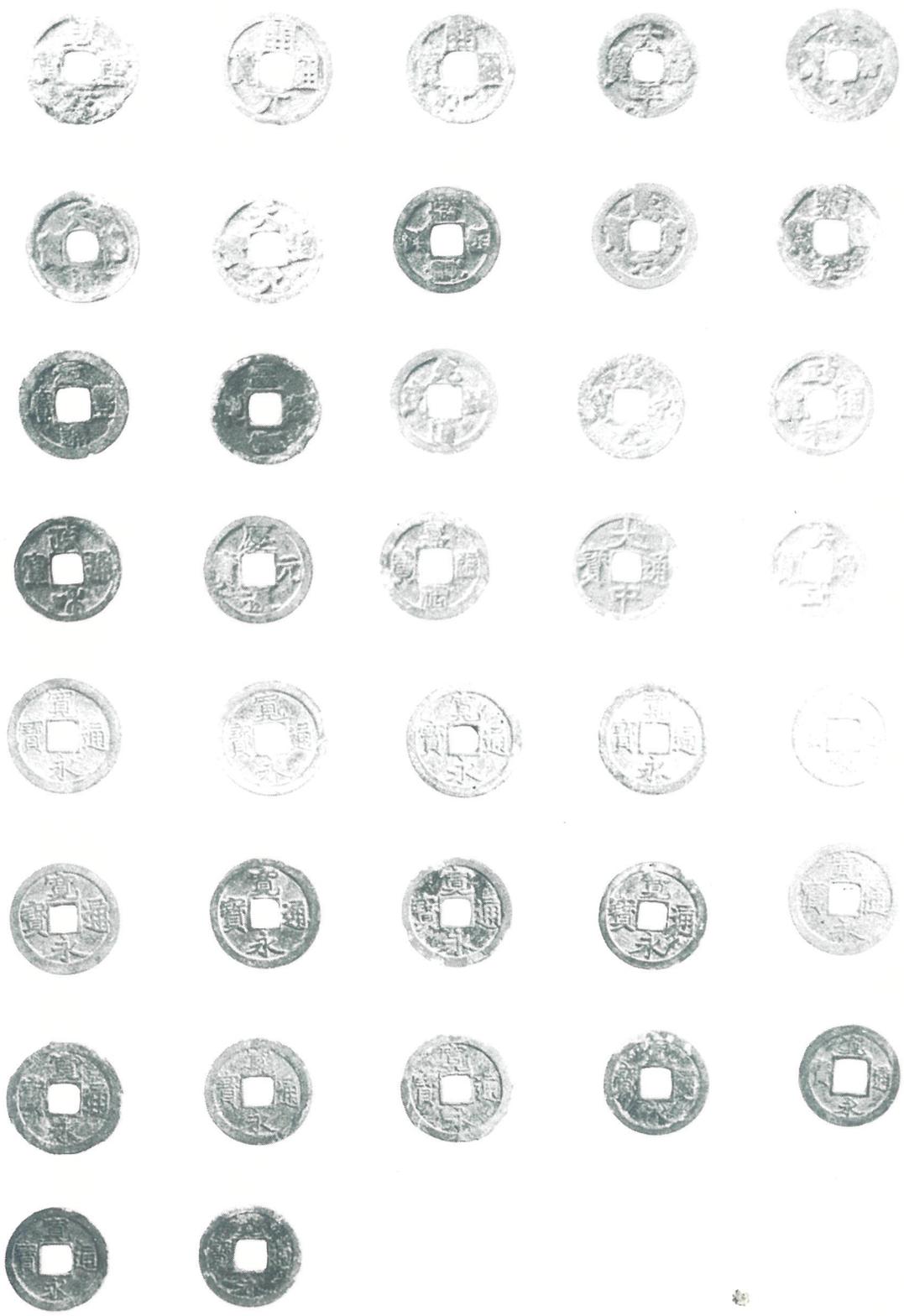


PL17 墳墓出土の釘、古銭、小札(上、4号墓・下、5号墓)

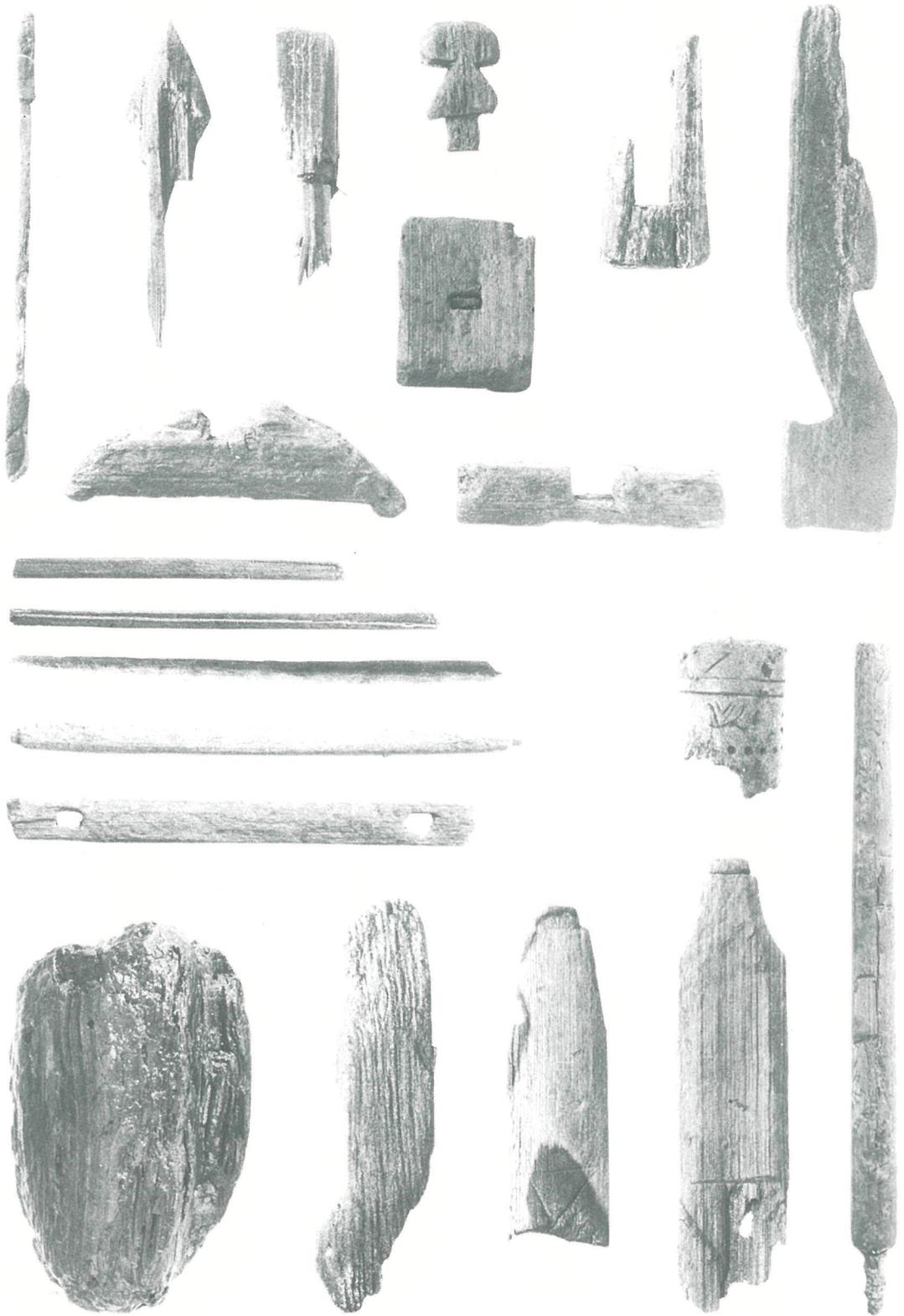


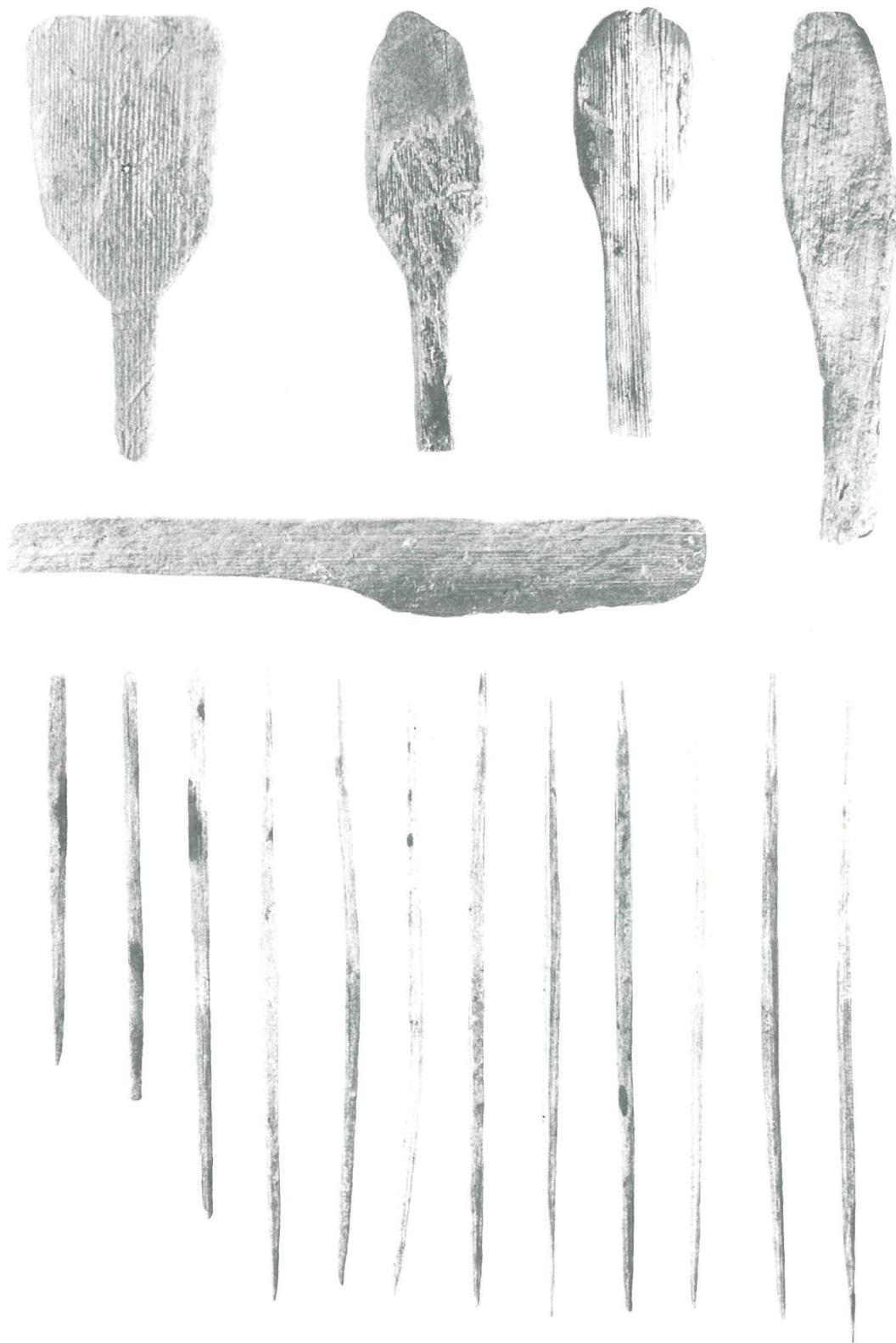


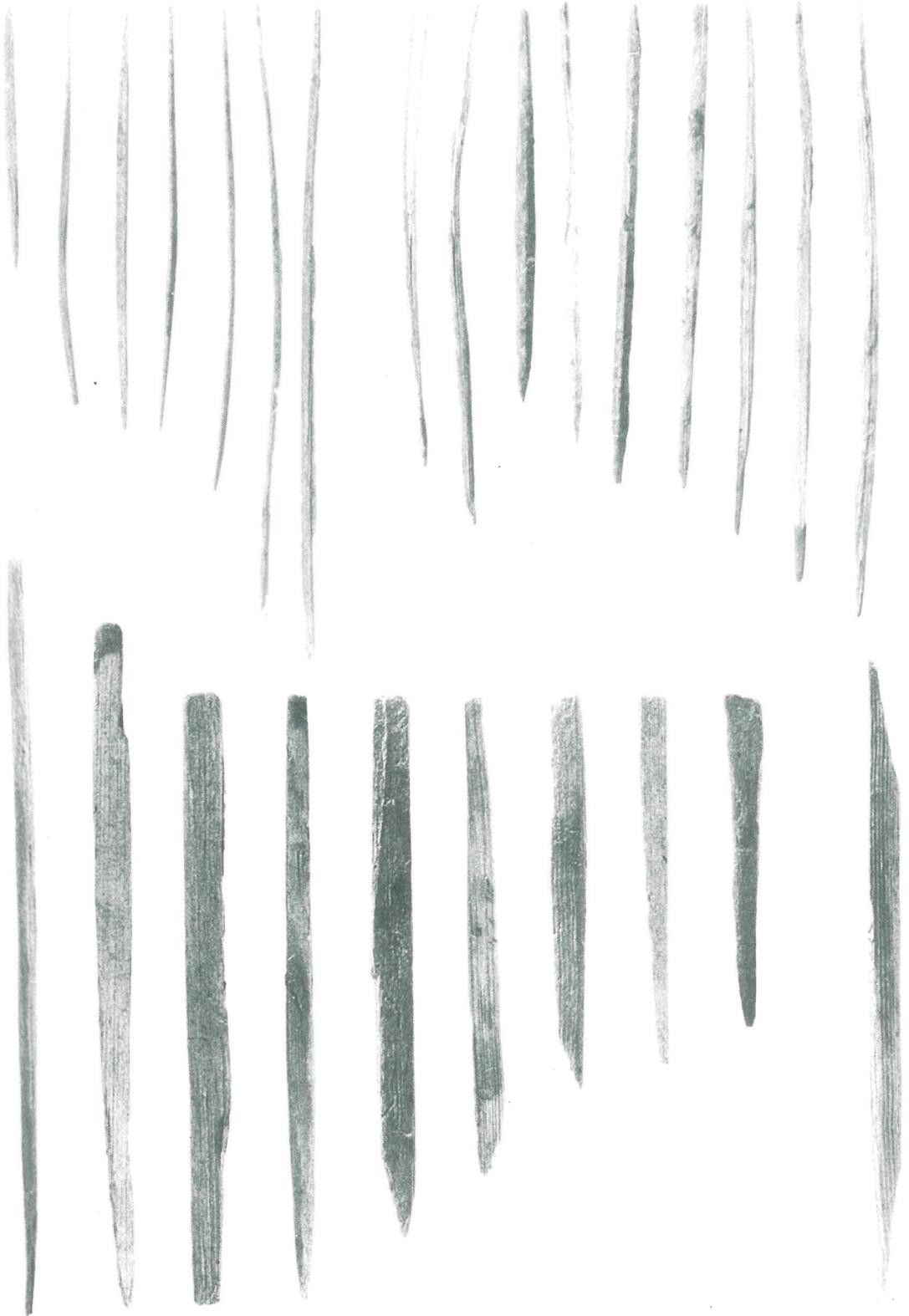




七





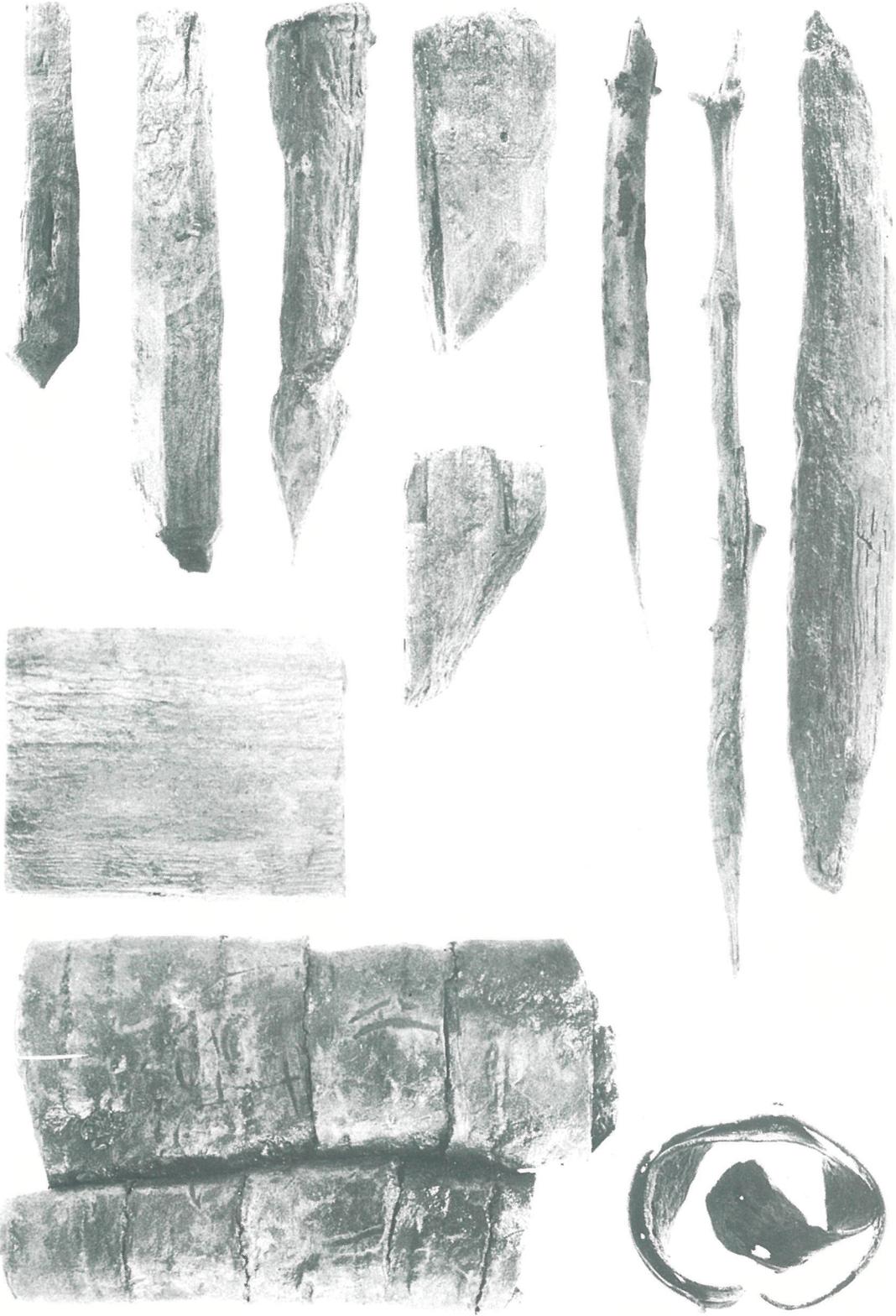




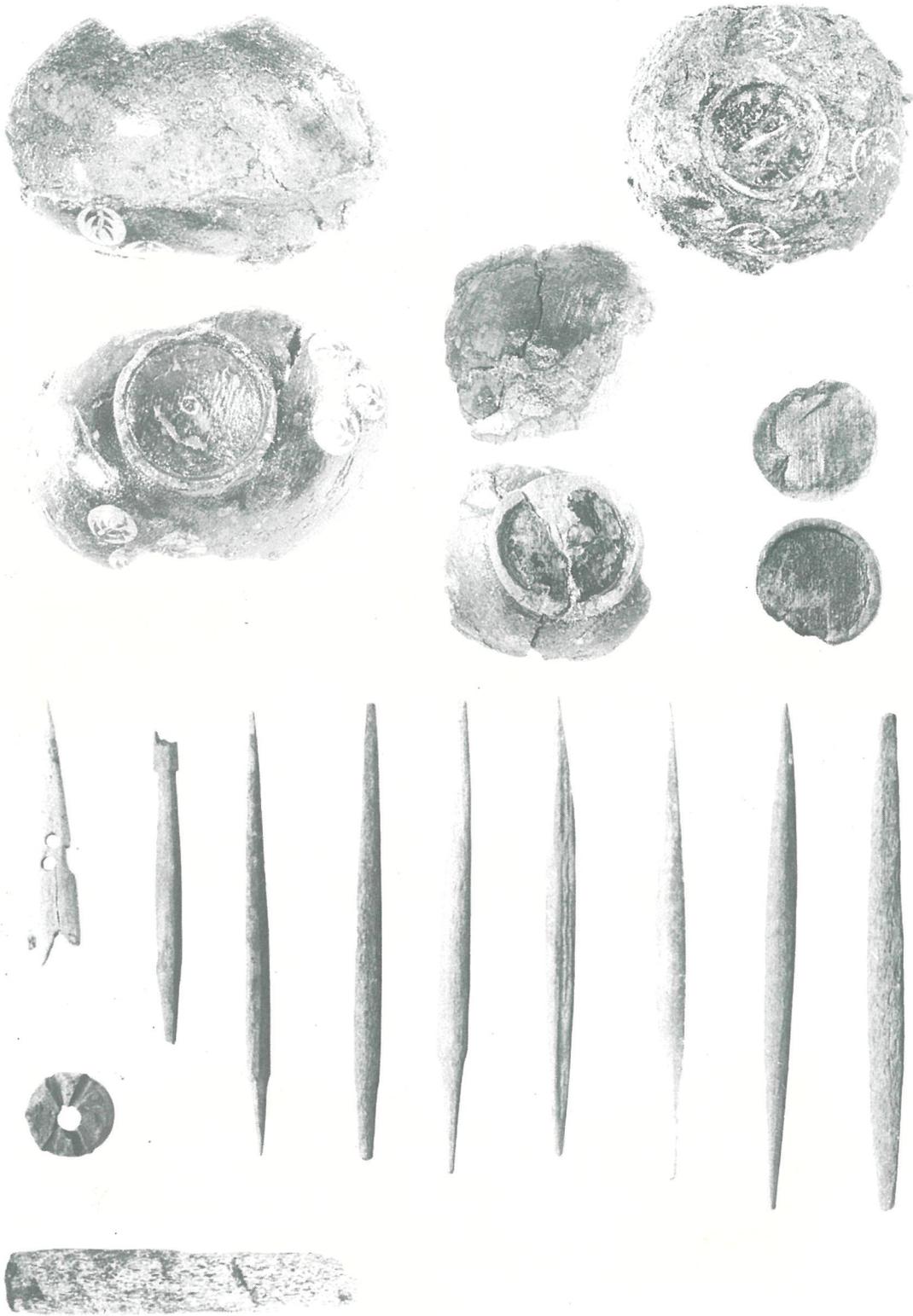




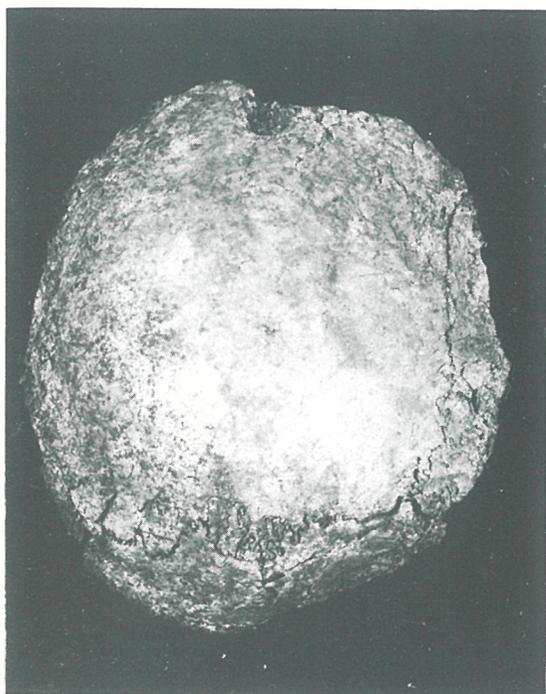




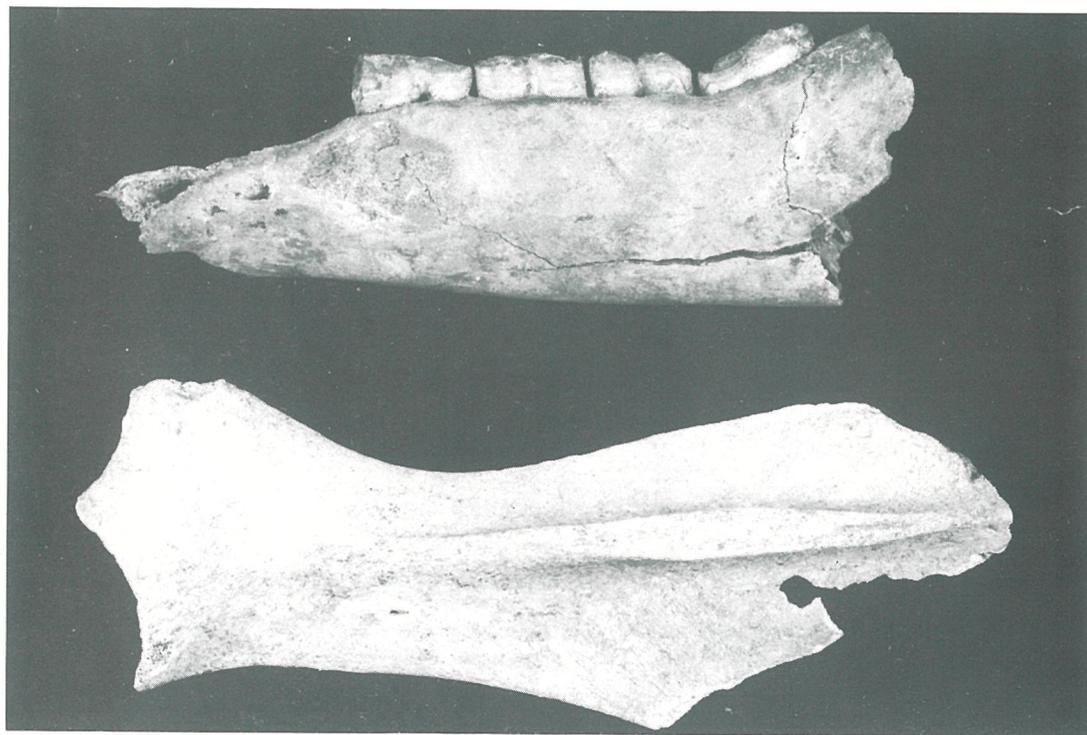




PL31 漆器(碗)、骨角製品



第4号墓出土人骨、毛髪(1/2)



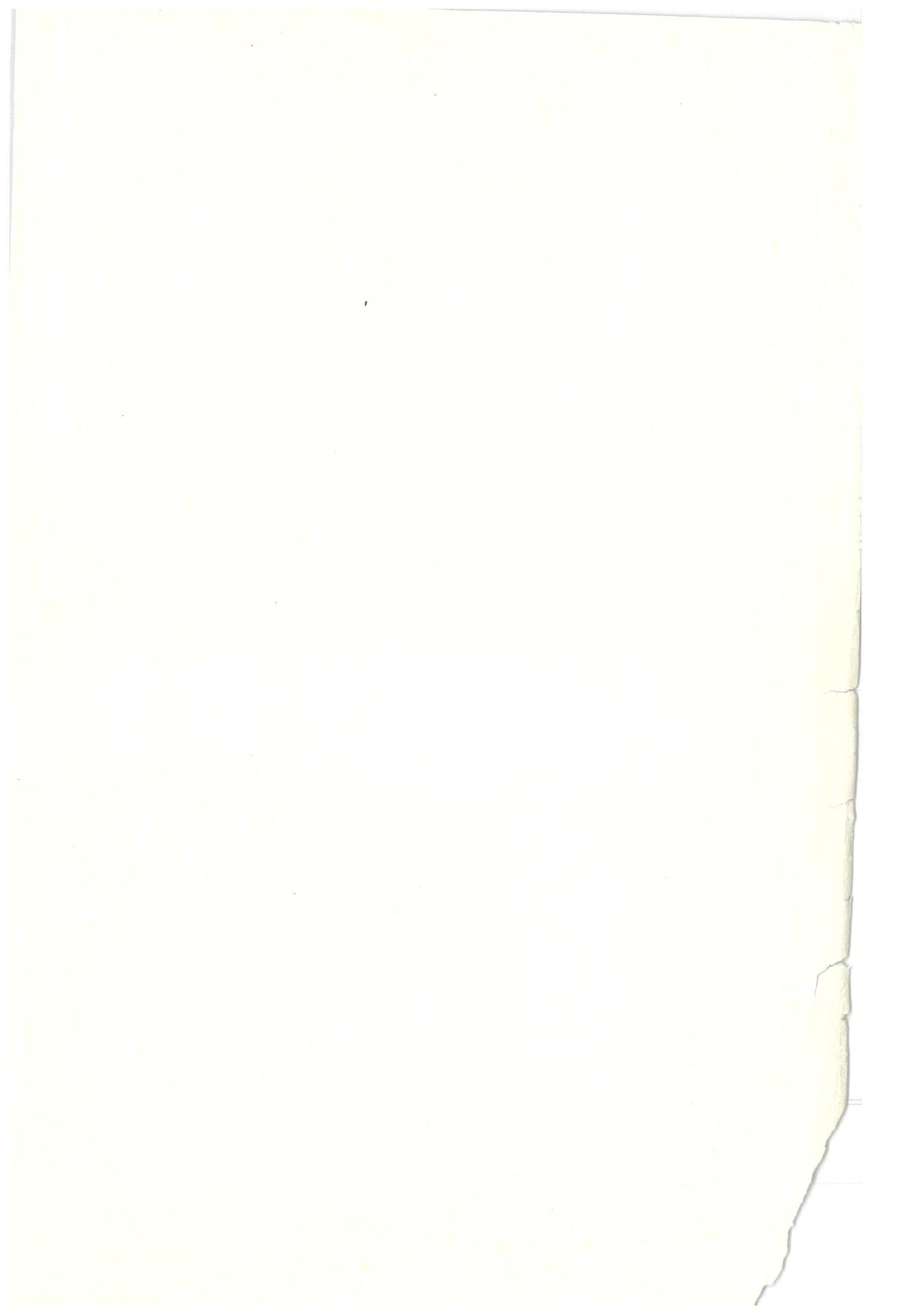
史跡上之國勝山館跡Ⅲ

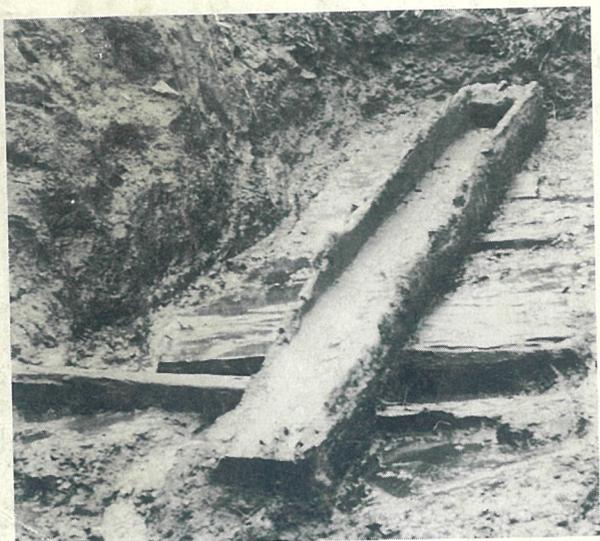
—昭和56年度発掘調査環境整備事業概報—

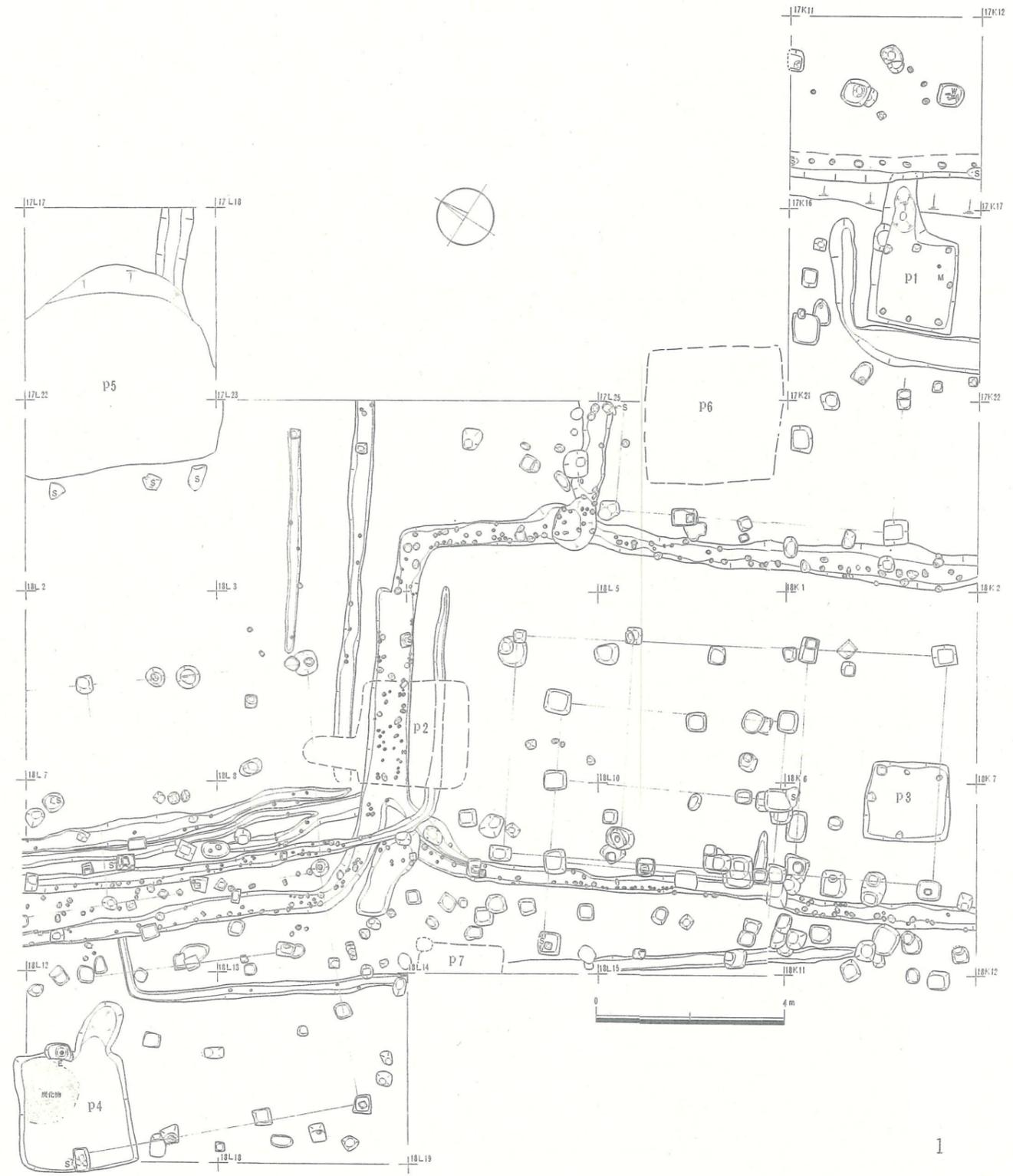
昭和57年3月31日 上ノ国町教育委員会発行

昭和58年4月10日 椋山考古学研究会増刷発行
(椋山郡上ノ国町上ノ国274 上ノ国町郷土館内)

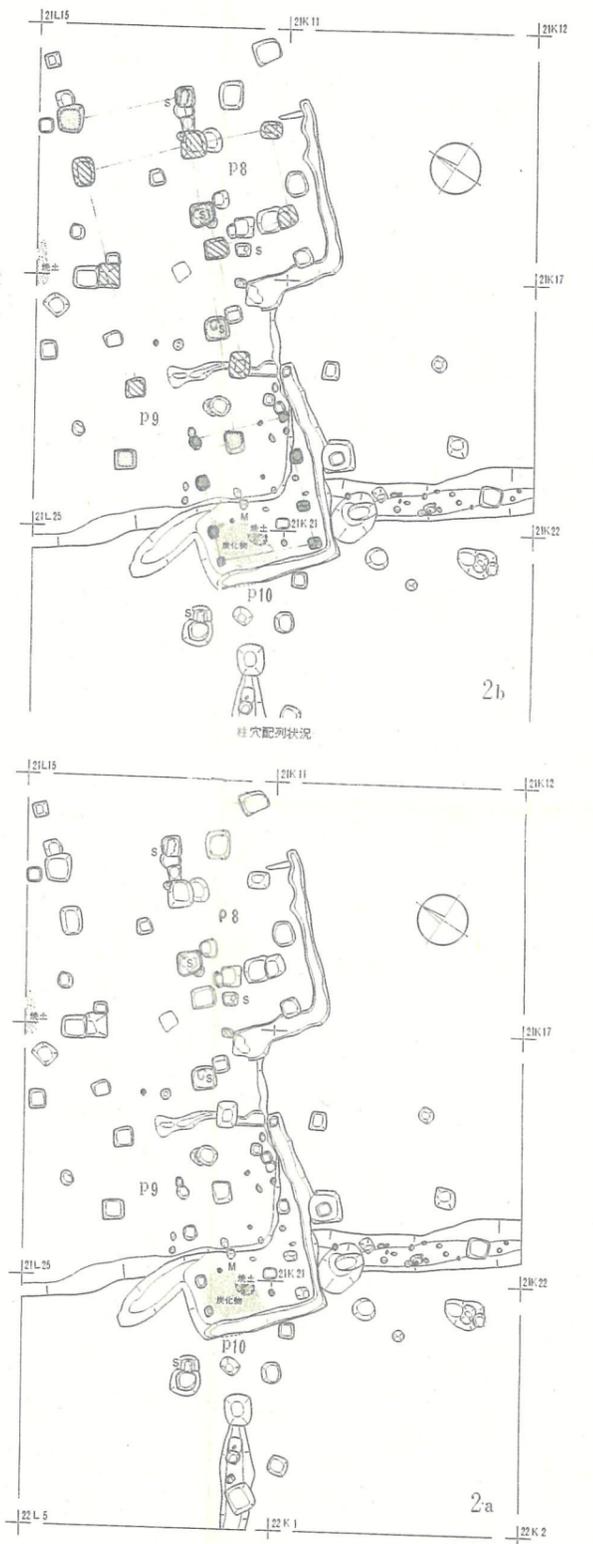
印刷所 富士プリント株式会社







附圖-2 建物跡・堅穴遺構実測圖(1,2)



上之園勝山館跡Ⅱ